
良い子の味方

ふり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

良い子の味方

【Nコード】

N7293W

【作者名】

ふり

【あらすじ】

幼いころの母親の影響から、保育士を目指している明るく元気な江里口爽奈。

病氣から回復し、1歳年下の爽奈と同じ学年になった円城寺侑治郎。

このふたりの視点を中心に、爽奈の3人の友人とともに繰り広げられる保育士専門学校の1年間を描いたほのぼのコメディー。

序章……涙の別れ

そこに流麗な歌声が響き渡っている。

居間の窓辺に、春のうららかで優しい陽光を浴びている親子が居る。

正座している母親の膝には、人形のように可愛らしい女の子が頭を置き、心安らかに小さく寝息を立てていた。

母親は、慈愛に満ちた表情を浮かべ、寝顔に目を注いでいる。女の子のお腹をぽん……ぽん……と、軽く叩きつつ、一定の律動に合わせて子守唄を歌っていた。

その歌声はどこまでも透き通っていて、どんなに感情が昂つていようとも、聴けばたちまち心休まると言っても過言ではないほどだ。どんな夢を見ているのだろうか。女の子が不意に、無垢な笑顔を母親に見せた。

母親は嬉しそうに口元に笑みを湛えつつ、もう片方の手で女の子の頭を優しく撫でる。

傍から見ても幸せそうな光景だった。

やがて、子守唄が終わりを告げる頃になると、ものの数十分しか経っていないであろうにもかかわらず、急激に外が真っ暗になっていた。いつのまにか居間の電灯にも白々とした光りが灯り、2人を明るく照らしている。

母親は顔を曇らせつつ、女の子の頭を撫でるのを止めた。すると、徐々に母親の体が少しずつ透明になって消えていくではないか。

異変に気づいたのか愛撫が止まったことに不満を持ったのか、女の子が指で目をこすりつつ目を覚ました。そこには、胸が張り裂けそうな悲しい顔で、女の子を覗き込んでいる母親が居た。

「ごめんね……本当にごめんね。爽奈ちゃん……」

母親が悲しみで口を震わせつつ言った。

爽奈と呼ばれた女の子は、理解できずにきよんとしていたが、

母親が透けて天井にある電灯が見えることに疑問を感じた。

「おかーさん。おかーさんは何でとーめいにんげんみたいなの？」

質問に答えている暇ない。そう判断した母親は、矢継ぎ早に伝えるべきことを伝えることにした。

「爽奈ちゃん。おかーさんはね、もういかなくちゃならないの」

「ええー、どこにいくのー？」

「遠くて近い所。……もう会えないけど、そこからずっとずっと……見守っていてあげるからね」

母親の姿がいよいよ消えようとしている。そのせいか、母親に話していると言うよりも、天井の電灯に話しているようにも思える光景だった。

「そんなのやだーっ。そーなもいきたいー！」

爽奈が顔を涙でくしゃくしゃにしてぐずり出す。

そんな娘を見て母親の目からも涙がこぼれた。ふと、庭に通じる窓に目を向けると、自分の姿がもう間もなく消えかけようとしていた。おそらく、あと二言ほと言うだけで消えてしまうであろう。瞬時悟った母親は、涙を指でさっと払い、精一杯の笑顔を作り、優しくげな口調で我が子に言う。

「泣いてばかりいちや駄目よ。爽奈ちゃん。爽奈ちゃんは、お姉ちゃんになったんだから。これじゃあ、赤ちゃんに笑われちゃうよ。

これからは泣く時と泣かない時を分けること。分かった？」

「う、うん……分かった。分かったから」

母親は爽奈の言葉を遮りつつ、

「うんっ、それでいいんだよ。おとーちゃんにも宜しくね」

言い終わるや、完全に姿を消してしまった。

「おかーさ」

どん、と頭を畳に打つ音が小さく鳴った。

その痛みに目を覚ました爽奈は、ひどく驚いた。

夢で膝枕をしてくれていたのは母親であったが、今、自分の顔を

覗き込んでいる見知らぬ女性の膝で寝ていたことに、少なからず衝撃を受けたからだ。

（この人……だれ？）

爽奈は、動揺の中にも疑問を生じさせる。なぜ、正面にはふつくらとした顔の見知らぬ女性が居るのか。

「爽奈ちゃん、起きたのね。もう少しで終わるからもうちょっと辛抱しててね」

女性がやや前傾姿勢になりつつ、ぼしよぼしよと小声で言った。

そんな女性の言葉は、今の爽奈にとって馬耳東風である。激しく動揺しながらも、そのままの格好で頭を左右に振り、母親を探した。しかし、居ると言えば、見知らぬ男性や女性ばかり。しかも、どうという訳か見渡す限り全員黒い服を着ている。

そのうえ、沈痛な表情の者、すすり泣きが洩れないように口元をハンカチで押さえている者、涙を目一杯溜めながらも気丈に正面を凝視している者など様々だ。

なおも動揺し続ける爽奈に突然、聴覚と嗅覚に意識が集中した。聞いたこともない単語を並べた歌のようなものを、おそらくは老人が、だみ声で唱えている。しかも何やらにおう。数年前、祖母が逝去した時と同じにおいだった。

とうとう爽奈はつっと立ち上がった。驚き呆気に取りられる女性を後目に、周りを目を皿のようにして見尽くす。だみ声のする方を見ると、坊主頭がある。僧服を着た僧侶が仏壇の前に座っていた。次いで、視線をやや上に移動させた爽奈の双眸に、白黒の遺影が映りこんだ。瞬間、石像のように固まった。

にわかに立ち上がった爽奈に、周りは目を瞠った。頭に疑問符を浮かべながら、ざわめき出す。

と、どうしていいか分からないといった風の女性の横に座っていた男が、異変に気づいて爽奈を座らせようと、女性の前を膝立ちでいざり、細い腕を引っ張る。

「こら！ いきなり立つ奴があるか。ちゃんと座ってなさい」

男の怒気をはらませた小声に立ち返った爽奈は、泣きつ面を作りつつ男の充血した眼を見る。

「とーちゃん……かーさんは死んじゃったの？」

既に泣き声とも言える声で、男に訊いた。

男はとっさの答えに迷い、唇を噛んだ。表情も怒から哀に近いものになる。少しの無言の後、ゆっくりと頷いた。

深い悲しみのどん底に一気に突き落とされた爽奈の眼から、おびたらしい量の涙が溢れ出した。

「うつ……うつ……」

顔を涙で歪め、眼をぎゅっと一度瞑った。それが契機となり、爽奈は大声を挙げて泣いた。

その声は先に天上に逝った母親に届いたのであろう。この日、空に1つの流れ星が流れたという。

01章……小学生……？

抜けるような青い空。春特有の柔らかい日差しが、木々や地面や人々を照らしている。長期に亘る寒い季節がようやく終焉を迎えた。知らず知らずであるが、人々の顔つきも寒さから解放されて朗らかだ。

「殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す」

そんな中で、うつむきつつ何やら物騒な言葉を、ぶつぶつと無表情且つ小声で吐いている小学生が居た。

その小学生は、周りの大人から見れば当然小さいが、同じ歳の子どもに比べれば平均的な高さと言える。

しかし、キヤラもののトレーナーに、白地に水玉模様を浮かべたスカートと言う出で立ちだ。

加えて、襟足より少し伸びた後ろ髪と眉を覆い隠す前髪のショートヘアであるのに、左側頭部の髪を小さくまとめてゴムで結んでいる。ちょうどその部分だけ擬態語を用いて言うなら「ぴよこん」と出ている感じだ。

更に小学校1、2年生が被るような真っ黄色い通学帽を深々と被り、赤いランドセルからはリコーダーが少し顔を出している。手さげ袋も、でかでかと可愛くデフォルメされたよりもよっておこじよが貼ってあった。

……以上の点からどうしても、格好のせいで実年齢から3、4歳幼く見えてしまう。彼女も好きでこんな格好をしているわけではない。年相応の格好をしたいと願っている。しかし

「おっはよー」

と、後方から明る気な声が聞こえてきた。

彼女がとつさに口を引き結んで笑顔を作りつつ振り向くと、同級生らしき少女が駆け寄ってくるではないか。

内心では舌打ちをしながらも、にこりと笑い、年相応の声でやつ

てきた女の子の名札と顔を素早く交互に見て、挨拶を返す。

「おはよー。えーっと……ゆりちゃん……？」

途端にゆりと呼ばれた少女が、ぷうつと頬を膨らます。

「違うよー。一般的には百合は”ゆり”って読むけど、私の場合は”りりい”って読むんだよ。……昨日も言っただよねえ？」

最後の方はやや責める口調だったので、彼女はかちんときた。が、おくびにも出さずに困った顔の作り、素直に謝る。

「ごめんごめん。わざとじゃないんだよ。この頃みんな個性的な名前でさー。ほら、隣のクラスにゆりちゃんっているじゃん。百合ちゃんと同じ漢字のさ」

彼女は歯切れの悪い口調で言った。

そう言われてみればと、百合は苦笑する。

「そうだね。隣の子と一緒になっちゃうよねえ」

（いるのかよっ！）

心中では、すかさずつつこみをいれた。だが、口に出してはまずいと、何とか出てきそうな言葉を飲み込む。

「おっはよーっ！」

2人の許に元気よく走ってくる少女がいた。かなり離れていたのだが、たちまち追いつき、ぱつと笑う。

「おはよー。るなちゃん」

「うんっ。おっはよう！ りりーちゃん」

「だから、後ろは伸ばさないでよ。小さい”い”なんだから」

「たはははは。ごめんごめん」

るなと呼ばれた少女は軽く笑って見せた。

彼女は、突然の”るな”と呼ばれている闖入者に、目を瞠っていた。

（こ奴……小6の分際で少し胸があるではないか。しかも背え高いなあ。なるさんが自分の背を165って言ってたから、160はあるかな。にしても）

百合と仲良く談笑しているるなの胸をちらつと盗み見る。

（羨まけしからん。私なんか……）

両手をそれぞれの胸に置く。そして、2度3度さする。微々たる膨らみはあるが、皆無に等しい。

それに対してるなの胸は、まだ小さいながらもはつきりとした膨らみがあった。

虚しさと悲しさで胸が痛む。彼女が少し顔を下げ、溜息を小さくふうつと吐いた瞬間に、不意に声をかけられた。

「どーしたの由加^{ゆか}。胸に手を置いて溜息なんかついちゃって」
るなが挨拶と同じ調子で言った。

彼女 由加は反射的に顔を上げて、微笑む。当然、るなの名札を確認しつつ。

（月と書いて”るな”って読ませるのかー。ま、”らいと”よりはましかもね。それにしても、この2人の親のツラを一度でいいから拝んでみたいものだね）

由加が黒いことを思っているなど露ほども知らない月^{るな}が、あつと言いながら手をぼん、と打った。

「胸が小さいことなんか気にすることないよ。私なんかあつたって邪魔だし、ブラジャー着けんの激しくめんどいし」

ずばっ。

百合も月が言った前者のみを肯定しつつ、同調する。

「そうそう。私達はこれからだよ。きつと、これから大きくなるよっ。だから毎日牛乳飲んでがんばろっ。ねっ」

ずばっ、ずばっ！

「う、うん」

困惑を混ぜた微笑みを2人に返しつつ、由加は思う。

（くはっ……侮っていた。多分、悪気はないんだろうけど、思ったことをずばっば言われるとは……。小6なのに、まだまだ子どもってことか。それにしても、刀で斬られたことはないけど、斬られるとこんな感じなのかな。胸がずばーって切り刻まれたように痛い。さ、さあって、内面創痕の私に次は何を言うのかな）

「由加ちゃん、危ない！」

「へ？」

慌ててスカートを押さえている百合に、目の焦点が合っていた。

「隙ありっ！」

掛け声一閃、由加のスカートはふわりと浮いた。当然、下着も顕^{あらわ}になる。

「よっしゃ　っ！　ゆーかのパンツ、真っ白けー！」

少し前方から、歓喜と勝利が一緒になった声が聞こえた。

スカートをめくられた由加は、何が起こったのか理解できずに、その場に立ち尽くしている。

「もー、孝一^{けいいち}のスケベ、ヘンタイ、煩惱^{ぼんご}の塊　っ！」

頬を朱に染めた百合が、スカートをめくった半袖短パンの少年に、非難の声を浴びせた。

「ぼ、ぼんのーのかたまりい？　何だそりゃ」

「知らないけど、お母さんがお兄ちゃんに言ってたの！」

「意味も分かってないのに、言うなよ。ブスー！」

「うるさーい、この年から年中短パン小僧！　ポ　モンの世界に行つて帰って来るな　っ！」

そのまま2人は、如何にも小学生らしい口喧嘩に突入した。

「あーあ、まーた始まっちゃったなー」

月は両手を後頭部で組んで、半ば呆れた様子でつぶやいた。

「くすん、くすん……」

「あれ？」

いつの間にか由加が両手で顔を覆い、泣いていた。

「ひどい……ひどいよお……」

手の中のくぐもった声は、嗚咽を混じらせており、聞く者の良心が痛むには十分過ぎるほどだった。

月は由加の帽子を取り、頭を優しく撫でつつ、百合と孝一に呼びかける。

「ちよつとー、お2人さんストロップ！」

2人が月の声に反応して口合戦を止め、月の方を見る。由加の様子
子が明らかにおかしい。

百合が軽蔑の表情で孝一の頭を叩く。

「ほら、由加ちゃんが泣いちゃったじゃない。謝ってきなよ」

孝一がしまったと言う顔になる。

「そ、そうだな」

困り果てた様子で由加の許に歩み寄る。そして、さっと頭を下げた。

「ごめん！ マジでごめん！ ほんとーにごめん！ 許してください！」

言い終わると、由加の嗚咽が収束していった。ほつと息をつく。
が、しかし、突如として胸倉を掴まれるや、そのまま持ち上げられ
て地面から数十センチ浮いた。

突然のことに意味が分からなくなった孝一は、正面を見た。すると、怒気も顕にした由加が、右手1本で自分の胸倉を掴んで、軽々と持ち上げているではないか。しかし、割と幼い顔立ちな為、いま
いち迫力に欠けてはいたが。

「ごめんで済むなら警察はいらねえんだよ。このうすらヴォケが！
てめえは何しくさつたか分かってんのか。あ？」

その代わりドスがかなり効いていた。一気に恐怖感がこみ上げてきた孝一は、思わず目をついと月の方に逸らす。と、月がぽかんと口を開けて、半ば無意識に由加の頭を撫で続けていた。さらに首をやや後ろに回して目の端で百合を見ると、魂を奪われたかのようにその場に立っていた。

「ど・こ・を・見ているのかなー？ こっちを見ないと痛い目にあ
わせるぞ！」

「は、はい！」

首を素早く回し、再び正面を向く。

「全く、嘘泣きなんて何十年振りに使ったことか。それで、ほいほ
い謝りにくるとは……ははっ、間抜けも間抜け、大間抜けだねえ。」

いや、今どきの小学生　しかも高学年は、小生意気なガキつばっかだと思っていた。けど、あんたも含めて案外、純粹なんだね！。お姉さん、感心しちゃったよ」

はっはっはと愉快そうに笑う由加。

「お姉さんってあんた……あ、ごめんなさい。えーっと……あつ、あなたは由加じゃないんですか」

孝一は苦しげに言った。

「はははは、違う違う。そーだ、証拠を見せてあげようか。ほら、そっちに居る子もこっちにきなよ」

余った片手で百合を手招きする。

百合はなぜか自分でもよく分からないが、引きつった笑みを作り、由加の所へ駆け寄る。

「よし、揃ったね！。うん、貴様邪魔」

ぱつと孝一の胸倉を離す。

あまりにも突然だったので孝一は、足で着地することが叶わず、尻餅をついてしまった。

由加は、そんな孝一を一顧だにもしないで、手さげ袋のチャックを開き、財布を取り出す。さらに財布を開けて、1枚のカードを取り出して3人に見せつけるように、正面に突き出した。

「じゃーん！　これは何でしょーかつ？」

3人がカードをまじまじと見る。因みに、意識的なのか無意識的なのか、氏名欄の苗字の部分と本籍欄と住所欄は、指で押さえられている。

「め、免許証……？」

百合が生唾を飲み、恐る恐る言った。下手に変なことを言えば、何をされるのか分からない状況になったからである。

「そー、大当たり！　じゃ、名前の横を背え高の子読んでみて」
月がこつくりと頷く。

「えーっと、昭和63年5月5日生……。あれー？　ということは……」

「由加じゃないの？」

月が言いかけた言葉を百合が継いだ。

「そーなの。私は、君らが言う由加ちゃんじゃないんだよねー。名札を見てくれれば分かるけど、爽奈って言う名前で、年も小6の1か12じゃなくて、20歳。つまり、はたちのお姉さんなんだよ」
にいつと3人に笑いかける爽奈。

3人は級友じゃないこともそうだが、自分達よりも8歳も年上の女性に対する数々の行為を思い返していた。それぞれの胸中に、えも言えぬ重圧が押し寄せる。

「ごめんなさい」

重圧に耐え切れなくなり、子どもながらに気持ちを精一杯込めたつもりなのだろう、体をきちんと折った真摯な謝罪の言葉が発せられた。

爽奈はいささか慌てた。まさかそんなに丁寧に謝られるとは思ってもしなかったからだ。

「いやいやいや、そんな体まで折ることはないって言うか謝ることないんだよ。うん。私も紛らわしい格好だしさ、間違えられても仕方ないんだわ。何せ、身長もりりいちゃんだっけか。同じくらいだしね。にしても、百合でりりいは読めなかったよー」

「紛らわしくてごめんなさい」

「いやいや、いいんだよ。今の時代名前っつーのは、個性重視なところがあるからねー。胸を張ればいいと思うよ。多分、そのうち成長するから。あ、でも牛乳はあんまり当てにならないから、キャベツがいいかもね」

「あ、ありがとうございます！ 私、頑張ります！」

顔をぱあつと輝かせる百合。

爽奈が満足そうに親指を立てると、月に顔を向ける。

「月と書いてるなちゃんだっけか。いやー、私は君が羨ましい！ 背は高いし、胸も成長が大いに見込めるものだし、足は速いし、可愛いしー。しかも、元気一杯な性格でなかなか思いやりもあるとき

たもんだから、ある意味超人だわー」

「そうですかー？ やー、そこまで言ってもらえると照れますよー。

……そう言えば、さっきは失礼なことを言ってすいませんでした。

あと、気安く頭を撫でてしまっ

「んなこと、気にすることはないよー。確かに、ブラジャー着けるのめんどっちいって言った瞬間は、ぷつつんして胸を揉みしだいてやろうかと思っただけど、私の嘔泣きに反応して頭を撫でてくれて、評価が一変したね。君はマジで良い子だ！ 悪い虫にとっ掴まらな

いことを祈ってるよ」

「はい、あざーっす」

右手を高々と上げて、無邪気に喜ぶ月。

「さて、最後はっ……」

孝一の方に目をやる爽奈。

孝一は、恐怖を直感的に覚えたのだろう体がびくんと震えた。

「勇敢なる戦士君 やや、名前が普通過ぎる孝一君と言ったかな。君はとにかく元気が良くて宜しい！ お姉さん感心しちゃうわー」

2人に話していた時と態度が全く変わらず、しかも思いがけず褒められたことで、孝一は照れ笑いをする。

爽奈とともにめくられかけた百合は、面白くないと言った顔をしている。

「だがしかし、君は私を怒らせた。私は、やられたことはやり返す性質でね。仕返しはちゃんとさせてもらっよ。なぜなら君は、まゆつちの下着を見てしまったからねえ。友達の仇は討たせてもらっよー」

まさに天国から地獄である。

表情が喜から哀になった孝一を見て、爽奈は更に付け足す。

「大丈夫、大丈夫。痛いのはねー、うーんっ……数十秒から1分間ぐらいだから さーあ、選んでもらいましょっか！ 電気アンマがいいかカンチョーがいいかくすぐり耐久がいいか。3つの内1つをどーぞ！」

どれもこれもただでは済まなさそうなものばかりである。

孝一にしても、3つ全てが凄く嫌だったのだが、逆らえば痛い目に遭わせられることが目に見えているから、素直にしばし悩んだ。悩みぬいた末に、か細い声で爽奈に告げる。

「最後のくすぐりをお願いします……」

やっぱり、痛みよりくすぐったい方がまだ良いと考えたのだろう、賢明な選択だ思われた。

しかし爽奈は、口の端を吊り上げて含み笑いを口腔に響かせる。

「ふうん、くすぐりねえ……。じゃ、始めますか」

その爽奈の様相を見て反射的に1度、おこりのように体を震わせる孝一。選択肢を間違ったと悔やんでも、最早後の祭りである。

やがて、爽奈が孝一の前に立った。両手をまっすぐ上げ、手首を曲げて指を動かし、手の形を変える。熊が人間を襲うような格好だ。孝一は、生唾を音を立てて飲み込んだ。その顔は恐怖と不安に包まれ、ともすれば泣きそうである。

爽奈の両手がゆっくりと下ろされ、脇の下辺りに至った。

その瞬間、朝の通学路に、何とも形容しがたい悲鳴が響き渡った。

02章……仲がよろしいことで

爽奈こと江里口爽奈は20歳になっていた。母親の奈津美が逝去したのは8歳の頃であるから、既に12年もの月日が経過していた。葬式の時泣き倒したが、年月を追うごとに母の死のショック少しずつを乗り越えた。割と大らかな父親のもとで育ち、反抗期も皆無だった。

残念ながら肉体的な成長にあまり恵まれず、身長は144cmほどで止まり、胸もまな板やら洗濯板と言われても仕方がないくらいである。それでも心身ともに健康に育ち、大病を患ったことさえも皆無であった。

高校を卒業した後、とある県にある野瀬市の野瀬保育専門^{のせ}学校に入学を果たした。

因みに、学科は幼稚園教諭保育士養成科である。この学科は2年間で修了し、卒業と同時に幼稚園教諭2種免許と保育士資格取得することができる。何ともお得だと思われるが、その分講義が月曜日から金曜日をほぼきつきつに埋められるので、遊ぶ時間などほとんどないのだ。

学友達の助けもあり、何とか1年時の学習内容を修め、本日から2年目に入る。

そんな爽奈は急いでいた。小学生に絡まれてかまっていたら、すっかり到着時間が遅くなってしまうたからである。

現在の時刻は、8時25分。普段なら講義は9時から始まるので、8時50分頃に学校に到着していれば良いのだが、今日に限って事情が異なっていた。

「何でよりもよって今日なんか、ホームルームを行かなー」

……

爽奈が不満をぶつぶつと独語した通り、8時35分からホームルームを行うと昨晚いきなり、担任からメールが届いたのだ。

「全く、こういうことはもつと早くから報せてもらいたいよ」

そうこうしているうちに校門を駆け抜け、校舎内に入った。階段を1段飛ばしで上り、教室に勢いよく駆け込んだ。

「8時30分！ よーし、間に合った　っ！」

爽奈が諸手を上げ、歓喜の声を教室に響き渡らせた。

その声に反応して数人の女子が、爽奈の方を見る。すると、途端に三者三様の表情となり、そのうち眼鏡をかけた女子がこちらに走ってきた。

「おー、まゆっちではないか。おっはよう！　今日もナイス眼鏡だね！」

「そーちゃん、どうしたのその格好？　まるで小学生みたいだよ」

優しく柔らかな印象の卵型のオーバル型の眼鏡と和するように、眼を丸くして驚くまゆっちと呼ばれた彼女の名前は、なりまつ まゆ成松真優。爽奈とは1年時の頃からの親友である。肩先まで伸びた後ろ髪を、水色のリボンでポニーテールにしている。背格好は爽奈と似ていて、結構小さい。それでも、身長と胸の大きさは爽奈より少しは勝っている。

「はーっはっはっは、ちょいとあそこに居る性悪眼鏡にゲームで負けちゃったもんでね。罰ゲームでこんな格好をさせられちゃたわけ」
爽奈がびしつと人差し指で指す先を見ると、口辺に今にも噴き出さんばかりの笑みを溜めている眼鏡の女子が居た。

真優は、得心がいったと感じで首肯する。

「さやっちゃんは、容赦ないからね。でも、そーちゃんもあんまりやらないゲームをよくやったね。相手はプロ級なのに」

「うん、乗った私も馬鹿だった。けど、挑発されたからには、どーしてもあの鼻っ柱を折って、ぎゃふんつて言わせたかったんよ」

「そーちゃんは本当に、負けず嫌いだねえ」

爽奈と真優が揃って歩き出し、談笑しながら2人の許へと向かう。ふと、爽奈の視界に見慣れぬ男が入った。なぜか不審に思う。しかし、真優との談笑の方が大事だと思い、たちまち男の存在を脳内

から消し去った。

「おはよー、性悪眼鏡になるさん」

性悪眼鏡と面と向かって言われた女子は笑みを壊し、眼鏡のリムを指で挟みながら怒気を発する。

「誰が性悪よ。このドチビ！ あんたが負けたのが悪いんでしょ。うが。いい気味よ。それにしても、チビで童顔だけあって小学生姿がよく似合うわね。今日はそのままいたら」

言い終えて、意地悪気な笑みを満面に湛える。

「うっさいなー、でか女。性格が良くて黙ってりや器量よしなくせに、本っ当台無しだわ。そんなんだから、男が寄って来ないんだよー。っーか、普通に着替え持ってきてますから。年相応の恥じらいぐらいありますから」

「お、男が寄ってこないのと性格は関係ないでしょっ！ そ、それに、去年まで似た様な格好で学校に来てたのは、何処の誰かさんかしら。私や成佳なるかや真優が、コーディネートしたおかげでまともになつたくせに」

「あはは、あんたが選んだ奴なんか、タンスの肥やしになってるよ。そのおかげで他の服がすすくと育ってるしね」

「ちよつと、それどういう意味？」

「虫食いの被害が、あんたの選んだ服だけにいつてるってこと」

「なっ………！」

爽奈と会うや口論を始めた彼女の名は、百武紗弥菜。ひやくたけ さやな 爽奈とは1年の頃からの付き合い。いつ頃かは定かではないが、気づいたら会うたびに口論をする仲になっていた。やや切れ長な眼に、長方形に近い形のスクエア型の眼鏡をかけていて、腰まで伸びた黒髪を背になびかせている。背が高く、170cmはある長身で且つスタイルも良く、モデルにでもなれそうな体躯だ。胸も大きく、爽奈や真優とは対照的である。

「まあまあ、2人とも朝からそんなに喧嘩しないの。爽奈ちゃんは、着替えるんなら着替えちゃいなさい。私達が壁になってあげるから」

2人の間にやんわり割って入った彼女は、木下成佳^{きのした}。他の2人と同じく、爽奈とは去年からの付き合いで親友。何もかもを優しく包み込むような、まるで聖母を思わせるような雰囲気を纏った人物である。人好きにしそうな少し垂れ目勝ちな眼をしていて、黒く長い髪で割りとは目な2本の三つ編みを作り、余った髪とともに背に流している。背はそこそこ高い方なのだが、紗弥菜よりは少し低い。しかし、その分胸が圧倒的な大きさを誇っており、それでいて腰周りも細いものだから、クラス中の女子の羨望の的となっている。

「はい。分かりましたー」

「ふん、成佳が言うなら仕方ないわね。って……注意しながら爽奈と私の髪のおいを嗅がないでよ」

紗弥菜が若干呆れる視線を投げかける先には、成佳がすんすんと小さく音を鳴らしつつ顔を首を上下させていた。

はっとした成佳は、ばつが悪そうに苦笑しながら、

「あ、ごめんねえ。つつい癖でやつちゃうのよね。本当に、みんな良いシャンプーやボディソープを使ってるわ」

それでも、うつとりとしていて幸せそうな顔に瞬時に戻った。

紗弥菜は呆れ顔だが、爽奈と既にかがれていた真優は、別段気にしなくなった。なんせ、去年から続いている習慣みたいなものだからだ。

「ほら、早くしないと先生が来ちゃうよ」

真優が、黒板の上にある時計を見つつ、急かすように言った。

3人が爽奈を囲みその中で爽奈が着替え始める。キャラもののトレーナーとスカート^{スカート}を素早く脱ぎ、別の袋に押し込んだ。

「あれ？ それって私の……」

爽奈の穿いているショーツを見て、目を白黒させる真優。

「あー、昨日言うの忘れてたけど、借りたよー」

「何で自分のを穿かなかったの？」

「あの辺の通学路には、スカートめくりの達人が居るって風の噂で聞いてね。だから、私のじゃ鼻血出してぶっ倒れるんじゃないかと

思つて、割りと幼げなまゆつちのを借りたわけさ」

「まあ、別にいいけど……で、結果はどうなったの？」

「今朝達人　まあ、悪ガキだったんだけど。そいつにスカートをめくられて、見られちゃったけど。奴が泣くまで！ 私は！ くすぐるのを止めなかったよ！ まゆつちの仇だーって言いながら」

日頃穿いているショーツが、爽奈を通して衆目に晒されてしまったことに、まるで自分がめくられた被害者にもなったと感じた真優の双眸に、みるみるうちに涙が溜まってきた。

「あんたねえ……。新学期早々真優を泣かせてどうすんの」

紗弥菜が呆れ返った様子でつつこむ。

「あらららら……。ごめんねまゆつち。アパートに帰ったらさ、実家から送られたお菓子をあげるから、泣かないで」

爽奈は、手を合わせて懇願した。

「本当っ！？」

すると、潮を引くようにして真優の双眸から涙が消え失せ、屈託のない笑顔を見せた。

「これでよし、と。お2人と性悪子さんサンキューでした！」

着替え終わった爽奈が、片目をつぶって親指を立てて見せた。

「だから、誰が性悪か！」「おはようございまーす」

紗弥菜のつつこみと担任が入って来たのは、偶然にも同時だった。

03章……背え高のつばの誰かさん

ホームルームの連絡事項がつつがなく終了した時、クラスの数少ない男子が自然と女子と離れた所に寄り集まり、こそこそと話していた。中には軽く鬱になったのか頭を抱えている男子もいる。

爽奈達が所属する幼稚園教諭保育士養成科は、2クラスに分かれている。生徒を総計すると80人。うち10人が男子で、それが男女半々分けられるから、1クラスに35人の女子と5人の男子という構図ができあがる。まるで、共学に成り立ての元女子高のような男女比率である。

必然的に女子がどう思っているようにも男子は、様々な意味で肩身の狭い思いをせねばなくなる。女子に苦もなく話せる男子にとっては、天国とも何ともないと思われるが、みんながみんなそんな男子ばかりではない。中には女子と話すことがどうしても馴染めず、内向的な男子もいるであろうから、この状況を苦痛と感じる者もいる。それが前述した頭を抱えている男子である。

しかし、彼が頭を抱える原因は違った。むしろこの状況は、昨年から1年も続いているので、こんなことでいちいち頭を抱えるわけがない。問題は、ホームルームに告げられ、配られた用紙にあった。

告、ここに書かれしことをなるべく実行すること。

1つ、定められた班の女子（または男子）と1人につき1日10分〜20分は会話し、コミュニケーションを図る事。何でもいいんですよ。何でも。そう、何でも……。まずは話すことからです！！！！

1つ、今夏ひと月に涉って行われる実習時は、なるべく定められた班で行動すること。なるべく私も便宜をはかります。

1つ、定められた班でボランティア活動も積極的にすべきこと。尚、班で活動した時のみ1日ボランティアした分が、2日分になることもある。私は楽しみにしていますが、みなさんは面倒臭い

の一点貼りで卒論なんか書きたくないでしょ？　だったら、頑張るましようよ！！！！！！

似上のことをまもらかった人は、単位をあげませんからね！　べ、別に、学長先生若ーいとか美人とか……賛辞の言葉を用いて書いた文章を、書いて、欲しく、なんか、ないんだからねっ！　い、1万文字までなら見てやつてもいいわよ……！（／／／）

以上

「相変わらず、そこら辺のがきみたいな文章だね。もう、45歳だって言うのに」

爽奈が小馬鹿にしたような口調で言った。

真優が顎を引いて同意する。

「そうだね。45って言うと、うちのお母さんと同じ歳だけど、こんな文章書かないよ」

「それより、みんな同じ班で良かったね。離れ離れになったら、どうしようと思ったわぁ」

笑顔を浮かべながら、しみじみと成佳が言った。

「なるちゃんは、誰とでも仲が良いから大丈夫だよ。私なんか、よく話したこともない人が居るから、ときどきしたよ」

胸に手を当てて、ほっとした表情を見せる真優。

「それにしても、男子ってのは大変だねえ。小さくなってびくびくしてなきゃいけないんだから。まるで、ライオンの群れに紛れ込んだシマウマみたいだ」

いつの間にか爽奈は、教室の隅でひそひそと会話を交わしている男子連中の方に、体を向けていた。

そんな男子連中を女子達の半数以上は、端から眼中にないのか無視を決め込んでいるが、談笑しつつ時折ちらちらと様子を窺う者も中には居た。

真優は男子の心を酌む。

「私も男の子だったら、恐々としているなぁ。だって、自分以外に

同性が居ないって気を遣うもん」

そんな真優の言葉が耳に入っていないのか、受け流すように爽奈が反対方向に向いた。

「と言うかあんな奴居たっけ？ まゆっちと話している時に、ちょっとだけ気になったんだけどさ」

成佳と真優も爽奈が言う”奴”に視線を移す。そこには1人だけ席に座って、支離滅裂極まりない文章を、割りと真剣な表情で熟読している男が居た。2人が首を傾げる。

「去年まで居なかったような気がするわね。転校生かしら」

「きつとそうだよ。だって、あそこに男の子達が5人居るし、あの人を含めたら6人になっちゃうもん。男の子は2つのクラスを併せて10人だから、こっち1人多いってことは変だよ」

全く分らない、おかしいと言った風に、2人は口々に言った。

2人の意見を耳に入れつつ、腕を組んで何ごとかを考えていた爽奈が、指を鳴らす。

「よし、私が直接問いただしに行つてこよう。怪しい奴なら、鉄拳制裁を加えた後で追い出せばいいんだし」

鉄拳制裁と言う言葉に、真優がいち早く反応する。

「いくらなんでも、渡り廊下で遇った先輩じゃないんだから……」

「じょーだんじょーだん。もー、まゆっちはすぐに真に受けちゃうよね。だけど、それがいいんだけど」

机から弾みをつけて床に降り立った。すると、正面にはプリントを持ってわなわなと震えている紗弥菜が居た。

（ひとまず、紗弥菜をからかってからいこうかな）

爽奈は、悪がきのような笑みを作った。

「どーした？ 紗弥菜さんよ。何かご不満でもあったんかい」

紗弥菜はプリントから眼を逸らさず、口元を小刻みに動かしながら、憎々しげに漏らす。

「こういう地の文と会話文が一緒になってる文を見ると、非常に腹が立つてくるわ。ああ、直談判して目の前で添削してやりたい……」

！ しかも顔文字や誤字や脱字や疑問符や感嘆符が……！！」

今にもその場で怒声を挙げんばかりである。触らぬ神にたたり無しと言わんばかりの顔で、紗弥菜を避けて男のもとへ行こうとしたその時。

「あ、チャイムが鳴ったね」

1限の開始を告げるチャイムが、構内に鳴り響いた。

履修登録やら学校生活やらの説明が終わり、担任が号令をかけようとした時だった。

「あつ　！　わーすれーてた　っ！」

両手で頭を抱えつつ、絶叫とともに教卓に勢いよく顔を突っ伏す。当然こん、と鈍い音が教室の静寂を打ち壊すように鳴る。しかし、生徒達がざわつく暇を与えないように計算しているのか、すぐさま絶叫前の姿勢に戻った。

「円城寺くーん、ちよつとこっちに來て」

担任が手招きすると、一番後ろの席から1人の男が立ち上がり、教卓の方へ歩みを進めていった。

「すっかりみなさんに紹介し忘れていましたが、今更ながら紹介します。円城寺侑治郎くんえんじょうじ ゆうじろうです！」

担任が失念していたことを全く気にしていないのか、眉1つ動かすこともなく、口を開く。

「みなさん初めまして。訳あって1年間休学してました、円城寺侑治郎と言います。みなさんより1つ年上ですが、宜しくお願い致します」

言い終えてから体を折り曲げるように、一礼した。その姿はどこか滑稽に見えた。

なぜなら円城寺は180cm半ばの偉丈夫であり、クラスの男子の中では抜きん出るほどである。針ねずみを頭に乘せたような割ととげとげとした短髪。細身ながらも肩幅ががっちりしていて広く、逞しさを感じさせられる。顔立ちはほどよく整っていて優しそうで

ある。荒々しい雰囲気は全くなく、顔だけ見れば優男にしか見えな
いほどだ。

教室中に拍手が巻き起こる。

その中で爽奈は、手を打ち鳴らすこともせずに、机の上に置いて
あるプリントの下部をじっと見つめていた。

（やっぱりだ。あの円城寺とか言う奴、私達と同じ班だ！……ふ
っふっふ、どうしてくれようかねえ）

プリントに顔を突っ伏してくつくつと笑う様は、どう見ても小学
生が何かるくでもないことを、思いついたようにしか見えなかった。

04章……啞然、呆然、何だこれ

この日は午前中で終了となり、昼前には下校時間となった。

担任が教室を出て行くと、生徒達もそそくさと教室を後にする。

どうやら、学長の支離滅裂の文章と内容は、容易には受け入れがたいものだっらしい。

小さい体を伸ばしつつ、爽奈が3人に向けて言う。

「さて、と。私達も帰ろっか」

と、眼の隅に侑治郎の姿が映った。席を立ち、ロングホームルーム時に貰ったプリントや筆記用具を鞆に詰めている。

「おやおや、でかい人はまだ帰ってなかったみたいだね」

「もしかしてあんた、あの円城寺って男に一目惚れしたの？」

紗弥菜が意地悪気に笑みで口を歪めつつ、ちよっかいを出した。

「はあ？ 何を言っちゃってんのかな。んな訳ないに決まってるじゃん。そういうことを言うあんたがそうなんじゃないの」

爽奈はぎろりと紗弥奈を睨みつける。しかし、童顔のせいかあまり迫力がない。

「残念。私は、あんなに背が高すぎる男なんか嫌いな。そうね。私と同じぐらいがいいわ。やっぱり、目線の高さが同じ方が安心するもの」

紗弥菜が目をつむって悦に入った。

そんな紗弥菜を見た爽奈は、鼻で一笑に付すのに何も言わず。

「だけどさ、男は嫌かもねー。だって、大抵の男ってのは自分より背の低い女を選ぶって、おっ父が言ってたしねー。それに、ただでさえ身長が低いことに、コンプレックスを持つてる男も居る訳で。そいつにしてみれば、これほど嫌な女は居ないだろうねー。まあ、特別な考えの奴な億が一の確率でほいほいあんたに寄ってくるかもねー」

自分の男性理想像を、金づちで叩き割られたような衝撃を受けた

紗弥菜は、怒りのあまりに目を吊り上げて切齒扼腕する。

「くうっ……！ 言わせておけばべらべらとっ。大体あんたに寄ってくる男が万が一

居たとしても、あらかた」

言いかけた紗弥菜に、成佳の優しい声音が割って入る。

「親睦の意味も含めて円城寺さんを誘って、お昼ご飯を食べましようか。ちょうど昨日作ったカレーの余りが沢山あるのよ。1人じゃ食べきれないし、みんなと一緒に食べた方が美味しいし」

カレーという単語に瞬く間に反応した爽奈は、瞳を輝かせながら問う。

「なるさん、まじっすか！ おかわりしてもいい？」

「勿論よ。沢山あるから、好きなだけ食べていいわ」

「やった　っ！　なるさん大好きっ！」

成佳に抱きつき、胸に顔をうずめて喜びを爆発させる。暫時、感触を確かめてから満足そうに顔を放した。勢いそのままに、今にも教室から出て行こうとする侑治郎の前に回りこむ。

「っと！　な……何か用？」

いきなり行く手を遮るように現れた爽奈に、面食らった有治郎。

「でっくん、君はカレーは好きかね？」

「でっくん？　……まあ、好きだけど。……それが？」

呼ばれたこともない呼称に驚きつつも、正直に答えた。

「じゃあ、ちよっくらこっちに來て。あとね、質問に質問で返すもんじゃないよ」

「ああ、ごめん。って、ちよっ……」

爽奈にいきなり腕を引つ張られ、少しよろけそうになる。それでも、姿勢を低く構えて付いていき、何とかすっ転ぶという醜態を晒さずに済んだ。10歩ほど進んだ後、事の成り行きをなすすべもなく見物していた3人の許へ辿り着く。

「なるさん。でっくんはカレー大好きだった！」

爽奈の澆刺とした声を受け、成佳は莞爾と笑って頷く。

「それじゃあ、行きましようか。自己紹介とかも私の部屋で食べながらでも」

成佳が、何が何だか分からないといった顔をしている侑治郎に向けて言った。

「は、はあ……」

突然過ぎる展開についていけない侑治郎だった。

成佳の部屋に入ると爽奈は、真っ先に鞆や罰ゲームで持って来たランドセルを投げ捨て、ベッドに勢いよく飛び込んだ。

「はふう〜……やっぱり人のベッドって、柔らかくて気持ちいいねえ」

四肢を伸ばし、ごろりと仰向けになる。ほっておけばそのまま眠ってしまいそうである。

「ちよつと爽奈！ ちゃんと靴を揃えなさいよっ！」

紗弥菜が爽奈の脱ぎ散らかした靴を指差し、怒っている。

だが爽奈は、ベッドがふかふかしていて気持ちいいのか、大儀そうに首だけ玄関に向けるだけであった。

「お〜、その声は紗弥菜ではないか。あんたもこっちにきて一緒に横になろうよ。そしたら、あんたの胸を枕代わりにするからさー」

応じる声も間延びしていて、今にも眠りそうだ。

「絶対嫌よ！ ……仕方ないわね、私が揃えてあげるわ。今度からは気をつけなさいよっ！」

「おうよー。さあっすが良い眼鏡をしていることだけあるわー」

「あ、ありがとう……。でも、別に嬉しくなんかないんだからねっ！」

頬を朱に染めつつ穏やかな顔で爽奈の靴を揃える。やっぱり靴も小さく、23cmあるかどうかの物だ。

「さやつちゃん優しいね」

振り向いた目の前に、にこにこしている真優が居た。褒められて照れたらしく、紗弥菜はますます頬を赤くする。眼鏡を取り外し

とてもあそびながら、

「そんなことないわよ。私は当然のことをしたまですよ」

わざと無愛想な表情を作り、そっぽを向いた。

「ふふ。やっぱり、さやつちゃんは可愛いなあ」

「ま、真優。いい加減にしないと、ほっぺをお正月の餅みたいにするわよっ」

「ごめんごめん」

エプロンをつけた成佳が、2人に声をかける。

「紗弥菜ちゃんに真優ちゃん。悪いんだけど、お皿にご飯とカレーを盛ってくれない？ 私はサラダを作るから。あと、サラダを取り分けるお皿とフォークとスプーンもお願いね」

その指示を聞いていた侑治郎は、半ば慌てたように発言する。

「あ、俺もなんか手伝うよ」

成佳は侑治郎を向き、微笑みながらも首を横に軽く振った。

「円城寺さんは、ゆっくりなさっていて下さい。なんせ、今日は円城寺さんの歓迎会兼昼食会ですからね。主賓の方に手伝って頂くなんて、申し訳ないですし。そこにテレビのリモコンがありますから、テレビでも見て下さい」

「分かりました……」

思わず丁寧な口調になってしまう。少しがっかりとした表情になるも、ベッド近くのテーブルの前に座り、その上にあたりリモコンを手に取り、テレビの電源を入れた。ふと、視線を下に移し、テレビブラックの2段目には薄型のゲーム機があった。更に視線をテレビの横にやると、棚の中にはおびただしい量のゲームソフトやアニメのDVDが、所狭しと収納されていた。

05章……カオスの中の一般人

侑治郎は少なからず仰天し、脳内で様々な語彙を駆け巡らす。と、そこに、

「広辞苑だ！」

掛け声とともに拳で頭を殴られた。

「痛っ」

考えていたことなど忘れ、殴られた所を擦る。殴った主を睨むようにして見ると、無邪気な顔で寝ている爽奈だった。

真優がカレーを侑治郎の前に置きつつ、苦笑する。

「そーちゃんは寝相が悪いんですよ。許してやって下さい」

「あ、どうも。それにしても、何でタンクローリーなんだろう？」

素直に疑問を口すると、切った食材をガラスで出来た底の深い透明な容器に移しつつ、成佳が饒舌に答える。

「『デリックの無謀な挑戦』と言うアニメの記念すべき第1話、」

メタボリック將軍危機一髪”の中で主人公が、メタボリック將軍と田部杉雄たべすぎおに、とどめの一撃を喰らわせる時の台詞です。まあ、広辞苑を使った攻撃があんまりにもリアルと言うか、広辞苑の出版社から訴えられて2話で打ち切られた伝説のアニメなんですけどね。

終わり方が斬新でした。だって主人公はアメリカ人の設定なのに日本人で、しかも武士の打ち首前の白昼夢だったんですからあ。あと、そうですね」

「へ、へえ……」

普通のアニメはそれなりに知っているものの、2話で打ち切られたアニメなど知る由もない。侑治郎は、嬉々として語る成佳に、適当に相槌を打つしかなかった。

「なるちゃん。そろそろそーちゃんを起こすね」

「だからあのシーンは うん、いつものやつでお願いねえ」

一瞬だけ真優を見て承諾は出したが、すぐさま視線がたじたじに

なっている脩治郎に向けられた。

「はい。では、こほん。……キャー、助けてー！ 怪人・トンマリミセが前半戦終了時点で、打率2割0分1厘の本塁打15本の打点が17で失策が18だよー！ 怪我人も出まくるし、色んな意味で終わっちゃうよ　っ！」

少し演技が入ったのか声音が多少ながら違った。でも、聞く方がすんなり分かるくらい棒読みは棒読みではあるのだが。

最後の台詞から数秒後、脊髓反射的に跳ね起きた爽奈は、そのままベッドの上で何ごとかを言い始める。

「はーっはっはっはっ！ 小生　ヴォウビョウマンが来たからには、安心ぞ。トンマリミセよ、己の悪行の数々をさっさと詫びてこれで安らかに逝くがいい！ ……って、んっ？」

やっと気づいたのか、みなが自分の一挙手一投足に注目することに、ようやく気づいた。

「みなさん、おはようございます。そして、まゆっちはナイスチョイス！　よくまあ、あんな長い台詞を憶えたね」

だが、爽奈の態度は動揺することなく、にかつと笑うぐらいの余裕があった。

「たまたま昨日借りたDVDを観てたんだー。偶然だよ偶然」

照れながら謙遜してみせる真優。

そんな真優を成佳は褒め称える。

「長台詞お疲れ様。真優ちゃんもそのうち私と爽奈ちゃんみたいに詳しくなるかもね」

「うん、何でも話せるように頑張るよっ」

「よーし、さあーっすがまゆっち！　その意気で次は野郎向けと言われている『ソルドバルド大作戦』を観てみようか！」

「ふふふ、爽奈ちゃんったらマイナー趣向なんだから。ソルドバルドと言えば、『うぬらに渡す物など何も無いっ！』……って、毎回決め台詞のキャラクターがいた気がするわ」

細めていた眼を台詞の時に限ってかつと見開き、眉を逆立て片膝

を立てて見せた。また、今まで控えめな感じで品があったのだが、極限まで喉を絞ったのか低くそれでいて威厳のある声であった。

「えっ……？」

思わず成佳をまじまじと見つめる侑治郎。

「そうそう、さあっすがるさん。レイニー軍曹の物真似が上手いねー」

「なるちゃんは何でもできるよね。声優になれるんじゃない？」

「ふふ、私なんかねないわぁ。上手な人は沢山いるし」

そのまま3人は、アニメ談義に花を咲かせてしまった。

侑治郎はそんな光景を目にして、しばし口をあんぐりと開けていた。だが、どう声をかけていいかわからず、困り果てた表情で隣に黙って座っている紗弥菜の様子を窺った。

視線を敏感に感じ取った紗弥菜は、読んでいた漫画から眼を離し、眼鏡のブリッジを押し上げながら、侑治郎の眼を直視する。

「残念だけど、こうなったからにはしばらくこっちに帰ってこないわ。私は、アニメには興味がないからこの話題になったら、いつも黙ってるけどね」

「あっそうなの……」

（やっぱり、女子つてのはよくわからない生き物なんだな……）

改めてそう思う侑治郎だった。

爽奈と成佳と真優のアニメ談義が終わったのは、10分後だった。各々が完食し終わったのが更に30分後。出来立て熱々だったカレーも、少し冷めかけていたらしい。

そして今、女性陣が自己紹介を終えた。今度は侑治郎の出番である。

「改めて円城寺侑治郎と言います。訳あって」

侑治郎から見て左斜め横に座っていた爽奈から、腕が伸ばされる。丁度、口の前に掌が止まってもう喋るな、と言わんばかりであった。「ストオーツプ！ ちょっと待とうかでっくん。訳ってなんですよ

？ 気になつて仕方ないんだけど」

爽奈に肝心な所を衝かれ、微苦笑を面に表す。少し考えた後、頭を掻きながら口にする。

「んー……正直言いたくなかつたんだけど、去年の今ぐらいにこっちに帰つてこようとしたら、事故に巻き込まれてね。それで、大腿部の頸部^{けいぶ}を折ってしまったんだよ。それで3ヶ月ちよいは寝たきりだつたんだけど、辛かつたなあ……」

ベッドで過ごした永すぎる期間を思い出したのか、遠い目を天井に投じた。

成佳が目を瞪る。

「大腿骨頸部骨折と言つたら、お年寄りとか割と年配の方のイメージが強いんだけど、円城寺さんみたいに若い人もなるのねえ」

「お、詳しいね。担当した医師や看護師さんによく言われたなあ。あと、相当運が悪かつたんだね、とも」

爽奈がやおら立ち上がり、薄い胸を張つて断言する。

「やつぱ、牛乳飲まなきや駄目だよ！ 私みたいに1日500mlの1リッターは飲まないよ。そのせいもあつて骨折なんか1回もしたことはないし、怪我してもすぐ治るし、良いこと尽くめだよ」

紗弥菜は、目を細めて野卑にも似た笑みを口角に顕現させる。

「その割には悲しいほどに、胸や身長には行かなかつたみたいね。吸収した分は何処へ行つたのかしら」

挑発されてすっかり頭に血が上つた爽奈は、表情を憤怒の形相に変えつつ、人差し指で紗弥菜の胸を指す。

「胸と身長のことを何で言うかなー。何でもかけりや良いつてもんじゃないと思うけどね。でも、なるさんは別格。なるさんの胸には愛情が詰まっているからねっ。あんたの胸なんかね、ただの脂肪の塊だ！」

自慢の胸を面罵された紗弥菜は、ほぼ無意識に眼鏡を外してテーブルに置き、怒髪衝天を衝かんばかりに食つてかかる。

「な、なんですって！？ これだから、精神的にも肉体的にもお子

様は困るわ。根拠もかけらもないことを、しゃあしゃあとよく言えるわね。ねえ、成佳。馬鹿らしいと思わない？」

しかし、成佳の答えは紗弥菜が望んでいたものと違っていた。

「じゃあ、爽奈ちゃんと真優ちゃんに触ってもらって、決めてもらいましょうか。はたして爽奈ちゃんの言う通りなのか」

それにしても、この女ノリノリである。某番組の企画なら、先述の常套句がお茶の間に流れたであろう。

「あ、それいーね」

一も二もなく爽奈が同意する。

「でも、でもさ……」

真優が止めようとするが、最早遅い。

引っ込みがつかなくなった紗弥菜が、折角の整った顔を歪めてみると、いつの間にか空気と化していた侑治郎が、手を上げた。

「何、貴方も参加する気？ いい度胸してるわね。私の胸を触ったら――」

わずかに頬を朱に染め、強い口調を侑治郎にぶつけようとするも、途中でさえぎられた。

「あのさ、俺が居ない時にやってくれないか」

もう、うんざりだ。そう言いたげな顔で胸の内を吐露した。

「分かった。じゃあ、帰れ」

即座に爽奈が反応。喜色を満面にして、軽い口調で言った。

出合った時から薄々感付いてはいたが、ここまでお子様な性格とは夢想だにしなかった侑治郎は、胸中に激しく生じた呆れを押し隠しながら、席を立つ。

「そうか。それなら、そろそろおいとましますか。木下さん、カレーごちそうさま。とても美味しかった」

突然変わった空気に、成佳は若干戸惑う。

「え、ええ。また宜しければ、一緒に食べましょうね」

早くも玄関で靴を履いている侑治郎が、首だけ振り向いて微笑む。
「ありがと。じゃ、お邪魔しました」

ドアが開かれ、何秒も経たずに閉まる。その閉まった音だけが4人をしばらく包んでいたが、やがて爽奈の音頭で再開された。

階段を上がって自室に入った侑治郎は、1つ大きく溜息を吐くと、しみじみと独語する。

「女の思考回路ってどうなってるのかな……。本っ当、切に知りたいわ」

明日以降のことを考えると、もう1つ大きな溜息が出る侑治郎だった。

06章……使用上の用法・用量に気をつけてください

「でつくん、お前は完全に包囲されている。大人しく出て来い！」

「黙れ！ 人質の命がどうなってもいいのか！」

俺は今、見知らぬ一軒家の二階で人質を取って立てこもっている。人質の木下を左で首を絞めるようにして引き寄せ、右手には鋭利で部屋の電灯に反射し、鈍色にきらめくナイフを持って首筋に当てつつ、窓から叫んでいる。

何でこんな状態になったかは知らない。気が付いたら、この状態だったんだ。

そして、かれこれ10分ほどこの問答が続いている。よくまあ、飽きもせずやっているな、と我ながら思う。

「でつくん、お前は完全に包囲されている。大人しく出て来い！」

また言った。お前もよく飽きないなあ、江里口よ。と言うか、よくお前にぴったりの警察の服があったもんだ。

さて、何て返そうか……。

「黙れ！ 人質の命がどうなってもいいのか！」

と思つてたら、また無意識に出ちゃったよ。何回目のオウム返しだ。お互い事態を進展させる気がないんだな。

「江里口巡査部長、これ以上の説得は不毛かと思われませんが」

江里口の隣に居る女にしては結構な長身で、眼鏡をかけた美人百武が眉を曇らせている。スタイルが良いだけあって警察官の服が似合うなあ。

江里口は、百武の提言を受け止めたのか、はっとして頷く。ほつ…… やつと終わるのか。

「でつくん、お前は完全に包囲されている。大人しく出て来い！」

同じかよ！ 思わずこけかけて、隣のうんともすんとも言わない無表情の木下を刺しそうになったじゃねえか。ああ、そうか終わらせる気がないなら、こっちもこう返すよ。

「黙れ！ 人質の命がどうなってもいいのか！」

どうだ。百武の言う通り、不毛だろう。こっちはお前が居なくなればいいんだ。早く帰れ。

「江里口巡査部長、ここはもう……」

江里口の後方に居る小柄の方の眼鏡 成松がおずおずといった感じで袖を引く。おいおい、成松の方はえらいぶかぶかだな。手が袖から出てないぞ。江里口の寸法があるんなら、成松の分も用意しとけよ。

江里口は、また同じ所作を繰り返した。ようやく分かってくれたか。早く帰れ。そしたら、人質を放してやるから。

「このままではきりが無い。よし、私が独りで突入しよう！」

はあ？ 何でそうなるんだ。2人とも「仕方ないね」じゃないよ。奴を止めるって！

「黙れ！ 人質の命がどうなってもいいのか！」

何で今これが出るんだよ！ 使いどころが若干変だぞ。

「突入せよ！ でっくんの部屋へ！」

ドアを大きく開け放って江里口が入って来る。しばらくすると、背中に重さと衝撃が襲った。

そこで俺は、目が覚めた。

「犯人、確保 つ。おつはよー、でっくん！」

爽奈の元気で澆刺とした声が部屋中に響き、寝起きの侑治郎の鼓膜を激しく揺らす。首だけ動かし、寝惚け眼を背中の方にとやると、覆いかぶさった爽奈が居た。

「な、何をしてんだ!？」

侑治郎の目がかつと見開かれた。眠気も当然ながらすっ飛んだよ。うだ。

「何って起きないから、飛びついて起こしたまでだよ。鍵も開いてたし、無用心だなーでっくんは」

邪気のかけらもない笑顔を向け、背中軽く叩いた。

「昨晚うつかりかけ忘れたただけだ。もしかして江里口、ずっと何10分も前からドアの前で、何か叫んでなかったか？」

「うん、言ってたよー。『でっくん、お前は完全に包囲されている。大人しく出て来い！』ってね。でっくんも言ってたよね？」

「ああ、俺は夢の中で『黙れ！ 人質の命がどうなってもいいのか！』って言ってたな。右手にナイフを持って、左手に木下を人質に取って。……あれ？」

侑治郎の右手には孫の手、左手にはクッションが握られていた。

固まってしまった侑治郎を見て、爽奈はおかしそうに頬を膨らませていく。

「ぶっ……どれがナイフでどれがなるさんの？」

「あれ、おかしいな……。夢の中では確かにあっただけだな」
堪えきれなくなつた爽奈が、哄笑する。

「あれー……。まあ、いつか」

侑治郎もあれこれ考えても仕方ないと思い、爽奈に釣られる形で哄笑した。

暫時、2人が笑い合っていると、玄関先から咳払いが1つ鳴つた。紗弥菜によるものである。それが合図だったのか、にがにがしげに口を開く。

「爽奈！ あんたって奴は……仮にも嫁入り前の娘なのよ！ 今すぐ離れなさい！ 円城寺も早く着替えて！」

怒りと恥ずかしさで、林檎のように顔が真っ赤になっている。

「はいはい」

珍しく素直に従つた爽奈は、ベッドから身軽にひょいと飛び降りた。

ようやく、上半身が自由の身となつた侑治郎。開放感を味わっている中で、ふと頭に疑問が生まれてきた。

「なあ、さつきから気になっていたんだけど、何でみんなジャージなんだ？ 何処かに行くのか」

「近くにある野瀬私立保育園に、ボランティアに行くんですよ。だ

から、円城寺さんもどうかナー、って」

紗弥菜の隣でこちらを窺っていた真優が、やんわりと答えた。

「ほー、ボランティアねえ。良いね。俺も一緒に行くよ」

「んじゃ、早く着替えようかー。はい、ジャージ」

「ありがとう……っておい、何を勝手に人のタンスを開けてんだよっ？」

「それにしても、良いジャージだねー。もしかして新しいジャージ？ そしたら、アメリカにある州と同じだね。ほら、ニュージャージーって」

瞬間、春なのに寒風が吹き荒んだ気がした。誰1人としてくすりと笑わない。表情そのままに、雪像のように固まった。

「あれ？」

爽奈が状況掴めず、素っ頓狂な声を挙げた。

いち早く我に戻った侑治郎が、無言で爽奈の脇の下に手を入れ、高い高いをするようにして軽々と持ち上げると、そのまま玄関先まで連れて行った。

「悪いけど、少し待っててくれ」

ドアを閉めた途端、紗弥菜のきいきいと叱る声が爽奈に浴びせられた。

「ところで」

最後にアパートの階段を下りきった侑治郎が切り出した。

「今居ない木下はどうするんだ。と言うか、どうしたんだ？」

自慢の長い黒髪を、首の後ろで束ねてポニーテールにしていた紗弥菜が、首を少し後方に回す。

「今から起こしに行くのよ。成佳は休日になると、大抵寝起きがよくないから」

ぶっきらぼうに言って、すぐに前を向いた。

背が低く、自然と爽奈以外には上目遣いになってしまつ真優が、侑治郎の顔に眼を向けながら苦笑する。

「今日のボランティア自体そーちゃんの思いつきで急だったから、私が貸したゲームかアニメのDVDを徹夜で観たと思うんですよ。だから、寝たばかりかあんまり寝てないかもしれません」

「どうよ。凄いでしょー」

爽奈が振り向いて、得意顔で偉がつて見せた。

「全然誉めてない」

「ちえっ」

爽奈は、面白くなさそうに正面を向いた。

「そうなのか。本当、人は見かけによらないもんだな」

侑治郎がしみじみ感じ入っていると、紗弥菜が成佳の部屋のインターホンを押した。寝ているのか全く反応がない。

「よーし、また私の出番がきたようだ」

「煩いから却下」

紗弥菜が爽奈の頭をがしつと両手で掴んだ。

とさかにきた爽奈は、悪態をつく。

「何をするだあー、この牛乳うしちち！ 愛もない胸を持つお主に、私を止める資格などない！」

紗弥菜は、たちまち目を吊り上げ、赤々と顔を上気させながら、憤怒する。

「黙りなさい、この無乳！ 胸のないあんたに胸のことをとやかく言われる筋合いなんてないわっ！」

「ぬわんだとお！ それを言うのか！ あんたもつくづく嫌な女だね。だから、男が」

「それは関係ないでしょっ！ 大体、いつも言葉に詰まるとそればかり」

口喧嘩をしている2人を後目に、真優がドアノブを捻る。すると、あっさりと開いてしまい、驚きのあまりに思わず声を漏らす。

「開いちゃった……」

「突入せよ！ なるさんの部屋へ！」

それを聞いた爽奈は、言いかけた面罵の言葉を飲み込んだ。次に

きびすをかえすと真優をどかし、玄関に入るや靴を脱ぎ散らかして、突撃していった。

仰向けにすうすうと寝息を立てている成佳の胸に飛び込んで、気持ち良さそうに頬ずりする。

「う……うん……」

くすぐったいのか眉を困らせる。しかし、眼は細められ、口元は微笑んでいるから、嫌ではなさそうだ。

「はふう……」

至福の吐息が漏れた。胸を枕に爽奈も寝てしまいそうだと。急な胸の圧迫感に、成佳の眠気は少しずつ飛んでいく。薄目になったところで、闖入者が居ることに気づいた。

「あれ、爽奈ちゃんじゃない。おはよう。どうしたの？ こんな朝早くに」

そこそこにのんびりな口調で言い終えて、嫌な顔1つせず爽奈の頭を優しく撫でる。

「今日ねー、もうちょっとしたらボランティアに行こうかと思うんだー。でもねー、今は、なるさんの愛が一杯詰まった胸を枕に寝ちゃうのもいいかなー、って思ってきたんだけどー、どうしよっかー？」

今にも寝くたばりそうな間延びした語勢だった。

成佳は爽奈の頭のおいをかぎつつ、しばし思案する。

「うーん……特に用事もないし、私も行くわあ。ちよつと眠いけど」

「ええー……」

「『ええー……』じゃないわよ、このチビ子！ 成佳から離れなさい！」

いつのまにか紗弥菜も部屋に入ってきていた。成佳の胸の上で眠りかけている爽奈を割と軽そうに持ち上げた。

爽奈が口をとがらせる。

「な〜に、を、するだあ〜」

「黙りなさい。それじゃ成佳、私達は外で待ってるから。それとも、

三つ編みを作るのを手伝おうか？」

「うん。悪いんだけど、お願いします」

起き上がった端座位になっていた成佳が、頭を軽く下げた。

「となると、人手が必要ね。真優も入ってきて手伝って。円城寺は、外でこれを持って待っててくれない？」

「はい、分かりましたー」

真優が嬉々として手を上げ、承諾。部屋に入っていった。

「別にいいけど……。起きたら、大変なんじゃないのか？ 俺は木下みたいにその……」

恥ずかしそうに口ごもる侑治郎に紗弥菜は、口元に狡猾な笑みを湛える。

「胸の感触がないから怒るって？ ふふふ、馬鹿ね。それが狙いのよ。そうならなっただけ被害を被るのは貴方1人だしね」

あまりにも自分勝手な言い分に絶句した侑治郎に、すっかり眠ってしまった爽奈を預ける。そして、ふっと真顔に戻り、

「じゃ、頼んだわよ」

言い返す暇を与えず、ドアを閉めてしまった。

（な、何て奴だ……）

この時、初めて紗弥菜の恐ろしさを知った侑治郎であった。

07章……それをやったら園児が泣きます

爽奈達と侑治郎が出会ってから、2週間が経とうとしていた。

当初は、一部を除いてはかなりぎこちなかったが、成佳を中心に交流を持ちかけていて徐々ではあるが、親しくなりつつあった。

それでも紗弥菜だけは、なぜだか侑治郎との会話が他の3人に比べて圧倒的に少なく、話しても大体は2、3交わしただけで淡白に終わってしまう。しかも、関わることを避けている節さえもある。

そんな紗弥菜を侑治郎は、少しは気にかけてはいたが、いずれ話すきっかけがあるだろうと楽観的に構えていた。それゆえ、侑治郎も淡白な会話・対応で接することになっていた。

だから、先ほどの侑治郎に狡猾に笑いかける紗弥菜なんて、初めてであった。何かしら心境の変化があつたと思われる。

だが侑治郎は、一考しただけで頭を振った。考えても無駄だと思つたからだ。

眼をふと、下に向ける。腕の中では爽奈が天使のような寝顔を見せている。本当に、今年で成人を迎えるのかと疑ってしまうほどの艶色えんしよくが無いに等しい童顔。長い睫毛に、今は閉じられているが大きな眼。にきびやほくろなどはなく、すべすべとしていて思わず触りたくなるような餅肌。

「やっぱり、子どもにしか見えないよな……」

無意識に感想がぼそりと出た。瞬間、爽奈が怒って起きるのではないかとどきどきしたが、全く起きる気配がなく、ひとまず安堵の息をつく。

すると、何の前触れも無く、いきなり爽奈が笑った。

侑治郎は、釣られるようにして微笑む。爽奈の笑顔に、胸が充足感に満たされていくようだった。

「そつえば、静しず乃姉ちゃんのとこのがきんちょ共は、元気にしてるかなー……」

空を見上げ、故郷に居るとこの顔を映し出す。

「錫杖だ！」
うしやうざう

叫び声とともに、みぞおちに強烈な衝きが入れた。

「ぐっ……」

両手が塞がっていて防御もできない侑治郎は、不意に襲来した胸が塞がるような激痛に耐えつつ、寝ている爽奈を落とすまいと、歯を食いしばって必死に耐えた。

「ったく……どんなアニメを観たら、こうも体が動く夢を見るのやら……」

恨めしそうに侑治郎は、爽奈を注視する。

しかし爽奈は、そんな侑治郎を全く意に介していないのかの如く、気持ち良さそうな寝息をたてるだけだった。

野瀬私立保育園は、爽奈達が住んでいる野瀬市の中で、5本の指に入るほどの優良保育園である。1977年に創設。98年には温水プールも併設され、スイミングスクールも同年に開かれた。幼児からお年寄りまで幅広い人々から利用されており、人気を博している。

また、市内で初の24時間体制を2000年から開始。1日中開いているということで勤務形態は、さながら介護福祉士のように、早番、遅番、夜勤の3つとして決め、職員を代わる代わるながらも常駐させることにしている。

4年前、2005年の3月を以って様々な改革を行ってきた2代目園長・龍造寺百代りゅうぞう ももよが高齢の為に勇退し、2005年の4月から新しい園長が取り仕切っていた。

「加代子かよこさん、来たよ　っ！」

職員玄関から上履きに履き替えた爽奈が、すぐ目の前にある職員室に向かって叫んだ。

「はい、ちょっと待ってね」

しばらくすると、1人の中年の女性が上履きをばたばたと鳴らせ

ながら、姿を現せた。

「おつ、いつものメンバーのお出ましね。今日もお願いするわね」
「はいっ。宜しく願います」

女性陣が声を合わせて返事をし、折り目正しく礼をする。侑治郎も慌てて、上半身を少し折る。

「あら」

加代子は、1人だけずば抜けて背の高い男が、混ざっていることに気づいた。慌てた姿を見てくすりと笑う。

「この今どき風の男の子は、だ・れ・の彼氏かしら」

「誰の彼氏でもありません。ただ校長に、私達と行動を共にしろと言われた同級生です」

紗弥菜が真顔で代弁した。

加代子は、にべもない答えに苦笑しつつ問う。

「まあ、そうなの。貴方、お名前は？」

「円城寺侑治郎です。以後、宜しくお願い致します」

恐縮し切った状態で、大きな体を再度折る。

「こちらこそ宜しくね。因みに私は、鍋島加代子。なべしまこの野瀬私立保育園の園長だったりするけど、気軽に”鍋島さん”だの”加代子さん”って呼んでもらって結構よ」

鍋島加代子 野瀬私立保育園の3代目園長。前述の通り、2005年の4月から園長に就任。この時若干40歳だったが、前園長の強い要請もあったので異例中の異例ながらも承諾したという。

御歳44歳ながら、体型が若い時のままを保っているらしく、腹は出ずに腰つきもしっかりとしている。二の腕もそんなに垂れてなく、足も細い方ではある。おかっぱに近い髪形であり、染めているのか白髪が見受けられない。張りのある肌に愛嬌のある下がり目で、人の良さそうな雰囲気醸し出していた。

因みに、爽奈の母親とは共に働き、懇意にしていた経緯がある。爽奈自身も幼い頃はこの保育園に通っていて、加代子にはよくお世話になっていた。母が死んで引越してぶつとりと音信が途絶え

ていたが、高校の時に保育士になる旨を伝え、ボランティアに来るようになってからは、頻繁に交流する仲になった。以来、爽奈は加代子を母のように慕い、加代子も爽奈を娘のように可愛がっている。「それで加代子さん、今日は何をするんですか？」

爽奈が瞳をきらきらと輝かせている。どうやら、早く園児達と遊びたいようだ。

「私の出で立ちを見て分からない？」

加代子がポケットから鎌を取り出して手に持ち、手足を広げてみせる。

よくよく見れば、頭には麦藁帽子を被り、首回りには純白のタートル。長袖のポロシャツに手には軍手が装着しており、右手には鎌。ズボンは動きやすいジャージである。

「分かった！ なまはげの格好をしてふにゅほへほ」

紗弥菜が背後から頬を掴み、引っ張った。

「馬鹿、どう見ても草刈りの格好でしょ」

「ふぁにふんらー」

爽奈が抵抗するが、全然話せていない。

加代子が嬉しそうに紗弥菜を指差す。

「そう。紗弥菜ちゃん、大正解！ ということで、職員室の中に入って装備してから、グラウンドに集合ね」

「はぁあゝ……」

草刈りが始まってから1時間ほどが経った。グラウンドの脇に生えていた雑草はあらかた消え、そろそろ終わってもいいぐらいだった。しかし、加代子が「終わり」と言わない限りは終わらない。その肝心の加代子は、侑治郎と何やら話していて、しかもかなり盛り上がっている。

「そーちゃん、どうしたの？ 元氣ないね」

悄然としている爽奈に、可愛らしい声がかかった。

「おー、まゆっち……眼鏡に汗がついてるよ。大事にしなきゃ駄目

だぞー……」

「え？　ほんとだ。ありがとう」

指摘されて初めて気づいた真優が、眼鏡を外してポケットから眼鏡拭きを取り出して、レンズを丁寧に拭く。陽光にかざすときらりと光り、汗と汚れが取れたことに満足したのか微笑みながら、眼鏡をかけ直した。

真優の所作をまじまじと観察していた爽奈が、小首を傾げて意見する。

「やっぱりまゆっちは、眼鏡を外すと可愛いことは可愛いんだけど、何か物足りなくなってくるよね。折角の黒髪黒目だし、何とも勿体無くなると思うか」

「はははっ。じゃあ、外人さんはどうなの？」

「外人は、大概1つの国に民族が一杯いるから、金髪でも茶髪でも黒髪でも紅毛でも碧眼でもいいんだよ。だから、外人の眼鏡は無条件にOK。むしろ最高。でもね、日本人ってのは、昔から眼はまだしも髪は黒髪って決まってるの。なのに、最近の若者ときたら……」

最初の方は笑顔で語っていた爽奈の顔が、最後の方には段々と陰しくなっていた。怒りがふつつと沸きあがり、やるせない気持ちを鎌に込めて土を削る。

「大和撫子が消えたって言うのは、本当だね。あんな汚ねえ髪をよくまあ、平気でみんなの前で晒せるもんだよ。そんな奴に、眼鏡をかける資格なんかないねっ。使い捨てコンタクトで十分だ！」

呪詛を投げかけつつ、がっがっとう土を攻めて掘削していく。

完全に地雷を踏んだと悟った真優は、必死に話題を逸らそうとする。

「で、でもさ、さやっちゃんやなるちゃんはどう？　まるで昔に出てくるお姫様みたいじゃない」

「なるさんは、文句なしでお姫様。紗弥菜は……外見だけは文句ないんだけど、性格が町のお転婆娘って感じかな」

この言葉に、少し離れた所で成佳と談笑していた紗弥菜が、素早

く反応した。ずかずかと歩み寄ると、怒りを露にする。

「誰が町のお転婆娘よ！ 何処までも失礼な奴ね。私がお転婆娘なら、あんたなんかあつちの意味じゃない稚児よっ！」

「あーもう、煩い煩い！ 子供達に聞こえるよ。黙らんと自慢の黒髪を……あ、やっぱごめん。紗弥菜も姫様です。すまんね」

爽奈からみるみるうちに勢いがなくなっていた。しまいには下を向いて、土を一定の間隔で殴り始めた。

拍子抜けした紗弥菜は、意外そうな顔になる。急激に力が抜け、今にも手にしている鎌を落とさんばかりだ。

成佳が耳元に近付いて髪と汗のにおいを、極力音を立てないように鼻で吸い込みつつ、ぼそりと言う。

「爽奈ちゃんは、紗弥菜ちゃんの髪と眼鏡が1、2位を争うほど好きなの。それを悪口に使おうとしたことで、自己嫌悪に陥ったのよ。久々に観たわね」

「そうだったわね。ま、まあ、無駄な大声を出さずに済んで良かったわ」

何処かつまらなそうな表情を含ませながら、紗弥菜はつんとそっぽを向いた。

「みんなー、終わりよ。シャワーを浴びて、園児達と遊んでちょうだい」

と、丁度頃合を見計らったかのように、加代子の声が4人に向けられた。

「はいはい、はあーいっ！」

この声に復活した爽奈が、鎌を思い切り頭上に掲げて元気よく答えた。そのまま職員室の方へ走っていく。

他の3人も爽奈に習う。勿論、年相応の落ち着きを備えている為、走ろうとはしないが。

「ふふふ、相変わらず爽奈ちゃんは元気ね。幼い頃と全然変わらないわ」

加代子が穏やかな笑みを浮かべた。

「元氣すぎてこっちは疲れますよ。しかも”でつくん”なんて変なあだ名も付けられましたし」

両手にぎっしりと雑草とゴミと石が詰まったゴミ袋を持っている侑治郎は、苦笑しながら嘆いた。

「まあ、そう言わないの。あだ名をつけるのは、爽奈ちゃんの昔からの癖みたいなものだから」

「そうなんですか。鍋島さんがそう言うなら仕方ないですね」

言い終えて、ふうつと溜息を漏らした。

「それよりも、例の件は大丈夫なのね？」

加代子が念押しするように訊いてきた。

「はい、勿論大丈夫です。月・水・土でしたっけ？ 問題なく空いてますので、宜しくお願い致します」

歯切れの良い返事を聞き、安心したとばかりに首肯する。しかし、対等の条件だったことに心付き、手を振ってみせる。

「いやだわ、こっちが宜しく願いますよ。経歴を存分に活かして頑張ってちょうだいね」

「はい！」

喜色を面に表し、胸を張って返事をする。

その侑治郎の幅広い肩幅と背中に、暖かな陽の光りが照らす。それはまるで、侑治郎の逞しさを表しているようであった。

08章……簡単便利、時の止め方

ゴールデンウィークも過ぎ、あとは祝祭日が一切ない日が続く5月も、既に中旬に差ししかかろうとしていた。

熱気の出てきた体育館に、折角の休日である土曜日を潰された幼稚園教諭保育士養成科の2年の生徒全員が、所狭しと座っている。勿論、ひと月前の学長の命令に従い、男子1人に女子4人の5人1組に分かれていた。

未だになれないらしく、女子の話を追従笑いを浮かべてただただ聞いている男子も、そこかしこに居た。

「卒業生講演会か……どんな人が話しにくるんだろうな」

去年もあつたのだがその時侑治郎は、入院していて話を聞けずじまいだった。

真優が若干下がっていた眼鏡を直しつつ、可愛らしい声で言う。

「あ、そっか。侑さんは、入院してたんですね。去年は……保育士になった方と児童養護施設に勤めている方がきたんですよ」

「ほー、そうだったのか。児童養護施設つてのは孤児院のことだよな。殊勝な人も居たもんだ」

うんうんと納得したように頷いていると、爽奈が無意識にスカートを穿いているのにも関わらず、正座を崩したような座りからあくぐらに掻き直した。両膝がぴんと生地を伸ばして、今にも見えそうである。

「今日は、晋ちゃん先輩とかつほーさんが来るらしいよー」

「また独特なあだ名だな。特に後者。誰だか分からんし、パンツ見えるぞ」

侑治郎が少し恥ずかしそうに視線を逸らしながら、指摘する。

因みに5人は、車座となつて座っており、侑治郎の正面に丁度爽奈が座している。

爽奈がにたにたと笑う。

「これだけで照れるとは、うぶな奴だねえ」

「や、やかましい！」

侑治郎は顔を明後日の方向へ向けて、声を上ずらせて怒鳴った。事の成り行きを静観していた成佳が、菩薩のように顔をほころばせ、爽奈の眼をじつと見る。

「爽奈ちゃん、お行儀が悪いから直しなさい。さもないと……」

爽奈は即座に視線を逸らす。

紗弥菜と真優の2人も成佳を一瞥して、半ば戦慄しつつもそのままひそひそ話に入った。

一見すると、子どもを注意する優しそうな若奥様にしか見えないが、爽奈は知っていた。本当に温厚な人ほど怒った時の迫力は、凄まじいものがあることを。前に怒られたことを少し思い出してみる。「ううっ……」

思わず悲鳴とともれる声が吐いて出た。開始15秒ほどで恐ろしさのあまりに脳内に映し出した映像を、かぶりを振って掻き消した。成佳の方を見ると、まだこちらを見ている。しかも心なしか凄みが増した気がした。早く謝らないと、背後に般若が友情出演しかねない。

「ご、ごめん。直すよ」

あぐらから反省の意味も込めて正座に座り直した。

すると、爽奈からすれば何処か喉を帯びていた成佳の笑顔が、普段のものに戻った気がした。

「はい、よく出来ました」。恥じらいを持たないおなごなど……まあ、いいか」

爽奈の頭を優しく撫でる成佳。

だが、撫でられた爽奈は、強張った笑顔を無理矢理口内から出すだけであった。

一連の光景を唯一傍観者として見ていた侑治郎は、何のことかさっぱり分からず、頭上には疑問符が浮きっ放しだった。

「それでは、本日体験談を述べられるお二方のご登場です」

進行役の女子が、朗々と読み上げた。

次の瞬間、左方の幔幕が少し揺れたかと思うと、2人の男女が勢いよく飛び出してきた。そのまま重々しい教壇に備え付けられていたマイクの前で止まった。

「晋之介に果穂、あいつら何やってんだ……？」

侑治郎は、呟いたつきり開いた口が塞がらない。

「どーもー！のうとみ しんのすけ 納富晋之介でーす！」

「成富果穂でーす！」

「2人合わせて、せーの」

「ダブルトミーでーす！」

2人は、お笑い芸人みたいな自己紹介を、大雨のせいで普段では信じられないくらい速くなってしまった下水溝のように終えた。

結果、もともと静かだった体育館が水を打ったように、更に静寂に満たされた。総勢100人は居るのに、しわぶきもくしゃみさえもひとつも聞こえない異様な空間。まるで某漫画のようにあるスタンド使いが、時を止めたかのよう。

ステージ上の2人は、満面に湛えられた笑顔、他はぼかん。

過度の静寂は、人を焦燥に駆らせたり不安に陥らせることがある。恐怖感もかりで、それが長ければ長いほど効能が現れてくるものだ。

そんな時人は、どうしたらいいか解からなくなる。全くの不明、理解不能状態になり、脳の動きが急速に活発化する。混乱で暴走していると言ってもいい。明らかにただ事ではない状況を打破する為だ。

しかし、2、3人のちやちな少数ではなく、百に届こうかという衆人環視の中である。意識している者が居る、居ないにも関係なく、無言の重圧が胸を潰していくもの。それに、そう簡単に思考が働くはずがないのだ。妙案など出ず、ただ後ろ向きな湯水の如く浮かんでは、その中から取捨選択の作業を、秒単位の早さでまともなもの

はないかとこなし続ける。

やがて1つの結論に達したのか、納富と名乗った男が、くると背を向けた。

時が動き出した瞬間である。全員の視線という矢ができ、後姿を容赦無く刺していく。

納富は、そのまま壁際まで行くとその場でひとまず座し、体育座りをして腿と腿の間に顔を埋めてしまった。

その頃になってようやく事の異変に気付いた成富と名乗った女が、視線の先を辿ってみた。すると、あるうことか何人たりとも近寄り難い雰囲気周囲に撒き散らしている無残な納富が、体育座りをしていないか。

いまいち状況が飲めてない上に、樂觀主義者でそれでいて強心臓だった彼女は、純粹に「何やってんだ？ こいつ」としか思わなかったらしい。何食わぬ顔でつかつかと歩み寄り、割りと大柄な体を丸めているだらしない奴の腕1本を引っ張り、そのまま引きずって横の幔幕に下がっていった。

とうとうステージ上に喋る者が居なくなった。

瞬間、体育館は沸騰した。

08章 - 2 : 先輩達の教え

生徒達は、一連のあまりにも不可解な振る舞いに、様々な感情や思いが交錯し、堰を切ったように意見や感情を吐露し合い始める。

「あの馬鹿たれが……」

侑治郎は頭痛を覚え、掌を額に当てて床に視線を落とした。

「あんれー？ でつくん、先輩方のことを知ってるの？」

爽奈がいつもの調子で問うた。

「……そりや、1年の時同じクラスだったからな。晋之介とは友人だったし、あつちの馬鹿とは悪友。忘れる方が無理ってなもんだ」

溜息をひとつ吐き、床を凝視しながらややいい加減な態度で淡々と返答した。次いで太息を漏らし、顔を上げて推論を述べ始めた。

「多分、あの登場の仕方は馬果穂の差し金だろう。さしあたり、晋之介の弱み握って逆らえなくしてんだろうな。全く、あいつのやりそうなことだ」

真優は何とも言えない表情で、しきりにかぶりを振る。

侑治郎が聞き咎める。

「ん？ 成松は、あいつらのことを知ってるのか？」

真優が苦笑いしつつ眉をハの字する。

「知ってるも何も、私がボランティアによく行く児童館の職員ですからね」

「あー、そういえば前に、ボランティアを掛け持ちしてるって言ってたな。なるほどね。……にしても、何で2人で揃って児童館の職員になったんだか。確かに、仲が良かったのは憶えているんだけど……」

黙って話を聞いていた紗弥菜が冷ややかな視線を、眼鏡の奥の双眸から難しい顔で唸っている侑治郎に送る。

「円城寺、時の流れは残酷なものなのよ」

「は？」

いきなりそんなことを言われても、理解できるはずがない。困惑し、紗弥菜の方を見やるが、つんとした態度で無視された。

（いつまでも冷たい奴だな……）

1ヶ月弱経つのに、未だに他の3人と違って慣れない。と言うよりも馴染みづらい。侑治郎の方も骨を折っているのだが、どれもこれもいまいち反応が薄かった。

「いつまでも冷たい奴だな。だから彼氏が」

後の言葉に耳聴く反応した紗弥菜が、きつと爽奈睨む。

「爽奈、学科内の生徒や教授が居る前で事を起こす気？ 喧嘩ならあとでいくらでも買っつわよ」

恫喝にも似たような言を伝え、ふんと軽く言いながら、よそを向いた。

（江里口とはおそらく理由が違うけど、百武に腹を立てる理由を何で抱くのか、ようやく分かった気がする）

侑治郎は、紗弥菜を理解したと思っただけ、心中で数々のしこりが一気に氷解させた。そのまま流れで快哉を叫びたくなったが、残念ながら公衆の面前であり、流石に自重した。

「みなさん、静粛に静粛に！ 再度準備が整ったらしいので、静かにして下さい！」

進行役の女子が、体育館中に金切り声を響かせる。どうやら再開されるようだ。

喧々囂々（けんけんごうごう）となっていた生徒達の話し声が徐々に収束し、段々と数十分振りにしじまが帰来した。

「それでは納富晋之介さん、お願い致します」

全員が、先ほどのような事態の再来に危惧や期待を持って、左の幔幕を注視する。

流石に2度はなかった。それでも、緊張のあまりに手と足が一緒に動いており、所々からくすくすと失笑が発生してしまったが。

「えー、ご紹介にあずかりました。納富です。先ほどは、大変失礼致しました。切にお詫び申し上げます。」

私がここ野瀬保育専門学校通っていた理由は、単純に子どもごとを世話するのが、好きだったからです。だから、子供と触れ合える仕事であれば、何でも良かったのです。しかし、保育士と幼稚園教諭の2つを卒業と同時に取得できる魅力に魅せられ、職業の選択の幅が広がると思った点もありました。

さて、なぜ私が児童館職員に就いているかと申しますと、こちらも理由が単純過ぎて申し訳ないのですが、幼い頃地元の児童館にお世話になっていたので。本校に入学してしばらく経ってから、保育士の資格があれば児童館職員になれると知って欣喜したものです。実習も当然、2年間児童館でお世話になりました。

えー……あとですね。私としては、ボランティアか有償のアルバイトをしておいた方が良くと思います。実践経験は損にはなりません。むしろ、自分にとって得ばかりです。勉強も勿論いいんですけど、やっぱり現場に立って動く事が肝要かと。勉強以外で気づかなかったことや、その逆もあつたりなので。これは大半の方が目指すであろう保育士にも同じことが言えます。現場に出ててんやわんやするよりも、ボランティアやアルバイトの段階でてんやわんやしてた方が、ましとは言いい切れないのですが、救いようがあるかなとまあ、これはあくまで自論なんです。

最後に為せばなります。あと、やる気と努力と情熱さえあれば、大丈夫だと思いますので。以上で終わります」

一礼するや、生徒達の拍手が体育館中を包む。その中を今ではすっかり充実感に満ち溢れた晋之介は、今頃思い出した作法に則って幔幕内に消えていく。

「次に成富果穂さん、お願い致します」

晋之介以上に生徒達は幔幕を注視する。なんせ、先ほどの騒ぎを巻き起こした張本人である。一挙手一投足が気になってしまふのは、仕方がないことだった。

だが、生徒達の期待は裏切られた。果穂が真面目くさった作法で出てきたからである。

対照的に教授陣は、安堵する。これ以上面倒臭いことはごめんなのだろう。

「えーっと、成富です。先ほどは大変失礼しました。だけど、反省はしていません。私はやりたいことをやったからです。まあ、さっきの件はこの辺にしておきましょうか。さっきからお世話になった教授の責めるような視線が、ちくりちくりとか弱い私に突き刺さりましてね。さしもの私も効果は抜群でして、言うなればヒットポイントが最大値100としたら、今は10ぐらいなもんで。

さて、体験談と言ってもさっき晋 納富……くん？ ああ、やっぱ”くん”づけじゃないとまずいつすか。分かりました。ああ、えーっと……そう、体験談でしたっけ？ ちよつと前に納富くんが、私の言いたいことを言ってしまったので、特に話すこともないんですけどねえ。しかも児童館に勤めてますし、8割方が保育士や幼稚園の先生になるでしょうしね。完璧場違いというか納富くんだけで良かったんじゃないかってつくづく思うのですが。まあ、保育士とかならこの時期運動会の所もあるし、割と近間で暇そうな奴等を引っ張ってきて喋らそうとしたら、私と納富くんしか居なかったという落ちでしょうね。一応は勉強したんだから喋れるだろうーと思った教授、私は喋りませんよ。喋るのは……」

備え付けられた無線式のマイクを奪うようにして掴み、ステージを一思いに飛び降りた。そして、身近に居る女子の前に立ち、にいつと笑う。

女子は引きつった笑みを返すだけで、そのまま固まってしまった。「この場に居る生徒達に語ってもらいましょう！ じゃ、素敵なスマイルを見せてくれた君っ。あたしが質問するから、答えてね。まづはお名前から、どおーぞー！」

鋭い風切り音とともにマイクが振り下ろされ、女子の口から数センチという絶妙な位置で止まった。

隣の友達らしき女子が小声で呼びかけて、固まった女子を揺らす。意識が戻ったものの、いきなり至近距離にマイクがあることに仰天

し、そのまままた気を失ってしまった。

「あらら、気絶しちゃいましたね。じゃ、友達想いの君にしようか。面倒だから、下の名前だけでいいよ」

マイクを横に滑らせ、気絶した女子を必死に呼び起こしていた女子の口の前に持って行く。

「……鞠恵まりえです」

暫時、胆を冷やした鞠恵であったが、二の舞になるまいと己を何とか奮い立たせ、強めに答えた。

果穂は、マイクを口元に戻して相好を崩す。

「OK、鞠恵ちゃんだね。んじゃ、簡単な質問から。何で鞠恵ちゃんはこの専門学校に入学したのかな？」

「それは……保育士になりたいからです」

「ほう。何で保育士になりたいのかな？」

「幼い子ども達を世話していくことで、日々成長していく様子が見れ、私自身も一緒に成長していきれると思ったからです」

と、ここで果穂が、持つようにと片目をつむって教える。

鞠恵は素直に従い、マイクを持った。

果穂は、ポケットからマイクを取り出してスイッチを入れた。どうやら、発言の度にマイクを交互に向けるのが面倒臭くなったらしい。

「ほうほう。殊勝なことを言ってるけど、何だか如何にも面接対策用の答えにしか聞こえないわ」

凶星だった。だが、考え抜いた意見をけなされた気がして、鞠恵はむっとする。

「それなら成富さんは、どんな理由で児童館職員になられたんですか？」

「子どもが好きだから。ただそれだけだよ」

「そんな子どもみたいな考えでいいんですか？」

「あたしはいいと思うよ。小難しい意見で飾るよりは幾分いいと思うけどね。あと、逆に子どもが嫌いだったら、なる資格なんかない

じゃない。だけど、子どもが好きな人は無条件になる資格があるんだよ。……でもね、決して鞠恵ちゃんの見が駄目ってことじゃないんだ。ただ素を言ってもらいたかっただけなんだよ。意地悪言つてごめんね」

「い、いえ……こちらこそ生意氣言つてすみませんでした。成富さんのお考え、よく分かりました」

そう言つて、につこりと微笑んで一礼する。

「いやいや、逆に良い質問ありがとうね。そういえばさ、何になるうと思つてるの？」

「保育士です」

「保育士か……んじゃ、親戚かきょうだいに小さい子が居たら、一緒に遊んであげたりしておいた方がいいよ。喜怒哀楽の機微を見分けられるようになったら、完璧かな。赤ちゃんが居るなら、おむつ交換とかミルクの作り方や飲ませ方なんかも。いきなり0歳児クラスはないと思うけど、さっき喋つてた奴が言つてたとおり、経験は役に立つからね」

「はい、ありがとうございます！」

思わず、大声で答えてしまったので、耳を聳^{もつ}する大音量がスピーカーから発せられる。周りが耳を塞いでしまう所作を見て、鞠恵は赤面し、ばつが悪そうに下を向いた。

そんな鞠恵を果穂は可愛く思えた。空いている片方の手で鞠恵の頭を撫でる。

「はははは、どんまいどんまい。見た目と違つて元気があつて何よりだよ」

鞠恵の頭から手を放し、踵^{かかと}を返す。ステージ上に戻ると、マイクを元の位置に置き、最後にと付け加えながら語り出した。

「専門学校だからと言って、別にその専門学校が特化している職業に就かなくてもいいと、私は思う。第一、去年まで在学しておいてなんだけど、その特化している進路だけなんておかしいですからね。人間、学んでいくうちに心変わりもしますよ。それは勉強が思つ

たよりも面倒臭いとか、実習で現場を体験して思っていたものと違っていたり、と様々。そうして生まれてきた心変わりと言うかズレを直すのは、よほどのことが起きないか起こさない限り、無理でしょうね。割り切れる人はいいですよ。これから頑張って行けばいいんだ、と思う人は大丈夫。しかしね、そこからずるずると悪い方に悪い方に考えて行っで、とうとう自分は不向きだなんて烙印を押しちゃう人いるんですよ。

私は、無理に保育士や幼稚園の先生になれとは言いません。難しい理由はいらない。そんな時は単純明快に、何でこの道に進もうと思ったかを思い出せばいいんです。理由なんて十人十色。でも、絶対に”人が好き”、”子どもが好き”って単語はあるんじゃないかと、思考します。今まさに悩んでる人は、よくよく考え直してみてもはどうでしょうか。では、私からは以上です」

果穂が形式的な一礼をすると、たちまち拍手が鳴り響く。その中を満足気な表情で幔幕に下がっていった。

こうして、卒業生講演会が一応は無事に終了した。教授達があとで果穂を呼び出し、説教を垂れたのは当然ことであつたという。

09章……忘れ物

「失礼しました」

侑治郎が、深々と礼をして静かにドアを閉めた。無表情を決め込み、しばらく廊下を歩いて行く。曲がり角を曲った所で、おもむろに顔を歪ませた。

「あゝ……あつつい。何とかならねえかなー、この暑さ……」

左手をうちわのように顔の近くで扇ぐ。だが、微々たる涼しか得られなかった。右手もＴシャツの胸倉辺りを掴んで、風を入れんと必死に動かすが、全く効果がないと言ってもいい。

そればかりかこの時期独特のむわつとした湿気を、はらんだ生暖かい空気が廊下中に充満している。窓を全快にしてもあまり外気が入ってこないこんな所で、涼を得ようとすること自体が無茶というものだ。

季節は既に6月の上旬に突入し、雨天が増えてきた。それと比例するかのように、ここ最近ではセ氏25度以上の夏日が連続しており、体にまとわりつくような暑さで人々をいらいらさせる日々が続いている。

侑治郎もいらいらしていた。暑さもそうだが、実習のおかげで前倒しになった定期試験が、今月の下旬に差し迫っている。入院中は何もすることがなく、卒業と同時に国家試験が免除されるのにも関わらず、暇にかまけて様々な教科をこなしてきた。

しかし、分からない所はどうしても分からず、連日1日1教科の度合でそれぞれの教科の教授のもとを訪ねに行っていた。すると、5時限まである日はとんでもなく遅くなり、帰りの時刻も自然と午後7時を過ぎていることも少なくない。

ありがたいことに成佳や真優も良かったらと教えてくれるが、彼女達にも試験勉強があるしと、最近では断っている。

今日は幸い3時限の午後3時前には終わったものの、色々と訊き

たいことを訊いていたら、午後5時近くまでになっていた。流石に、こんな時間帯に教室に居る者など皆無であり、しんと静まり返っている。

侑治郎は、かばんを取りに行こうと窓側の列に足を踏み入れようとした。その時だった。

「うわっ！」

掃除当番の生徒が片付け忘れたのか、床に落ちていた雑巾に足を取られ、前のめりに机に突っ込んでしまった。机と椅子が同時に倒れ、轟音（ごうおん）が教室中に鳴り渡る。

「いつつ……」　　「たたく、誰だか知らんけど、ちゃんと片付けておけよな。はあ、よりにもよって百武の机を倒してしまうとはなあ……。あれ？」

愚痴りながら強かに打った額を撫でていると、何も入っていないと思われた机の中から、クリアファイルが飛び出し、倒れた机の前方に落ちていた。

手にしてみると、それなりの厚みと重量があることが分かった。

（誰も居ないし、ちょっとぐらい見てもいいよな）

好奇心が湧き、1番上の何も書かれていない白紙をめくってみると、無数の文字が白紙を埋め尽くすようにして紙面を賑わせていた。かぎかつこや三点リーダーやダッシュがあることから、ある結論に達した。そしてそれは、夢想だにしなかったことであり、目を丸くする。

「もしかして、小説？　まさかあいつが……でもありえるな。眼鏡をかけているし、結構ものを知ってるみたいだし」

あっさりと単純な理由で衝撃的事実を片付けた侑治郎は、中身が気になって仕方なくなった。見てはいけないと脳内の天使が懸命に呼びかける。しかし、悪魔も負けていない。ただ単に、見ちまえ見ちまえと連呼するのみではあるが、これが実に効果的だった。

「少しぐらいなら……」

死闘の末に悪魔が勝った。昂揚感が胸を圧し、若干の息苦しさを

感じつつも1ページ目の文章に視点を変更させた。

「放てえっ！」

鉄砲頭の胴間声が発せられるや、草むらに伏せついていた30人の鉄砲足軽が一斉に引き鉄^{がね}を引いた。筒先から発砲煙とともに必殺の弾丸が大気を切り裂き、呐喊してくる敵勢を打ち倒していく。その中に、士気を采配していた1人である騎馬武者の額に喰らわせることができた。

「よし、ひとまず退くぞ！」

鉄砲足軽は、鉄砲を背負うと縄でくくりつけ、一目散に退いていくとする。

その退いて行く様を見た騎馬武者は、同僚を撃ち殺された悲憤慷慨し、絶叫する。

「ええい、小癪な！ かような小勢、ひと思いに踏み潰してやろうぞ。皆の者がかかれい！」

「おおおう！」

騎馬武者が手勢を率い、鬼のような形相で鉄砲足軽が退いた方をひた走る。やがて草むらからも抜けた。その時だった。

「こ、これは何としたことぞ！？」

先頭に行く騎馬隊が眼前からいきなり消えたのだ。

不安が生じ、中ほどを走っていた騎馬武者が、進撃を停止させようと号令をかける。

「止まれ！ 止まれ っ！」

一応は止まったものの、後方を走っていた者は何故止まったのか解せない。血の気の多い武者達は、文句を言う事も出来ずにただ血走った眼で前方を睨むのみだ。

騎馬武者は、10人ほどを割いて斥候を出した。すると、草むらを抜けた先には空堀が掘られていて、騎馬隊は壊滅したと言う。

「むむむっ……では、なぜあいつらは逃げおおせたのか」

疑問を吐露し、忌々しげに齒軋りをする。

「やむおえん、一時撤退するぞ！」

先ほどまでの氣勢は何処へやら、すごすごと持ち場に戻って行った。

その光景を本丸からじつと見下ろしている小具足姿の女が居た。見た目は幼さが取れて芳紀^{ほうき}を少し過ぎたほどであり、艶やかで長い黒髪を後頭部辺りで束ね、額^{おもて}には細い白布が鉢巻として巻かれている。卵形のつるりとした面の中に整えられた眉、強い意志が込められた大きな瞳、筋の通った鼻に、ふっくらとした唇には紅が引かれている。体はほどよい肉付きで、年相応の色気も備えていた。

彼女の名前は、遥山^{はるやま}夏音^{なつね}。古風な時代に似つかわしくない名前であるが、父譲りの義理や人情に厚い気質を受け継いだ戦乱人だった。

気がつけば侑治郎は、夢中になって熟読していた。読了して一息ついた頃には、午後5時半を少し回っていた。ふと、体に不快感があることを覚えた。それもそのはず、高温多湿の教室に閉め切った状態で1時間も居れば、体中に汗を掻くことは常識である。かばんからタオルを取り出して、とりあえずは顔に浮いた汗を拭き取る。首の汗を拭いた時、疑問に思う。

（これを届けた方がいいのか、机の中に戻しておいた方がいいのか……）

ぺらぺらめくると必ずと言ってもいいほどに、赤ペンで添削した跡が残っていた。ところが、70ページ目でぶつとりと途絶えており、おそらくは部屋に帰ってから添削を再開するつもりだったのだろう。

（届けてあげるか。今頃は探してるかもしれないし。……ただ、こんな汗まみれじゃ駄目だよな）

100枚近くある印刷用紙を綺麗に整えてクリアファイルの中に戻した。かばんの中に入れて、侑治郎はそそくさと教室を後にした。

10章……真実と意地

「あれ？ おかしいわね、ないわ」

紗弥菜は、かばんの中身を1つずつ出してみた。それでも、添削中だった小説を入れたクリアファイルが見付からない。

「もしかして、学校に忘れてきたのかしら。……面倒だけど、取りに行くしかないわね」

諦観し、渋面を作った瞬間、チャイムが鳴った。

「はい」

様々な人物を思い浮かべてみる。

（今時分に誰だろう。成佳か真優？ それとも……まあ、あいつは滅多に来ないか）

錠前を解除し、ドアを開けて出迎える。

「こんばんは。渡したい物があつて来たんだけど、ちょっといいかな」

意外な人物の来客に虚を衝かれた紗弥菜は、目を瞠った。

（な、何で侑 円城寺が私の部屋に来るのよっ！？）

頭が激しく混乱の坩堝るつぼと化し、予想外の状況に脳の処理が遅れている。しかし、いつものように何処か冷たさを含んだ眼に変化させると、眼鏡の智ちを触りながら冷たく言い放つ。

「何しに来たの？ 部屋を間違えたんなら、謝れば許してあげるわよ」

「いや、間違えてないよ。ただ、渡したい物があるんだ」

「あっそう。渡したら、早く帰りなさいよ」

「言われなくてもそうするさ。はい、これ。忘れ物だろ」

侑治郎がかばんから取り出したクリアファイルに、紗弥菜の動転は一気に極まった。クリアファイルを奪うようにして受け取ると、ひしと両手で以って胸の中に抱きしめた。真紅に染まった顔を胸に落とし、今にも頭から外気より熱い風を出しかねない。

（何で何で何で！？ 侑治郎が私のクリアファイルを？ ということは中身を読まれたって事？）

黙り込んでしまった紗弥菜に、対処法などはなかった。

侑治郎は、一時的に混乱から復活を待った。顔を下に向けているものだから、何ごとかをぶつぶつつぶやているのは分かるが、表情が全く分からない。失礼と知りながらも少ししやがみ、下から顔を窺ってみた。

眼鏡のレンズ越しに瞳が上下左右に動き回り、動揺の様子がありありと表れている。呼吸も少し荒く、心臓が高鳴って胸が苦しいのだろう。クリアファイル越しに大きな胸を潰していた。

「それじゃ、俺はこの辺で……」

これはしばらくは無理だと悟り、侑治郎は紗弥菜に背を向けてその場を去ろうとする。

「ま、待つて！」

紗弥菜が侑治郎の肩を掴み、自分の方に引き寄せた。

「ええっ？」

侑治郎は後ろから倒れそうになるが、何とか踏ん張って振り向いた。

相変わらず紗弥菜は、上気とした顔だった。恥ずかしそうに眼鏡を外して両手でもてあそびながら、伏し目がちに侑治郎を見る。

そのしおらしい紗弥菜を初めて見た侑治郎は、どきまぎした。

いつもは鼻持ちならない高圧的な女と言う印象しかなく、とにかく嫌な奴という認識が脳内での確定事項だったからである。それが今、激しく揺らいでいた。

紗弥菜が蚊の鳴くような声で訊ねる。

「その……こ、これを読んだのよね？」

「あ、ああ、読んだよ。……それが？」

眼鏡をかけ直しつつ、恥ずかしさと嬉しさを混同した声音で言う。

「よ、良かったら、私の部屋に入ってくれない！？ 詳しく聞きたいの……」

「ええっ!？」

甚く^{いた}仰天した。”考えられない”と言う単語が脳味噌を埋め尽くす。

「だ、駄目……かな？」

上目遣いで侑治郎の双眸をじっと見つめた。

侑治郎は心中で生唾を飲んだ。

性格は多少難があるが、紗弥菜は基本的に美貌を備えた美人である。そんな美人に上目遣いで物事を頼まれては断りようがないし、男なら胸が高まらないはずがない。

「いいよ。俺なんかでよければ」

侑治郎が首肯して言うと、紗弥菜は手を合わせて飛び上がりんばかりに喜んだ。

「本当っ？　ありがとう！　じゃ、狭いけど入って入って」

紗弥菜の嬉々とした表情に、侑治郎は若干の不信感を胸に留めつつも、後に従った。

紗弥菜の部屋はこざっぱりと整理整頓されており、フローリングの床に塵1つ落ちてないほどであった。部屋の奥には勉強机が置いてあり、その上には10冊近くの辞書が2列に分けて詰まれており、物書きということを植え付けるのにたやすかった。勉強机の隣には木製の本棚が鎮座し、様々な種類の小説から参考書や図鑑や漫画や絵本などが、所狭しと並べられていてまるで小さい図書館のようである。部屋の中央には少し大きめのモノクロのテーブルが置かれ、傍には座布団が敷かれてあった。

「まあ、適当に座ってくつろいでよ。私はお菓子と麦茶を持って来るから」

「あ、こりゃどうも」

侑治郎はとりあえず座布団の上にあぐらを掻いた。

「はい、どうぞ。お菓子は甘い物しかなくてごめん。食べられそうだったら、食べて」

紗弥菜が申し訳なさそうな顔をしながら、麦茶と皿にうずたかく盛られた甘菓子を侑治郎の前に差し出した。

「いやいや、そんなそんな。お構いなく」

慌てて手を振る侑治郎の向かいに座りつつ、紗弥菜は首を横に振った。

「遠慮しちゃ駄目よ。それに、これから結構時間がかかると思うからね。頭を使うから嫌でも食べたくなるわよ。さてと、感想を聞かせてもらっても宜しいかしら？」

「うん、分かった。まずは」

侑治郎も普段から読書をしており、特に歴史小説を愛読していた。それ故に、相当な知識を持っているせいか、容赦無く内容について突っ込んでいく。

その度に紗弥菜は、喜怒哀楽を存分に働かせていた。やはり、自分の作品を他人に批評されるのは相当効くらしい。特に、長々と上手い表現にしたつもりで自分では良い文だと思っても、他人から見ればくどいの一言で悪文と片付けられると尚更である。それでも、最終的には侑治郎の意見を真摯に聞き、冷静に受け止めていた。

「でも、良い所は良いし、姫とか武将の人物表現は良いと思う。ただ、細か過ぎるのも想像する助けにはなるんだけど、多用し過ぎるのは避けた方がいいかなと」

侑治郎とて鬼ではない。否定的な意見だけではなく、ちゃんと褒めるべきところは褒めている。

「以上かな。あれこれ言って悪かったな」

今の紗弥菜は無表情に近く、一応頭を下げて謝っておく。

「ううん、全然気にしてないわ。そりゃ、けなされたり罵倒されたりされれば頭にくる。けど、円城寺の場合は的確な批評だったもの。文句も怨みもないわ。付き合ってくれてありがとう」

莞爾と笑い、こうべを垂れる。

侑治郎は、初めて自分に対して礼儀正しく振舞ってくれる紗弥菜に、感動すら覚えた。同時に、激しく揺らぎ放しだった嫌な奴と

言う確定事項が、脳内から抹消される。

頭を下げている紗弥菜の腹が、か細くくうくと鳴った。

「あ……」

2人が同時にもっとも発しやすい母音を口内から漏らす。

皿を見れば、うずたかく積まれていた甘菓子はとうに消え失せ、食べかすのみが残っているだけである。

侑治郎は、何だか紗弥菜のことが可愛く思えてきた。見た目はすっかり大人だが、以外にまだ子供なんだなと勝手に思う。

「これは……その……」

紗弥菜は必死に取り繕うとするが、なかなか言葉が出てこない。それがまた心美しく、侑治郎の頬を緩ませる。

「よし、あれこれ言って申し訳ないし、俺が晩飯を作ろう。好きな料理を言ってくれ」

突然の宣言に弾かれたように、紗弥菜は侑治郎をまじまじと見た。

「え……そんな悪いわよ。批評して疲れたんじゃない」

「いいから、好きな料理を言ってくれ」

急かされ頭を切り替える。少し考えた後、開口する。

「ゴ、ゴーヤとブロッコリーと魚かな……」

「OK。じゃあ、ちよつと食材を持って来るな。台所を借りてもいいか？」

「い、いいけど……円城寺、あんた料理できるの？」

「ああ、任せておけて」

鍛え挙げられた胸板を拳でどん、と叩く。すつくと立ち上がると、侑治郎はさっさと出て行った。

紗弥菜にとって信じられないことが起こっていた。

（私の部屋で男が料理をしている……。しかも昨日までろくに会話をしたことがない男が……）

楽しそうに料理をしている侑治郎に目を向けつつ、当てもなく思う。しかし、すぐに首を横に振る。

（うつん、正確には私が会話の芽を潰していた。折角、話しかけてくれるのに、冷たく返したり、嫌味ったらしく言ったり……。だから、侑治郎は嫌な女だと思ったに違いないわ。いくら小説の為とは言え、悪いことをしたものね……）

近くにあつたクツションを両手でぎゅっと抱きしめる。

（でも、今日みたいなハプニングが遇つて良かった。正直、小説のキャラの構想を固めるとはいえ、半ば演技は疲れてたし。それに、侑治郎とは趣味が同じみたいだし、良い友達に……なれるかな？

……あ、それは私の棘のない態度になればいいだけか）

随想に一喜一憂していると、侑治郎が料理を運んできた。

「どうした？ 腹が空き過ぎて腹痛でも起きてんのか」

「ば、馬鹿、違うわよ！」

言つてから、しまったと思つた。

「じ、ごめ……」

謝ろうとするが、侑治郎が笑声でさえぎる。

「はははは、悪い悪い。それよりも食べてみてくれよ。口にあうか不安だけどさ」

腰を折ると、紗弥菜の前に料理が並べられていく。白米にわかめと豆腐の味噌汁、主菜が程よく皮に焦げ目がついた紅鮭とゴーヤの緑色が目立つゴーヤチャンプルー、他にもブロッコリーを茹でたものなど、紗弥菜の好きな食材を中心にテーブルを賑わす。

「……すっごい……」

頭の中で無数の語彙が浮かんだが、口から出たのはその一言だった。

「いやいや、全然大したことないよ。ちゃんと作つたのなんか、味噌汁とゴーヤチャンプルーだけだしさ。しかもゴーヤチャンプルーなんて、初めて作つたし」

と、謙遜して手を振ってみせる。

「でも、初めてにしては上手くできてると思うわ。本当なの？」

「んまあ、文字のレシピをさっさと読んだだけなんだけどな。出来上

がり写真なんてみたこともないし」

「はあ……」

侑治郎の想像力に紗弥菜は舌を巻いた。並べられた料理を見ると食欲が急激に湧いてきた。胸の前で手を合わせて上半身を少し前に倒す。

「それじゃ、いただきます」

まずは味噌汁を一口する。喉の通りをよくする為だ。出来立てで熱いが、味噌の風味と丁度いいしょっぱさ^{だし}と出汁が調和していて、美味しく仕上がっていた。

次いで、侑治郎が初めて作ったと言っていたゴーヤチャンプルをつまむ。ゴーヤを口の中で噛み砕く。すると、塩分を含んだ水で苦味を取り除いていたらしく、程好い苦味が口内に広がり、紗弥菜は思わず相好を崩した。

「美味しい……」

うつとりとしている紗弥菜に侑治郎はほっとする。

「そりゃ、良かった。まずいかと思ってひやひやしたよ」

紗弥菜は箸を止めて莞爾と笑ってみせる。

「そんなことないわ。味付けがいい塩梅で完璧よ。料理の腕が立って羨ましいわ」

「いやあ……」

褒められて満更でもない様子の侑治郎は、こそばゆそうに頬を指で掻く。

満足そうに食べ進めていく紗弥菜であったが、不意に生来の性格鎌首をもたげてきた。

（料理は美味しい。だけど、何なのこの屈辱感……！ 侑治郎はきつと、子供みたいに凄いだろうとか思っているに違いないわっ！）
そう思った時、腹の内が顔に 特に眼に表れた。垂れていた目尻がいつものようになる。嬉しさと悔しさが心中で闘い始めた。とりあえずは、きつと威圧をかけつつ睨む。

「美味しい、美味しいけど……すっごく悔しい！ さっさと出て行

ってもらえる!？」

いきなり金切り声を発し出した紗弥菜に、笑顔から真顔に瞬時に戻った侑治郎はたじろいだ。

「あ、ああ……分かった」

癇癇を起こした原因など分かるはずも無く、このままいつまでも居座っていては何をされるか分からない為、すつと腰を上げると玄関へ急いだ。

ドアを開けて右半身だけ外に踏み出し、首だけ振り返って紗弥菜の様子を窺う。依然として侑治郎が座っていた真正面を、睨んだまま微動だにしない。

「お、お邪魔しました」

何とも言えない恐怖感が胸と脳を圧する。残りの左半身も素早く戸外に出し、ドアを優しく閉めて、首をかしげながら自身の部屋に戻っていった。

残された紗弥菜は、切歯してひたすら小さなうめきを挙げていた。(悔しい。こうなったら、色々な料理を完璧に作れるようになって侑治郎のことをあつと言わせてやるんだから!)

紗弥菜の中で治まっていた勝気で強気な性格が、再び如実に現れ出した瞬間だった。

翌朝。午前8時。

「でつくん、お前は完全に包囲されている。大人しく出て来い!」
爽奈がいつもの如く、なかなか起きない侑治郎の部屋の前で、飽きずに呼びかけていた。

だが、今日は何度も呼びかけても返事がなかった。爽奈の眼に悪さを企んだ時特有の光が奔る。^{はし}

「よし、今日も必殺”ダイブトゥーベッド”が繰り出されるようだ」

「そーちゃん、好きだよねー。その技」

真優が小さくあくびをしながら言った。

「なんせ、私の十八番だからね！　じゃ、行くよー……ありゃ？　まゆっちゃん、紗弥菜はいずこへ行った」

「さあ……でも、侑さんの部屋のドアが開いてて、中に入ってるみたいだよ」

爽奈が目を見開き、頓狂な声で叫ぶ。

「はあ！？　紗弥菜って侑治郎のこと嫌いじゃなかったっけ？」

「そう見えるかもしれないけど、小説のキャラ設定の為にああいう態度を取ってだったんだって」

ふわぁ〜と気の抜けた声を発し、真優は再び眠そうなくびをする。

「へえー、全っ然知らなかった。小説を書くのも難儀なもんだねえ」
爽奈はどうでもいいと感じて応じた。

「武士が突然の奇襲に驚いた時に言う言葉は？」

「すわっ！　敵襲ぞ！」

紗弥菜の問いに体で反応した侑治郎。顔まで作っていたが、夢だと知ると寝惚け面になってしまった。

紗弥菜はカーテンを開け放つ。

「おはよう、良い朝ね」

「全くだ……って、お前何やってんだ！？」

侑治郎は、思わず枕を盾に身構えてしまう。

すると、紗弥菜は心苦しそうに謝罪をする。

「昨日はごめんなさい。自分で言うのも恥ずかしいぐらいんだけど、私は相手が得意そうに作っていたり、昨日の場合は食べて美味しく、勝手に対抗意識を燃やしちゃう時があるのよ。それで半ば我を忘れてあんなことを……」

侑治郎は、寝癖のような頭をぼりぼりと掻く。

「そうなのか。まあ、仕方ないんじゃないか。あん時は驚きはしたけど、怒っちゃんいないよ。そうかー、料理か……ま、紗弥菜の料理がどんなもんか見てみたいし、頑張ってな」

「うん、ありがとう」

紗弥菜は、しとやかに笑った。だが、まだ心苦しそうである。

侑治郎が、面^{おもて}をやや渋面にしつつしっくりこないとばかりに言う。

「うーん……。なんからしくないと言うか、違和感があるなあ。今日からはありのままの態度で話してくれよ。俺はその方がいい」

紗弥菜がはつとしように、笑顔を壊して顔を怒らせる。

「うるさい！ 調子に乗るんじゃないわよ。絶対、料理を作れるようになって、ぎゃふんと言わせてやるんだから。覚悟しておきなさいよ！」

「爽奈と同じかよ！ ……まあ、いいか。これからもお手柔らかに宜しくな」

「ふん！」

腕を組んでそっぽを向く。

侑治郎は苦笑しながら、ようやく紗弥菜を気の置けない人物として見る事できると、内心喜んだ。

11章……目下実習中

定期考査が一応無事に終了し、息をつく暇もなく1ヶ月間の長期に亘る本実習に突入した。

昨年も10月と2月に2週間ずつ行われたのだが、分散していることもあつて最初の2週間は、見学実習（保育士としての1日の基本的な流れをつかむ為に、担当の保育士の補助を行うこと）と設定保育（粘土や折り紙などの製作、鬼ごっこやかくれんぼなどの遊びのみを行うこと）を中心に行った。残りの2週間はそれに部分実習（おやつの時間やお昼の時間などを部分的に行うこと）を加えて見学実習を廃し、来年の本実習に備えた。

初日は形だけのオリエンテーション。本来であれば、実習担当の保育士が2日目以降の実習の流れを懇切丁寧に説明、質疑応答するのであろう。

しかし、脩治郎を除く4人は説明を聞くだけに終わった。既に去年からボランティアに週に複数回も来ているから、園内のことを隅々まで熟知していたからだ。

脩治郎は脩治郎で、1年弱のブランクと約3ヶ月ボランティアだけでは不安なのか、担当の保育士相手に質疑応答を繰り返していたが。

翌日。実習2日目ともあつて、早速5人は現場で働くことになった。最後の1週間を除き、いくらボランティアを何度もこなしている者であっても、保育士が補助に当たってくれた。最初の週は3人、次週からは2人、3週目と最終週は1人と、1人ずつ減らしていく方針である。

ブランク長かったことから脩治郎は、当分の間は4歳児クラスを担当することになっていた。因みに、他の4人は日替わりで4歳児クラス以外を担当した。

「ねーねー、ゆうじろーせんせー。なんでせんせーのエプロンは、

キリンさんがいるの？」

男子園児達の執拗な猛攻を軽々と受け流していると、腰下から無邪気且つ可愛い声で女子園児に質問された。

「お、よく訊いてくれたね。これは……」

「タマつぶしナツクル　っ！」

1人の園児が小さな手を握って作った拳を、よりにもよって男の泣き所に突き入れた。

実習に入る数日前のある日のこと。真優の部屋にいつもの4人が集まっていた。

保育園に実習となればエプロンが必要である。そこで裁縫の一番得意な真優が、昨年に引き続き一手に引き受けて、みなの方を作製していた。

「俺のエプロンってこの麒麟……？」

最初に受け取った侑治郎の眼が点になっていた。

黄色い生地我真ん中に、少し大きめの白布が縫い付けられてあり、そこにでかでかと”ゆうじろう”と黒字で書かれていた。その名札を取り囲むように、アニメ風の可愛い麒麟のアプリケが複数貼られていた。

「だって侑さん、背が高いんだもん。イメージがそれしか思いつかなくて」

真優は、口では申し訳なさそうに言ってるものの、楽しそうな声音だった。

この確信犯的な犯行に、侑治郎は頼んだ手前もあってか、文句1つ言わずに黙したままエプロンを両手に持って、じいっと見続けるしかなかった。

「はい、これはなるちゃんの」

成佳にエプロンを渡す。そのエプロンは茶色い生地の真ん中に、侑治郎と同じく少し大きめの白布が縫い付けられ、大きな字で”なるか”と黒字で書かれてあった。名札を囲むようにして、これまた

アニメ風の可愛いカンガルーのアプリケが複数貼られてあった。

成佳は嬉しさのあまりに真優を抱擁する。

「わぁ〜可愛いわねえ。真優ちゃん、ありがとう。わざわざ新調までしてもらって」

「ううん、丁度新しいのにしようと思ってたの。ほら、意外に傷んだり汚れたりしてる所があっただしね」

言い終わった所で真優は、抱擁から解放された。

成佳は、気に入ったのかすっかりエプロンに熱視線を送っている。

「さやっちゃんはこれだよ」

ねずみ色と白の水玉模様の生地にはやはり中央には白布が縫われてあり、大きな黒字で”さやな”と記されてあった。名札を囲むように、アニメ風の可愛い子猫のアプリケが何枚も貼られてある。

「こ、これ……なの？」

紗弥菜は驚きを隠せないでいる。

真優は笑顔で頷く。

「うん。すっごく可愛いでしょ？」

「いーなー。私も子猫にすれば良かったなー」

順番待ちをしていた爽奈が、羨望の眼差しで紗弥菜が持っているエプロンを見ている。

「あ、そーちゃんはこれだよ」

薄い水色を生地にしていて、ど真ん中に白布が縫い付けられある。それに大きく黒字で”そうな”と書かれてあり、かなり目立つ。名札の周りには、アニメ風の可愛いおこじよのアプリケが幾多も貼られている。

「わあ、まゆっちゃんありがとうっ！ イメージどおりだよ。滅茶苦茶可愛いし！」

爽奈がエプロンを手に取ると、子供のように跳びはねて喜び始めた。

欣喜雀躍をしている爽奈を微笑ましく見てると、ちょっと間固まっていた紗弥菜が、憂い混じりに再び口を開く。

「こんなに可愛いのを着て大丈夫かしら……」

そんな紗弥菜を真優は優しく勇気付ける。

「大丈夫、大丈夫。かえって親しみやすいと思うし、園児達も喜ぶよ」

「……そうね。考えすぎよね」

紗弥菜の顔に明るさが戻る。

「私や子供達から見たらさやっちゃんは、大人っぽ過ぎるんだよね。ある程度、幼さを残してもいいんじゃないかって思うし」

すると紗弥菜は侑治郎を一瞥し、少し哀れに思いながら「でも」と言いかける。

「侑治郎のエプロンは、もう少し大人っぽくても良かったんじゃない？　せめて麒麟の頭数を減らすとか」

真優は笑顔を見せつつ首を横に数回振り、断言する。

「そんなことないよ。大人気間違いなしだよ」

「だといんだけどね……」

どうにも爽奈ほどではないが、真優には子供っぽく少し融通の利かないことがある。特に、自分が作った物に対する愛着は強いものがあり、侑治郎を除く3人が呆れることもあるほどだ。

（まあ、人の心配より私自身の心配だけどね……）

真優の作ったエプロンは可愛くて、生地もしっかりしているから丈夫で長持ちする。これはありがたいことなのだが、やっぱり紗弥菜には子猫満載のエプロンは恥ずかしかった。例えば実習がいつもの4人と一緒だとしてもだ。それに、爽奈とのやりとり以外では比較的大人っぽく振舞っているつもりである。

その場で瞑目し、腕組みをしていた紗弥菜の脳に閃光が奔った。（もしかしてこれはきつと、園児に対してもっとフランクに行けって真優なりの意思表示を含んでいるのかしら？　だとしたら、この子猫だらけというのも納得だわ）

突如として両目をつむり、黙りこくった紗弥菜の目の前で手を振って起こそうとする真優。

「どうしたのさやっちゃん？ 眠くなっただんなら、ベッドを使ってもいいよ」

真優の声に反応し、ゆっくり両目を開けて微笑む。

「真優、このエプロンを作ってくれてありがとう。やっと分かったわ」

「ん？ 何のことが分からないけど、気に入ってもらえたみたいだね」

「うん。今回は、もっと園児達と仲良く遊べるように頑張るわ」

そう言い放つや、紗弥菜は成佳の方に向かっていった。

その場に残された真優は、安堵の息を吐く。その息は10分前、思案の海に潜ってしまった侑治郎の存在を、忘れていたかのようだった。

「いつ……」

いくら幼児のパンチと言えども勢いをつけて、一点集中すればそりや痛い。あまりの激痛に、苦悶の表情でその場にうずくまる。

「はっはっはー、怪人・ハラスメンの恐ろしさを思い知ったかっ！」

男子園児が歓喜の声を挙げた。周りの男子園児達も真似して「思い知ったかー」と言いながら、飛び跳ね回っている。

侑治郎は、初っ端から痛い洗礼を受けてしまった。

その後も上手いかないこともあった。しかし、それもそのはずである。丸1日ボランテニアなど行ったなどない。しかもボランテニアと言えど、園長の私用の手伝い（草むしりや買い物）と園児達と遊ぶのみで、細かな部分は一切取り除かれていた。

だから、失敗しないはずなのである。他の4人も例外ではなく、その都度担当の保育士を呼ぶ声が、それぞれの教室から半ば悲鳴のように発せられた。

それでも、去年行った実習での設定保育と部分実習を思い出して実践にしていた。とにかく最初の1週間は、自分が慣れることで

精一杯であり、試行錯誤のみで園児達と触れ合うと言うよりも、触れ合ってもらったほうが過言ではないだろう。

因みに今回は本実習なので、全日程の基本が1日保育（園児の登園から帰りまでを行うこと。ただし、ここでは8時～17時を指す）であり、部分実習等の折よりも忙しさが何倍も増えた。5人に充足感はあるが、やはり精神的・肉体的疲労のほうを上回り勝ちだった。2週目に入ると補助は2人に減った。週の初めこそまだまだ試行錯誤の手探り状態が、依然として続いていた。だが、感覚をつかみつつある者も居たし、週の後半には割りと不器用な爽奈と未だにブランドが響いている侑治郎を除いた3人が、自分なりのペースを会得したいった。

3週目に入った。補助は1人になり、助けもだんだん要らなくなってきた。爽奈も慣れ、最後に侑治郎も慣れて、ようやく園児達との触れ合いを持ちつつあった。保育園の業務にも余力を残せるようになって、それほど心配もなく全力で園児達と遊べるまでに成長した。

そして、いよいよ最終週に突入した。補助は変わらず1人付く。

しかしその補助の保育士が、

「ねえ、円城寺くん。今日は他の子達のクラスの補助をやってみない？」

と、こんなことを提案してみたのである。

「えっ？ でも、大丈夫なんでしょうか？ 万が一のことが起こったら……」

「大丈夫よ。私も補助の1人として見まわっているから。何かあったら、廊下に出て大声で叫んでくれれば、すぐに飛んでいくわよ」
両腕を翼に見立てて、中年の恰幅のよくなった体を揺らせて見せる。

侑治郎は吹きそうになったが、それは失礼だと意識の底に追いやりながら、苦笑を面に表す。

「分かりました。何ごとも経験ですからね。引き受けます。ところ

で仕事内容は、どのようなのでしょうか？」

「そうねえ……午前8時に成佳ちゃんの担当の0歳児クラス。午前9時10分に真優ちゃんの担当の2歳児クラス。午前10時20分に紗弥菜ちゃん担当の5歳児クラス。午後からはずっと爽奈ちゃんについてもらってもいいかしら？　なんせ、4歳児クラスは」

思わず股間を押さえそうになったが、それを防いでやや暗い口調で割り込んだ。

「元氣一杯ですからね……」

「ああ、円城寺くんは何度もやられたんだっけ。ほんと、男の子って不憫よねえ。決定的な弱点が外にあるんですもの。くれぐれも気をつけてね」

「まあ、対策は完成してますから、不意打ちさえ喰らわなければ大丈夫そうですね」

あれから幾度ともなく急所にクリーンヒットを喰らわせられてきた。侑治郎とて馬鹿ではない。流石にオウム返しはできないが、やられっ放しでは本当に使い物にならなくなってしまいう可能性もある。そこで攻撃パターンを頭に入れたり、園児達が観ているであろう、早朝に放映している特撮物を観て、台詞や変身シーンを覚えて抵抗した。もともと特撮物は、6章で講演していた元同級生で親友の納富晋之介と成富果穂がどん引きするほどの知識を持っているから苦ではなかった。無論、男子園児ばかり相手をしている訳ではない。

女子園児達には、その1時間後のアニメを物真似していた。因みに、少女漫画雑誌に掲載されている人気漫画である。内容は最近流行りの”魔法もの”で、主人公が敵にとどめをさす時に言う「ミラクルレジェンド、ファイヤーアスクラッシュ！」や「あっ、びっ、地獄にいっ（10秒ほど効果音や音楽や動きが止まる）落ちちゃえ」と、微妙に年齢層を絞りにくいことになっている。それらを侑治郎は、園児の為にと覚えて実践する様は尊敬に値する。だが、保育園関係以外の仕事に就いている人から見れば、キチガイの類にしか見えないと思われた。

「そうなの。それよりも、もうちょっとで8時になるわよ。そろそろ行ったほうがいいんじゃない？」

腕時計を見ながら保育士が言った。

「あ、そうですね。じゃ、そろそろ……」

侑治郎は、ひとまず成佳が担当している0歳児クラスへと向かった。

11章 - 1 : 聖母現象？

「失礼しまーす……」

侑治郎が教室に入ると、幼児向けアニメを観ていた成佳が、首だけ振り向かせてにつこりと微笑んだ。

「おはようございます。侑治郎さんもこちらにいらして下さい」

広々とした部屋の真ん中に乳児用の布団が2組敷かれており、傍らにはプラスチックかごがあつて中に大小複数枚のタオルと、人数分のおしゃぶりがあらかじめ置かれていた。紙おむつも置かれており、パッケージから見ると男女兼用ものと言う事が分かる。

侑治郎が感心したように「ほうほう」と言いながら、部屋の真ん中を通り過ぎ、行儀良く正座している成佳の隣にあぐらを掻いた。

「えっ!？」

声を挙げて仰天する侑治郎。

それもそのはずである。成佳の膝の上には、既に2人の乳児が座っていたのだ。しかし、アニメに夢中になっているせいか眼以外は微動だにしていない。

「じゃあ、侑治郎さんはこっちの龍弘くんりゅうこうくんをお願いしますねえ」

「分かった。それにしても、よく2人もだっこできてたね。派手に動き回る時期なのに」

成佳の右膝に座っていた龍弘を持ち上げて、左膝に座らせながら、感じ入った口調で言った。

成佳は頬を緩めながら、しみじみと言う。

「なぜだかは分からないんですが、私が担当する赤ちゃんは、みんな大人しい子ばかりなんですよねえ。嬉しいことは嬉しいんですけど、ついて下さった保育士の方々が口々に苦笑交じりに『これじゃ、実習じゃないね』と、仰るぐらいで」

「へえ、何でだろうね」

保育士としては、言葉を発することもできず、1番心中が読めな

いであろう年頃の0歳児の扱いが、如何に難しいか分かってもらおうとしたのだろう。しかし、成佳がだっこすると途端に、借りて来た猫のように大人しくなってしまうのだから、どうしようもない。もう一度保育士がだっこすると、たちまち泣き出したり、腕の内でもれまわったりと、とにかく成佳から離されることが不愉快らしい。いくら保育士があやしても、不機嫌なままであった。

「さあ、分かりません。でも、私がまただっこすると大人しくなったり、機嫌良く笑ったりするんです。それをその日の担当の方が、”聖母現象”と呼んだんですよ」

”聖母現象” 別に、特殊能力でも何でもないのだろうが、成佳には子供の心を穏やかにする天性があるらしい。と言うよりもそういうことにでもしておかなければ、保育士がこれまでやってきた自分の保育士としての能力を、疑いたくなるものである。

「聖母現象”ねえ……確かに合ってるかもな。成佳は優しい性格だし、全くと言ってもいいほど怒らないしな。あと……」

そのまま流暢に結構肉付きの良い体をしてるからな、と言う言葉を言おうとしたが、慌てて喉奥に押し込めた。流石にこれはセクハラってレベルじゃね ぞ！ と、思ったからである。

「あと……なんですか？」

当然、成佳は小首を傾げて訊き返してくる。

侑治郎は胸のうちに罪悪感が湧いてきて堪らず眼を離し、引きちぎれんばかりに首を横に振る。

「何でもない！ 何でもないったら、何でもない！」

性に目覚めた小学校高学年ないし、中学生の野郎みたいな妄想が露見したら、まともに目を合わせられない。挙措^{きよそ}を失う1歩手前までで心中が追い詰められた。

と、成佳が何かを思い出したのか手をぽんと打った。

「あ、いけないいけない。侑治郎さん、この体温計で龍弘くんの体温を測って下さい。私は風沙^{なぐさ}ちゃんのを測りますので」

一瞬、ばれたかと思ったが、どうやら杞憂に終わったらしい。ほ

つとしつつ手渡された体温計のスイッチを入れて、龍弘の服の上部のボタンを2つ外し、そこから手を入れて脇の下に体温計を挿し入れた。その上で動かないように引き寄せるが、両手と頭をしきりに動かすものだから、何度も体温計が脇の下から落ちてしまった。

見かねた成佳がアドバイスを送る。

「体温計を挿し入れた腕を、ぎゅっと掴まえておいた方がいいですよ」

「うん、そうだな。にしても、成佳の方の風沙ちゃんは動かないな」。テレビに熱中してるせいもあるのか。それともこれが「聖母現象」なのか」

成佳が苦笑いを浮かべる。

「さあ、どうなんでしょうねえ」

ぴぴぴつ、と体温を測り終えたことを報せる電子音が鳴った。

「36度2分、と。うん、風沙ちゃんは今日も平熱だねえ。じつとしていてくれてありがとうね」

頭を優しく撫でつつノートに書き込むと、風沙を優しく膝の上から下ろした。

「ん？ どうしたんだ？」

成佳は、面映そうに両目を伏せる。

「侑治郎さん、ごめんなさい。少しお手洗いに行ってきてもいいでしょうか？」

「ああ、いいよ。龍弘がばたついているけど、風沙ちゃんはテレビに夢中だし、少しの時間なら俺でも大丈夫だろうし」

「ありがとうございます。すぐに帰ってきますので」

成佳が立ち上がって、そそくさと教室から出て行った。

眼で見送った侑治郎が、意識を膝の上にちよこんと座っている龍弘に移す。途端に、生暖かい感触が膝上に伝わってきた。

「龍弘……お前、もしかして」

とりあえず、その場に仰向けに寝かせて服のボタンを取り、紙おむつを広げてみた。すると、如何ともしがたい臭気とともに、大の

ほうの便が現れた。

侑治郎はうんざりとした表情を隠すことなく、「はあ……」と溜息をついた。

「やっぱりか……」

いつまでもへこんでいても仕方ない、そう思いながら立ち上がり、紙おむつとウェットティッシュと『おむつ用』と書かれたゴミ袋を持ってきた。

そして、便の形状を再度見直す。と、なぜか侑治郎の顔が明るくなった。

「でも、1本か。これなら始末が簡単だな。にしても、可愛い顔して豪快な物を出すんだな。きっと将来は大物になるぞ」

侑治郎の言葉を理解してるのか、龍弘は「きゃっきゃ」と機嫌良く笑いながら、短い手足を動かした。

「こらこら、そんなに動くなよ。じっとしてればすぐに終わるからな」

薄く透明なビニールの手袋をはめて、紙おむつを便を包むようにして丸め、ゴミ袋に捨てる。次に、ウェットティッシュを取って、尻穴周りの残り便を性器につかないように、前から後ろにさっと拭き取った。最後に、替えのおむつを尻に敷き、隙間ができないように多少きつめにして、マジックテープで固定した。

「ふう、あとは……」

ウェットティッシュを捨て、手袋を手を汚さずに取って捨てた。

暴れる龍弘を言葉でなだめながら服を着せると、ようやく終了である。

「やっと終わった。っ。どうだ？ 気分良いだろ」

龍弘を座らせつつ、試しに問うてみた。

龍弘は、両手をばたばたと動かしながら、「きゃはは」と笑って答えた。

「そうかそうか。なら、良かった。こちらら数年振りだったからなあ。我ながら上手くいったもんだ」

体中がほぐれるような安堵感を感じ取っていると、風沙がハイハイをして近付き、両手を侑治郎の膝の上に置くと、穢^{けが}れのない瞳で両目をじいっと射るように見始めた。

「お、どうしたのかなー？ 龍弘ばかり構ってて寂しくなっちゃたのかな？」

侑治郎が猫なで声で訊いてみるが、風沙は黙って凝視を続けている。

困惑した侑治郎は、近くにあったパンが擬人化したような仮面を引っ掴み、顔に装着した。

「やあ、僕マジパンマン！ すごく甘い顔だから、アリさんが体を登ってきて大変なんだ！ まあ、ポケットにはマーズ社が作った『アリさん根絶』が入ってるから、大丈夫なだけだね！」

うる覚えの声音でご機嫌を取ってみた。すると、風沙の瞳に涙が溜まり始めたではないか。両目がぎゅっと閉じられ、代わりに口が大きく開けられた瞬間、侑治郎は何かに感付いて仮面を取り去り風沙を持ち上げ、でん部辺りをかいでみた。

「……風沙さん、あんたもですかい……」

侑治郎が「はあゝあ……」と溜息を吐いていると、出入り口が開かれた。

「侑治郎さん、ごめんなさい！ 遅くなってしまっ……」

珍しく、いつもはのんびりと構えている成佳が取り乱し気味だった。

「ああ、何の何の。龍弘がたれた以外は、何もなかったから」

「そうですか。でも、何で風沙ちゃんを持ち上げているんですか？ 今にもぐずりそうですし」

侑治郎は「あっ」と気づいて声を出して苦笑う。

「ごめん、前言撤回。風沙ちゃんもやっちゃったみたいなんだ……」
成佳の顔にいつもの表情が戻ってくる。

「じゃ、風沙ちゃんの方は私が取り替えますねえ」

「お言葉に甘えます」

深く頭を下げつつ、まるで朝貢を献上せんばかりに、涙目の風沙を成佳に手渡した。

成佳は布団の上に新聞紙を敷き、その上に風沙を寝かせると、手際も素晴らしくあつと言う間におむつを交換してしまった。

侑治郎は、目の前に起こった早業を、はやわざ間抜けのように口を開けたまま見ていたであつた。

「す、凄い……早いだけじゃなくて技術も兼ね備えているとは。流石は成佳」

「ふふ、それほどでもありませんよ。前に話したかもしれませんが、きょうだいが居ない代わりに、いところが沢山居ましたからね。よくお守りをしてましたから、おむつ交換なんて慣れっこです。それに風沙ちゃんは、ちゃんとした固形のうんちでしたし。これが液状のうんちだったら、後始末が凄く大変なんですよ」

話しながらも穏やかな表情を全く崩さず、服のボタンを留めている。

その姿に侑治郎は、子供に対する成佳の対応に強く尊敬の念を抱くのだった。

11章 - 2 : オリジナリティ満載……？

1時間ほど経った後、次に侑治郎は2歳児クラスに入室した。

5人と人数は少ないが、少しながらも喋れるようになる時期だけあって、悲鳴に似た叫び声や、訳の分からない言葉を大声で言い放っていたりする園児が居た。

と、1人の園児が侑治郎の存在に気づいた。足にしがみつくや、凄まじく高いテンションそのままに揺らし出した。

「せんせー、ぼくねー、ピーポーを見たんだよー」

「ピーポー？ …… あ、救急車ね。へえー、何処で見たの？」

侑治郎がしゃがんで園児の視点に眼を合わせつつ、優しく微笑む。
「うーんとねー、えーつとねー。『レスキューレンジャー』だよー」

園児の言った単語で、何を言わんとしたか理解した侑治郎は、得意気に返す。

「あー、『レスキューレンジャー』ね。先生も観てるよ。レッドが消防車で、ホワイトがピーポーだよね」

「そーだよつ。でも、ホワイトのほうが強いもんつ」

嬉々として断言した男子園児の近くに女子園児がやってきた。

「ちがうよ。モノクロのほうが強いよつ」

だが、違う男子園児が不服そうな顔で異議を唱える。

「えー、カムフラージュが1番だよー」

意見をぶつけ合う園児達を、微笑ましそうに静観する侑治郎。そこに、白い布が敷かれた長机に隠れるようにして何ごとかの準備を進めていた真優が、ひよこつと顔を出した。

「侑さーん、ちょっと来てー」

足に引っ付いていた男子園児を優しく離し、2人の輪に改めて加えてやると、長机の後方に周った。そこには真優が台本を何度も小声で読み返しながら、自作の人形を動かしていた。

ずり落ちそうな眼鏡を慌てて直しつつ、侑治郎ににこつと笑いか

ける。

「本当、ちょうど良かったよ。今日は特別篇で登場人物が3体から倍の6体が増えるから、声の種類が限界で……。なるちゃんなら楽勝なんだけど、私は素人だしね」

「と言うことは、俺は人形劇のお手伝いと」

「うん、侑さんは他のことをして遊びたいだろうけど、人形劇が終わったら、ということのひとつ」

真優はぱん、と手を合わせて懇願した。

「いや、俺は全然かまわないよ。むしろ良い経験になるしな。で、俺の役は何なんだ？」

「新潟県の絶滅危惧種として有名だったトキのトキ麻呂と猿のモンの助と直江兼続」

侑治郎の顔色が瞬く間に変わる。

「な、直江だと!？」

みなさんの一般的な公家の印象は、太っついてお齒黒で変な所に書かれた眉だと思う。それを2頭身にして某国体風にアニメ調にしたトキの目とくちばしを拝借したようなもの。つまり、後ろから見れば単衣と烏帽子（ひとえぎぬ えぼし）を被った公家にしか見えないが、正面から見れば何処かで見たとようなアニメ調のトキが、公家の格好しているのだ。それがトキ麻呂の正体である。

猿は茶色の短パンに、ど真ん中に茶色の字で『I am MON KEY』と書かれた白地の半袖を着ており、つばのついた帽子これもまた『I am MON KEY』と書かれている。を被っている。両目が小豆のように小さく、どこことなく愛嬌がある。こちらでも可愛くアニメ風に仕上がっていた。

最後の直江兼続だが……。

「真優。お前さ、これはまずいんじゃないか？ 絶対、滋賀県からクレームが来るぞ」

「商品化されるはずもないから、大丈夫だよ。個人で楽しむ分だし、某小型哺乳類みたいに訴えられないだろうし」

「ずいぶん強気だな……。まあ、いいけど。で、名前は何て言うんだ？」

「そうだねえ、色々候補はあったんだけど、最終的に『愛にゃん』になったよ」

今や全国的に人気者（猫）となり、”ゆるキャラ”ブームの火付け役となった『ひこにゃん』にあやかっただろう。兜の「愛」文字以外はまんま『ひこにゃん』だった。

「あ、『愛にゃん』……！？」

純粋な歴史好きの侑治郎は、腹をえぐられるような衝撃を受けて、絶句した。彼は『ひこにゃん』でさえ、そりゃないわ、と思っただからだ。

「実は、他にも伊達政宗から取った『伊達にゃん』とか、加藤清正から取った『かトラ』とか、斎藤道三から取った『どーさんまむし』とか一杯あるんだよ」

人形を入れてあった大きな目のかばんから、パクリに近いものやら独創性の高い人形が続々と出てきた。

啞然としながらもキャラクターに光るものがあつたらしく、侑治郎は手にとってみた。

「『伊達にゃん』はそのまんまだけど、『かトラ』はいいな。男の子には人気出そうな凛々しい面構えしてるし。『どーさんまむし』は、まんま某アのつくモンスターに見えてならないんだが……。ま、別に商品化しないから、いいのか」

「そういうこと。おっと、早く始めようよ。他の遊びをする時間がなくなっちゃうよ」

「分かった、分かった」

最初の場面に登場する人形が長机の上に配置され、真優は園児達を集めようと立ち上がって呼びかける。

「みんなー、お人形さん達のお話を始めるよー」

すると、今まで各々騒いでいた園児達が、欣喜雀躍しながら長机の前に集まってきた。

「わあー、クマえもんだあー」

「せんせー、早くー」

園児達のお気に入りキャラクターを呼ぶ声と、急かす声が交互に混じる。

そんな園児達の様子に、真優は満面に喜びをほとばしらせて、鷹おっ揚ように頷く。

「うん、分かったよー。今日はね、新しいお友達も出てくるから、ちゃんと観てるんだよー。分かったー？」

「はい！」

園児達が甲高い声とともに、腕がちぎれんばかりに挙手する。

真優がしゃがみ、ひそひそ声で言う。

「それじゃ、侑さん。始めるね。台本を見て出るタイミングをしっかりと守ってよ」

「おう、任せろ」

真優は膝立ちとなって、熊の人形を動かし出した。

「あれれ、おかしいなあ。ここに、はちみつをつぼを置いてたはずなんだけど」

膝近くに置いてあった柴犬の人形を、長机の上に登場させる。

「おや、どうしたのかな。クマえもん。何か困ったことでもあったのかね？」

クマえもんをポチ太郎の方に、鋭く振り向かせる。

「あ、ポチ太郎じいさん。おはようございます。ちょうど良かった。僕のはちみつをつぼを知りませんか？」

「はて、知らないのう。わしは今来たばかりだからな」
更にここで三毛猫の人形を投入する。

「あらあら、2人とも何をしているの？」

先ほどのポチ太郎の登場と同様に、はっとしたようにクマえもんを、みけこの方に振り向かせる。

「あ、みけこさん。おはようございます。僕のはちみつがなくなっ

たんですよ。一緒に探してくれませんか」

「ふん、冗談じゃないわ。あたくしのご主人様をご存知よね？ お菓子工場の社長なのよ。そんなくだらないことなんか、したくないわ」

「そ、そんなぁ……」

クマえもんを落ち込んだように見せる為に、突っ伏す。

「おや、そんなことを言ってもいいのかのう。君のご主人様を雪崩から助けたのは、このわしじゃぞ。その命の恩人の友達のお断りを断ると言うのかね。猫は犬より優しくない生き物とは、よく言ったものだ」

「むむう……分かったわよ！ あたくしも探せばいいのでしょう！
？ ほら、いつまで寝ていらっしやるの？ 早く起きた起きた！」
みけこを勢いよくクマえもんの傍まで寄せ、前足で胴体を蹴っ飛ばさせた。

「あぎやーっす！ いたたた……みけこさん、いきなり何をするんですか。痛いですよ……」

みけこを持ち上げ、クマえもんの背中に乗せて突っ伏させる。

「お黙り！ 早く探すのよ！」

「は、はい……」

（何と言う台本だ……）

侑治郎は、改めて読み返した台本に溜息が出る思いだった。

（いくら子供向けと言っても、ストーリーが最初から破綻してちや意味ないんじゃないかな。まあ、まさかこれを紗弥菜が書いたわけじゃないよな……。そうだとしたら）

疑念が尽きない侑治郎の隣に、真剣な表情で演じている真優が居る。その真優の両足が、ぱたぱたと床を鳴らし始めた。

「これは俺の出番がきたってことか？」

声をひそめて問うと、両足の動きを一旦止めてから、片足ずつ振り下ろした。

「『そう』か……」

腹をくくる。台本の出来はどうであれ本人は慣れない作業に、おそらく悩乱しそうになりながらも書き上げたのだらう。その頑張りを無下にはできない。

（よし、やってやろうじゃないか）

気合が入る侑治郎。決意を示すように人形を3体長机の上に登場させた。

「くけーっこっこ。お主らそこまでおじゃる」

真優が3体を次々に振り向かせる。次いで、ポチ太郎の首を軽くかしげる。

「お前ら誰じゃっ？」

「よくぞ訊いてくれた。わしは、トキのトキ麻呂でおじゃる。で、隣が」

「ウキウキウッキー！ ミーは二ホンザルのモンの助でござる！ その隣が」

「それがしは、愛と正義を大事にする愛にゃんと申す」

侑治郎がトキ麻呂をずいっと前に出す。

「われら3人揃って……」

真優がみけこの前足の右を指のようにして、つばを指す。

「ちよつと待ちなさい！ 真ん中の猿が持つてるつばは何！？」

「ウキ？ これは……ミーのでござる！！」

「嘘よ！ つばにクマえもんって名前が書いてあるもの！」

真優が、クマえもんの動作を緩慢から俊敏なものに変える。

「あつ！ それ、僕のだよ！ 何で君達が持つてるの？ 返してよ！」

「そうよ、返しなさいよ！」

「そうじゃ、返せ！ 嘘つきは既に泥棒になっているは本当のことだの」

侑治郎がトキ麻呂を高々と上げて、急激に落下させ、長机をどん、

と打ちつける。

「くけーい、口々に煩いでおじやる！ モンの助は、そんなことをする猿ではおじやらん！ のう、モンの助」

「ウキキ、そ、そうでござる。ミーほどお利口な猿が、はちみつなぞ盗むはずが……はっ！？」

「モンの助……お主は本当に嘘をついておらぬか？」

「キキツ……、そ、それはその……」

侑治郎がモンの助に愛にやんをぶつけるように、近づけていく。

「それがしは、嘘は嫌いだ。本当のことを申さねば、お主の首をはねてやるうぞ」

「ウキ……キ……、も、申し訳ない！ ミーがクマえもんのはちみつを盗りました！」

侑治郎がモンの助の首を前に倒す。

「いいえ、許さないわ！ 嘘は絶対についちゃいけない。それに、人の物を盗ることもよ。2つの悪いことをした悪人なんか、信じられるわけがないじゃない。ねえ、みんなもそう思うでしょう？」

真優がみけこの顔を園児達に見えるように、正面に向ける。

「そうだ、そうだー」

「モンの助なんて、きらーい」

園児達の率直な非難の声が教室中を包んだ。

「ウキツキツキ……そ、そんなぁ……」

「まあ、待つんじゃ。わしもさつきは、とてもじいさんとも思えないことを言ってしまった。それから、反省して冷静に考えてみたんじゃが、モンの助のしたことは確かに悪い。しかし嘘をついたのは、自分の身を守ろうとしたから、つい、出てしまったのだらう。嘘も悪い。だがのう、つい出てしまったことをあれこれ責めるのは、可哀想と言つもの。みんなもそう思わんか？」

真優がポチ太郎をみけこのように、正面に向ける。

「ポチ太郎、むずかしいよー」

「わかんない」

園児達は渋面を作る。ちんぷんかんぷんでさっぱり分からない様子だ。

「そうじゃな……。例えば、みんなのお父さんやお母さんが大事にしている物を壊したとしよう。当然大事な物だから、怒るだろう。みんななら、どうする？ 正直に言う？ 嘘をつく？」

少し考えた後、1人の児童が快活に言う。

「嘘をつくー」

「それは何でじゃ？」

「だってパパとママ、こわいもん」

「それじゃ。君はモンの助と同じことをしようとしている。モンの助を悪くは言えないぞ」

すると、周りの児童達が発言した児童を責め出した。

「いーけないんだ、いけないんだ」

「だめだよー、ちゃんといわなきゃ」

「おっほん。君達もその子と同じことを言おうとしてたんじゃないのかな？」

教室が一気に静まり返った。どうやら、凶星だったらしい。

「君達も嘘をつかないようにするんじゃぞ。それに、人の物も盗っちゃ駄目なんじゃぞ。パパやママやお友達にも嫌われちゃうからのう。分かった人ー？」

「はい！」

児童達は、元気一杯に腕を振り上げる。

「それじゃ、モンの助のことも許してくれるかなー？」

「うんっ。ゆるしてあげる！」

「モンの助、ごめんねー」

侑治郎がモンの助を正面に向ける。

「キキキー、みんなありがとう。ミーは反省するでござるよ」

それから、クマえもんの方に向き直り、

「キキッ、クマえもん、悪かったでござる。どうかこの通り」

「頭を上げてよモンの助。僕はもう怒ってなんかいないよ。みんな

仲良くしていこう」

「キッキ……かたじけない」

「うむ。クマえもんも許したことで一件落着じゃな」

真優が立ち上がっておもむろに宣言する。

「はい、今日はこれで終了です。明日も楽しみにしててねー」

「はいー！」

「今日はね、お手伝いをしてくれたお兄さんが居るんだよー」

真優に促されて立ち上がる侑治郎。

「みんな、ちゃんと聞いてくれてありがとう。お兄さん、嬉しかったよ」

「みんな、拍手ー」

拍手が園児達から起こる。侑治郎は笑みを浮かべて、それに応えた。

その後他の遊びも行っただが、人形劇が長過ぎたせいでろくな遊びが出来なかったと言う。

11章・3…ガチンコ球技

紗弥菜の担当するクラスは体育館に向かった　と、侑治郎が伝えられたのは、空になった教室をうろろしてた時だった。

早速体育館に行ってみると、ひと際身長が飛び抜けて高いジャージ姿の女子が、何やら子供達を集めて話していた。右腕にはサッカーボール大の柔らかめなボールを抱えており、どうやらボール遊びをするらしい。

（それにしても、よく静かに話を聞いてるなあ。どんな教え方をしたのやら）

子供達の視線はまっすぐに、話をしている紗弥菜に一点集中していた。騒いでいたり雑談している子供が居てもいいはずなのだが、誰一人として居なかった。ともすれば、最近の大学生より聞くと言う態度が成っている。

敬服の念を抱き唸っていると、紗弥菜が侑治郎の存在に初めて気づいた。

「……以上で説明は終わりです。質問がある人は居るかなー？」
普段からは想像できない猫をなでるような声で、園児達に質問した。

「ないです！」

「早くやろうよー！　時間がもったいないよ！」

園児達は早く遊びたくてうずうずしているようだ。

「はい、分かったよ。でもね。その前にもう1人先生が来ているから、その先生と一緒に遊ぼうか」

「わあっ、だれだれー？」

どんな先生が来るのかと、辺りを見渡そうとする園児達だったが、紗弥菜が優しく制する。

「お楽しみが減っちゃうから、先生の方を向いていようね」
言っや、空いていた方の長い手が真上に伸びた。

これが合図だと確信した侑治郎は、素早く紗弥菜の隣に移動する。園児達が、歓喜と驚きが混じった声を挙げる。

「わあー、ゆうじろう先生だー」

「大きいなー、まるでセイスモサウルスみたーい！」

「はい、みんな静かに。お口にチャックだよ。知っている人が居るかもしれないけど、ゆうじろう先生です」

侑治郎に紗弥菜の手が差し向けられる。暗に自己紹介をしろ、ということらしい。

「今日は1時間だけみんなと遊ぶことになりました。楽しく遊ぼうね」

「ゆうじろう先生、よろしくね！」

「絶対、負けないからね！」

やる気に満ち溢れた園児達の言葉を聞いていたら、侑治郎にもやる気が漲ってきた。

「おーう、先生も負けないぞー！……って、紗弥菜先生、何をするんですか？」

「見れば分かるでしょう。ドッチボールをするんですよ」

紗弥菜は表情こそ朗らかそのままに、やや棘のある語調で言った。敏感に不愉快だと感じ取った侑治郎は、心中でしまった、と言いつつ「ああ」と大きく頷いた。

「それじゃ、さっき決めたチームに別れてくださいねー。侑治郎先生は、左のコートに」

園児達がそれぞれのコートに散っていく。なお、内外野制度はなくてみんな内野である。

「分かりました。ところで紗弥菜先生、眼鏡はどうするんです？」

まだ遠慮がちに訊いてくる侑治郎に、真顔に戻った紗弥菜は、ふつと息を小さく吐いた。

「いつまで他人行儀にしてんの、外さないわよ。まさか顔面を狙う子なんて居る訳ないし、居たとしたら……」

凄みのある笑みを満面に表す。

「……姐さん、怖いっす」

その笑みに侑治郎の背筋は、真夏であるのにも関わらず、気温が一桁で外にほっぱり出された時のように、にわかに寒くなった。

かくしてドッチボールが始まった。分身魔球や火の玉ボールやカープなどの現実離れたものではなく、ごく普通の地味なものである。しかも保育園児同士の試合であるから、力の度合も成人の男女には弱いものであり、ボールが飛んできたらそのまま捕ってしまいそうになる。そこで捕ってしまつては、園児達は面白くない。なので侑治郎と紗弥菜は、ある程度当たるようにしていた。わざとらしく当たるのもそれはそれでいいのだが、中には疑ってかかる聡い園児も居るから、あれこれ言われたら対応が面倒臭くなる。だから、それとなく意識されないようにしているのだ。

ドッチボールも5試合目を開始され、まさかこのままぶつ通しでやるのかと、侑治郎は壁掛け時計を眼張る。がんばまさにその通りらしく、11時20分を過ぎようとしていた。

（もう、1時間経とうとしているのか……）

侑治郎は、常に運動しているから大丈夫だ。しかし、紗弥菜はどちらかと言うとインドア派であり、日頃あまり運動をしない。体力はとうに限界突破しているであろうに、流石に息は切らしているがまだまだ機敏に動いている。

（あいつ、午後からまともに動けんのかな……）

などと、考えにふけっていると、腹に柔らかなものが当たった。

「やっ！ ゆうじろう先生を倒したぞ！」

「へ？」

向かいのコートで飛び跳ねて喜んでいる男子園児に、何が起きたのか分からなかい侑治郎。

紗弥菜が痺れを切らしたように教えてやる。

「侑治郎先生、当たったんですよ。早く外野に行かないと、今度は顔に当てちゃいますよ」

聞いていた園児達がどつと沸く。

「あ、ごめんごめん」

そんなに慌てていないが、侑治郎はノリに合わせることにした。慌てたように内野のコートを去り、外野のコートに入る。そんな滑稽な様子に園児達は、爆笑し続けた。

10分も経つと最後までしぶとく生き残った園児が、とうとう倒れて5試合目が終了した。

1人の女子園児が、とことこと紗弥菜の傍によってきた。

「ねえ、さやな先生」

「んー何かな？ 羽瑠乃ちゃん」

「比呂杵くん達と話していたんだけど、さやな先生とゆうじろっ先生の何だっけ……？ あ、そうそう”ですまっち”が観たいなーって」

無垢な声が鼓膜に心地よく響く。だが、よくよく頭の中で巻き戻して再生してみると、羽瑠乃がとんでもないことを口走っていることに気づいた。

「ねえ、そうだよなー？ 比呂杵くん」

振り向きながら訊ねる羽瑠乃に、比呂杵はこくつと首を振る。

「そうだね。どっちが倒れるかやってみてほしいな。みんなも見たいよねー？ さやな先生とゆうじろっ先生のドッチボール対決」

「私は観たいな！ さやな先生がんばって！」

「まるでティラノサウルス対トリケラトプスの戦いみたいだね！」

たちまち園児達の「見たい、見たい」の声が幾重にも重なる。周りの奴には負けてられない、と各々の園児が幼児特有のきいきい声を、段々大きく発っしていくものだから、さながら合唱のような体相と化した。

ここまで対決を乞われては断りようもない。

侑治郎と紗弥菜は、目配せして仕方ないと言わんばかりに、頷き合ってコートに入った。

「よーし、勝負しようじゃないか！ 紗弥菜……先生」

「望む所よ！ 侑治郎……先生」

やるからにはお互い本気でやらねばなるまい。そんな思いが2人の腹を据えさせた。

ボールを持つのは紗弥菜。力の差なのかレディーファーストなのかは不明だが、おそらくたまたま持っていたからであろう。

紗弥菜が内野のギリギリのラインまで下がる。

その不可解な行動に侑治郎の頭上には疑問符が浮いたが、紗弥菜の投げようと姿勢を変えた始めたことで、すぐに掻き消された。

何と下手投げ 野球で言うアンダースロー だったからだ。

流麗さえ思わせるフォームが展開される。その見事な様は、暫時勝負ということ脳内から滅却されてもおかしくなかった。

やがてぴん、と伸びた右腕が、目の前の敵の向こう脛を殴るように、左方に振り切られる。まさにその時、手の内にあったボールが、凄まじいまでの横回転を持って侑治郎を襲う。

空気を横殴りに切り裂き、滑るように曲る。スライダーとよく似た球筋に、侑治郎は目を剥いた。

ボールが懐に入ってきたので、とりあえずは鍛えられた胸板を盾にし、多少の勢いを殺す。それから敏活に両腕の肘を胸の前で折り曲げ、抱え込むようにして本格的に殺しにかかる。回転がなかなか治まらなく、取り逃がしそうになるが、何とか捕球に成功した。

「ふう……なかなか変わったもんを投げてくれるな」

「ふふふ、昔はソフトボールとバスケットボールをやってたからねさて、侑治郎先生はどんな球を投げてくるのかしら」

挑発的な笑みを侑治郎に投げる。

（あんまり使いたくなかったが、あれを使うか。紗弥菜は手強そうだし、午後から外で遊ぶだろうし……）

侑治郎はおもむろに、天井へ無造作にボールをぶん投げた。

「は……？」

紗弥菜は呆気にとられる。戦意のかけらもへったくれもない、と思ったからだ。

「ちょっと侑治郎先生、こんなボールじゃ勝負にならないわよっ！」
反射的に頭にきて、つい叫んだ。

極めて冷静に侑治郎は応じる。

「ほう。紗弥菜先生は、あの球を捕れると言われますか」

「捕れるわよっ……いえ、捕れますよっ！」

ふざけた球を投げたことを詫びる様子もない侑治郎に、紗弥菜は柳眉を逆立ててしまった。それでも園児達の存在を思い出したのか、慌てて口調を変えた。

「それじゃ、捕ってみて下さい。ちょうど今、上昇が終わりましたから」

侑治郎の言う通り、真上を見上げる。すると、上昇を終えたボールが、重力に従うように真つ逆さま落ちてくるではないか。

紗弥菜は落下点に入り、捕球体勢に入った。脇を締めて大きな胸を寄せ、両の掌を上に向ける。決してこんな格好をしたい訳ではない。ただ、正確に捕球する為には仕方のないことであつた。

数十秒とも経たないうちに、紗弥菜の両の掌にボールが着弾する。そのまま胸元に抱き寄せれば捕球完了だつた。しかしボールはちつ、と言う擦過音とともに、あらぬ方向へ逃げてしまった。

「えっ!？」

ボールの逃げた方へ跳ぶが、時既に遅し。無常にも床についてしまった。

勝負は決した。

「そんな……」

がつくりと肩を落とす紗弥菜。

侑治郎がぼん、と肩に手を置く。

「勝負は時の運。そんなに落ち込むなつて」

「べ、別に落ち込んでないかわよっ！ 私はまだ……眼鏡を直してただけよ！」

満面を真つ赤にして、眼鏡を触りながら下手な抗弁する紗弥菜に、侑治郎はぶつと吹き出してしまふ。

火が出るほど恥ずかしくなった紗弥菜は、八つ当たり気味にボ―ルを押し付ける。

「な、何、笑ってんのよ！ あんたは早く片付けなさい！」
「はいはい」

笑みを浮かべながら、紗弥菜を軽くあしらう。次いで、踵を返すと羽瑠乃が立っていた。

「ん？ どうしたのかな？」

羽瑠乃が無邪気に言い放つ。

「先生たち、恋人みたいだねー」

「んんっ！？」

思いがけない一言に、侑治郎は瞠目する。

「……って、比呂杵くんが言ってたよ」

そう言くと、羽瑠乃は女子園児達の輪に入っていた。

「はははは、最近の子どもってませてるよな」

侑治郎は大笑しつつ、紗弥菜の方を見やる。しかし、紗弥菜の姿はなかった。何処へ行ったのだろうと見渡す。

「あ、居た」

紗弥菜は、比呂杵の近くにいつの間にか移動していた。そして、今にもきいきい声で注意をしようとしていたのだった。

11章・4…子どもよりも子どもな奴

5人揃って昼食を食べ終えて、のんびりと談笑していると、短い昼休みがあつと言つ間に終了した。

「んじゃ、行こっか」

「ん、ああ」

爽奈に促され、侑治郎は急いで腰を上げた。先に行く爽奈の足が、思つたよりも早い。

「なあ、いい加減教えてくれよ。お前の所のクラスは、一体全体何をするんだ？」

「分かつたよー。ヒントはあれ」

爽奈がその場にぴたつと止まり、やれやれといった表情で砂場を指差す。

侑治郎は即座に理解した。

「ああ、砂遊びか。でもさ、最近ある親御さんが、不潔だとか言つて遊ばせないとか言つてたな。その辺は大丈夫なのか？」

「何が？」

爽奈の素つ頓狂な答えに、侑治郎は顔をしかめる。

「だから、衛生上には問題ないかってことだ」

楽しい気分には水を差された爽奈は、眼を吊り上げる。

「衛生上だあ？ 侑治郎、君は今の今まで何を勉強してきたの？」

何を見てきたの？ 砂遊びって言つのはね、ばつちいと思われ勝ちだけど、そのばつちさが子どもにとってある程度大事なんだよ！

……何だったかは忘れたけど、体の中にあるあれを刺激させないと、病弱っ子になるかもしれないんだよ。それに、物を作るということや泥だんごを使ったごっこ遊びもできるから、一石何鳥にもなる素晴らしいものなんだよ。私はその辺のことも考えて言つてるのに、理解できないってかこのやろー！」

最後の方は最早嚇怒せんばかりの語調だったが、実能的を射た説

得力だった。

一気に言ったせいか、はあはあと火のような荒い息を吐く爽奈。
迫力に気圧けおされた侑治郎は、この場合は執り成すことが先決だ、と頭の中のそろばんを弾いた。

「そ、そうだな。免疫がないってのは後々困ることになるし、何よりごっこ遊びは、表現力や想像（創造）性を養うに良いとされてるし……あ、あと、男女問わず遊べる砂遊びは秀逸な遊びだな」

爽奈の顔から怒りが一瞬の内にして没却され、立ち所に満足気な表情となっていく。

「なーんだ、分かってんじゃん。そんなら最初から無駄口叩かなきゃ良かったのに。ほら、さっさと行くよ」

体をくるりと向け、さっさと歩く爽奈の後姿を見つつ、侑治郎は再び顔をしかめて首をひねる。

（俺は聞きたかったのは、園児達の替えのシャツやパンツを用意してたのかってことなんだけどな……。これ以上怒らせると厄介だし、用意してんだろうな）

無理矢理納得すると、すっかり教室に入ってしまったらしい爽奈の後を、急いで追った。

「と、言う訳で。これから砂遊びをしまーす！ 目指せアンコールワットとタージ・マハル！ 川は黄河並みが目標ね！ 分かった人ー？」

鈍色で鉄製の小さなシャベルを、天を突かんばかりに上げ、弾けんばかりの笑顔で訊く爽奈。

「はい！」

園児達が手を上げ、充滿した生気を爆裂させるように返事を返した。男女ともに私服から体操着に着替えている。因みに、みんな白い半袖のシャツに紺のハーフパンツと言った出立ちである。それに、暑さ対策の為に水色の帽子を頭に被り、靴は履いておらず裸足であり、あとは遊ぶだけの状態だ。

（いやいや、4歳そこらの子どもがそんなもん知ってるわけないだろ……）

1人ツツコミを入れる侑治郎だが、細かいことを気にしては詮方ないと頭を振った。

「それじゃあみんなー、元気に遊ぼうじゃないか！ 砂場に突撃っ！」

ここ野瀬私立保育園の砂場は極端に広く、まるで海水浴に来たような錯覚に陥るくらいである。

シャベルやプラスチック製の短いスコップを持って、思い思いに砂場を掘っていく園児達。

山を作る者、川を作る者、泥だんごを作る者、ただただ掘る者と、それぞれ何の計画性もなく自由気ままにやっている。その中に爽奈が加わっているのは言うまでもないが。

やっぱり（爽奈も含めて）子どもだな、と思いつつ、侑治郎は山を作っている園児達に話しかける。

「あーっ、ゆうじろう先生！ ちょうど良かったよ！」

因みにこの男子園児は、いつも侑治郎の急所を狙う狼藉者ではない。その園児は、少し離れた所で川作りに没頭している。

「ん、どうしたの？」

「なかなか山が出来ないんだよ。どうしたらいい！？」

視線をその山の方に向ける。なるほど、山のような泥の塊が、今にも崩れそうな状況である。

侑治郎は、しゃがんで園児と目線を合わせる。

「乾いた土を振りかければいいんだよ。それで、ぺちぺちと叩いてみて、ぐちゃって感触だったらもっとかければいい。で、ぱちって掌に乾いた砂だけがつくぐらいだったら、今度は少しずつ泥を塗って、乾いた砂をかけてを繰り返せばいいんだよ」

くだけた口調で説明し終える。園児達には難しい言葉はまだ早い。これぐらい砕けた口調の方が分かってくれるのだ。

「そっかあ！ 分かった！ ありがとう、ゆうじろう先生！」

「どう致しまして」

にこつと笑い、立ち上がる。その時、園児達の奇声と喚声と歓声の中に、場違いな声が聞こえてきた。

「誰か助けてー、せーんせーい！」

声のする方に、瞬時に噴き出た冷や汗を掻きながら行く。すると、そこには身の丈以上に穴を掘ってしまつて、出られなくなつた男子園児が居た。

「先生、助けて　っ！」

男子園児の眼から大粒の涙がこぼれ、鼻からは透明な鼻水が、鼻の下を伝つて口に入っていた。

侑治郎はその場にひざまずき、

「おいおい、どうしてこんなことになつたんだ……。とにかく、先生の腕に掴まつて」

両腕を伸ばした。男子園児が掴まつたことを確認すると、一気にぐいつと引つ張り上げた。

「せんせえ……ありがとう……」

えぐえぐと泣き続ける男子園児に、侑治郎は頭を優しく撫でつつも、質問する。

「どう致しまして。それにしても、何で穴なんか掘つてたんだ？」

男子園児は、悲しそうに鼻をすすする。

「地球の裏側に行きたかつたの。それで、ブラジル人と遊びたかつた……」

侑治郎は諭すように言う。

「そうか。でもな、ブラジル人って言うのはお祭り好きなんだよ。お祭りの時に行くと言ふんだけど、それ以外はあんまり機嫌が良くないんだよ。だから、いきなり行つたりなんかしたら、怒られるだけさ。それに、1人で行つちゃ尚更だ」

「はあい……」

この男子園児は、1人にしておくとまた同じ行為をしかねない。なので、ひとまず仲の良い園児達の輪に入れることにした。

園児の手を引いて歩いていると、背後から何かが飛来し、背中に当たった。

「何だ？」

首を回して背中を視認する。すると、一塊分の泥がべったりとくっ付いていた。こんなことをする奴は、1人しかいない。

泥が飛んできた方に向き直ると、まさにいたずらっ子の笑みを顔面に貼り付けた問題児が、やや離れた所に泥だんごを持って立っていた。

「こらっ、みきのり樹紀！ 先生が見えない所で泥だんごを投げちゃ」

べちゃっと言う泥だんごの着弾音とともに、侑治郎の白い額が黒く染まった。樹紀の隣の園児が思いつきり投げたら、たまたま当たってしまったのだ。

この樹紀と呼ばれた少年こそ、実習初日に侑治郎の股間に突きを入れたことにより、同じ歳の男子園児達からは、勇者として崇められている園児なのだ。

侑治郎は無言で泥を払う。そして、能面のような表情で樹紀達に近付いて行く。

「やばい、逃げるぞ！」

焦った樹紀が仲間の園児を伴って、逃亡しようとする。だが、樹紀の頭に泥だんごが飛来した。

「うっ……」

その場に事切れたかのように倒れる樹紀。

侑治郎はいささか仰天した。泥だんごが飛んできた方角に体を向ける。

そこには泥だんごをもてあそびながら、満開に咲き誇った花のような笑顔で、こちらを楽しそうに見ている爽奈が居た。

侑治郎も歯を見せて笑い返し、かいさい快哉を叫ぶ。

「お、爽奈ナイス！ 樹紀の奴のことをちよっところしめなきゃならん、と思ってたところ」

べちゃっ

「はあっ？」

視界が突然真っ暗になる。飛散する泥を浸入させまいと、反射的にまぶたを閉じたからいいものの侑治郎は、眉間辺りに命中したらしい泥を手で除けながら、暫時の経緯を回顧する。

爽奈を褒めた 爽奈が照れ隠しなのか何なのか不明ながらも、持っていた泥だんごを侑治郎に投げつける 見事の中。視界真っ暗、聞こえる歓喜の声（今ここ）。

「あ……」

回顧から帰ってきた侑治郎が、何度もこくこくと頷く。様々な爽奈に対する不満と一緒にふつふつと沸く怒りのせいで頭が熱い。袖で眼の周りを拭くと、眼をかつと見開いた。

「みんなー！ これから泥合戦を始めるよー！ 泥だんご作って、誰彼構わず投げちゃえばいいと思うよ！ そんなじゃ、よーい始め！」
まるで侑治郎の怒りの言葉が、噴出する頃合を見計らっていたかのように爽奈は、周りを扇動して自身の行いを一旦はうやむやにした。

園児達が一斉に足元の泥を丸めて、適当に投げつけ合う。勿論、相手が泣いたら、そこで攻撃中止という暗黙のルールもある。

「清義^{きよよし}。お前は危ないから、先生から離れる」

「う、うん」

侑治郎の手を離し清義は、友達の間児の居る方へと走っていく。

その様を横目で視界に入れつつ泥だんごを作り、

「これでも喰らえっ！」

爽奈に思いつきりぶん投げた。

それを上体を反らし、あたかも100人ぐらいのクローンがうじゃうじゃ出てくるシーンがある某映画のように、紙一重のところまで爽奈は避けた。

「おわっと！ ……こらー、侑治郎！ そんなにマジになって投げちゃ怖いよ！ もっと穏便に行かないと、園児達が怖がっちゃうよー」

半ば焦りながらも笑顔を崩さない爽奈。

対する侑治郎は顔を怒りで赤く染め、仁王のような表情で泥を両手で器用に丸める。

「問答無用！ もう一丁喰らふぐっ！？」

「やーい、がら空きでやんの！」

いつの間にか復活した樹紀が、どの場合で前方に回ったのかとにかく、侑治郎の急所を拳で突いた。

「おー、みつきーグッジョブ！」

「へへへー。そうな先生、俺ってすげーだろ！」

2人のやり取りを見て、ようやく侑治郎は悟った。

「お、お前等グルだったの……かつ……」

前方にゆっくりとした動作で崩れ落ちる侑治郎。そこで意識が事切れた。

「じゃ、みつきーにもご褒美をあげるよー」

言って、爽奈は泥だんごを投じる。

「げっ」

避けるすべもなく、額にまともに喰らった樹紀は、侑治郎と仲良く砂場に仰向けになって倒れた。

「はーっはっはっは、正義は勝つのだよ！」

おそらくはヒーローもののアニメの台詞を気持ちよく発しながら、爽奈の高らかな大笑が砂場一体に響き渡った。

紗弥菜がこの場に居れば、こう言っただろう。

「まさに外道ね……」
と。

12章……無知なんです

まるで修羅場のような1ヶ月間の実習が終わって1週間弱ほど経った。

収穫は多かれど、その何十倍はある疲労の方がもっと多かった。基本的に実習中と言えども土日は休みなのだが、それだけでは到底疲れが取れにくい。

なぜなら、少しずつ実習ノートを書いておかなければ、後から夏休みの絵日記並みに大変なことになるからである。

1日の出来事を思い出して書けと言われても、不可能である。当たり前だが居る訳ない。もしも、1日1日の仔細を憶えている人間がいようものなら、稀有な存在だ。

しかも、毎日毎日実習に来ているからと言え、特別なことがあるわけがない。大方のスケジュールは同じなのだから、中盤以降は書くことがなくなり、竜頭蛇尾になり勝ちである。今回のような長期実習なら尚更だ。

竜頭蛇尾にならないには、起こった出来事のペース配分を間違えずに、小出しに出す。さもなければ、先に述べたように泣きを見ることにもなりうるからだ。そしてそこから、己の語彙がどれだけあるか試される時である。長文にするもよし、短文にするも良しのとにかく、実習内容がある程度まとめて書けば何ら問題ないと思われるものだ。

1日ごとにちゃんと書けば良いのだが、自宅に帰ってくると、途端に疲労感が襲ってきて書きたくなくなる。そこで、己に鞭を打てるか打てないかでは大きく違う。疲れた脳味噌をフルに動かし、一気に書き上げるのが最良なのである。そこでくたばってしまうと……。

以上のことから実習と言うのは、1日の積み重ねが如何に重要なのかということを、改めて知ることができる機会でもあるのだ。……

…勿論、業務内容もだが。

「失礼しました」と言い、涼しい部屋から出た瞬間、もわっとした熱気が体を襲う。

その熱気に紗弥菜は、思わず顔をしかめた。

（何でこんなにも暑いのかしら……）

窓の外からは、最早騒音の域に達するのではないかと思うくらい、やかましく蝉が鳴いている。

胸の前に垂れていた髪を掴んで、少し乱暴に後ろに投げる。櫛ですいたように、背にさらさらと流れる長い黒髪も束ねなければ、季節柄暑苦しく見える。

しかし紗弥菜は、決して束ねるようなことはしなかった。特別理由はないのだが、そうしてしまつては成佳や真優、一応爽奈とかぶつてしまうように思えてしまうからだ。

変わったところにも我が強く、極力は人とかぶらないことを信条としている点がある。何に對してかぶらないようにしているかは、髪形以外は本人にしか分からない。が、まだ他にあるのかもしれない。

「あれー？ 紗弥菜じゃない？」

「ほんとだ〜」

紗弥菜がしかめっ面で廊下を歩いていると、半袖ハーフパンツ姿の女子2人が階段から現れた。

2人の女子がこちらに走り寄ってくる姿を見て、ようやく紗弥菜が気づいた。

「あら、朋絵ともえに夏穂なつほじゃない。部活なの？」

紗弥菜は相好を崩した。

他の3人ほどの仲ではないが、それなりに社交的で交流関係が広い紗弥菜は、クラス内に友達が多い。

「まあね。何しろ大会も近いし、暑いなんて言つてられないよ！」

朋絵が、ポケットからタオルハンカチを取り出し、ごしごしと顔

の汗を拭く。

「今日は、成佳ちゃんと真優ちゃんと爽奈ちゃんが居ないんだね。どうしたの？」

夏穂が首の辺りを拭きながら、訊いてきた。

「成佳と真優は先週実家に帰って、今日帰って来る予定。爽奈は、実習ノートが終わってないんじゃないの」

最後の爽奈の名前を出すのと同時に、つんとした態度に変貌する紗弥菜は、さながら役者のような演技と言ってもよかった。

「そうなんだ」

承知した夏穂が頷いた。

と、朋絵が卑しさをたっぷりに頬を吊り上げ、楽しげな語調で紗弥菜をなぶるように言う。

「ふううん、そうなの。道理で面白くなさそうな顔をしてたわけだ。彼女と一緒にじゃなきゃ、つまらないもんねえ」

「彼女？」

この阿呆は何を言い出すんだ、と言わんばかりの呆れ顔で、紗弥菜は朋絵を白眼視する。

「だって、喧嘩するほど仲が良いつて昔から言うじゃん。あんた達もできてんのかなーって」

「何を馬鹿なことを言ってるのよ。何でそうなるの？ 爽奈も私も女よ？ 女同士の恋愛なんて現実的にありえないわ」

呆れに怒りを足して、白眼視を続ける紗弥菜。

しかし、敵は全く怯まない。それどころか大げさに後ずさって、びっくり仰天して見せた。

「えええ　っ！？ あ、あんた、今の一言で全同性愛者を敵に回したね！ 全米のみならず、全世界があごがグワーン！　って落ちるぐらい驚愕したに違いないよ！」

紗弥菜は呆れを一気に通り越した。今にも爆発しそうな怒りを拳を作ることで、懸命に押し殺す。

「……ごめん、日本語で言ってくれない？　……というか、そうい

「うあんたはどうなのよ？」

「えっ、タチかネコかってこと？」

「は……？」

「そこまで訊かれちゃ仕方がない。私は」

んぐつ、と苦しそうな声が朋絵の口内で響く。

意味を知っているのか、事の成り行きを黙って見ていた夏穂が、朋絵の口を手で塞いだのだ。

「これ以上、訳の分からないことを言っちゃ、紗弥菜ちゃんが混乱しちゃうでしょ。自重しようよ……ねっ？」

紗弥菜から見れば夏穂が朋絵に、至って普通に微笑みかけているように見える。だが、朋絵から見た夏穂は、凄みのある笑みを閃かせた般若にしか見えなかった。

「んぐんぐ」

うんうん、と言ってるつもりなのだろうが、口内でぐぐもってしまい、正確に聞こえない。

夏穂は紗弥菜に笑顔を向ける。

「それじゃ、紗弥菜ちゃん。私達はこれで」

暫時呆気に取りられていた紗弥菜が、取り繕うように笑う。

「あ、うん。練習頑張ってるね。応援してるから」

「はい。じゃ、またね」

そう言い残して、朋絵を引きずるようにして夏穂は去って行った。紗弥菜は小首を傾げてうーん、と唸る。

（タチにネコ……何のことだったのかしら？ 芸能人に居た気がするけど……まあ、あとで調べよう）

と、ポケットに入れてあった携帯電話が、突如として激しく震える。取り出して開き、ディスプレイを見ると、『メールがきています』との文字が表示されていた。

（誰だろう）

メールの差出人の名前を見ると、爽奈からだった。

（あいつが私にメールなんて珍しいわね。どうしたのかしら？）

同じアパートで部屋も近いからメールや電話よりも、部屋に行った方が手っ取り早い。そう言っていた爽奈が、メールを送るということは余程のことなのだろう。

とりあえず題名は何も書かれておらず、本文を見てみた。

『たすけて・・・』

言えば数秒で済みそうな一言が、そこに踊っていた。紗弥菜が渋面を作る。同時に何だか腹が立つてきた。

（何これ？　ったく、ちゃんと変換されてないし、三点リーダーも使っていないじゃない。いたずらにしても全く芸がないわ）

携帯を畳み、ポケットにしまう。心中でぷりぷり怒って悪態をつきながら、廊下を歩き始めた。しばらくは他のことを考えながら歩いていたが、

（でも……）

やっぱり、文面とめつたによこさないメールが妙に引つ掛かった。1度感じ始めた不安は、どんどん悪い方に膨らんでいくものである。（万が一、爽奈に何かあったとしたら……）

不安が胸と思考回路を押しつぶしていく。

成佳と真優は今日帰って来るとは言っていたが、おそらく夜になるとも言っていた。侑治郎も新しく始めたバイトで、夕方にしか帰ってこない。

今現在の時刻は午前11時30分。今日1日自由なのは、紗弥菜しかないのだ。

しばらく無表情でその場に立ち尽くしていたが、まなじりを決して走り出した。

（……私が行くしかない。いくら毎日口喧嘩してるとは言え、病気や事故の時は関係ない。困ってる時は助ける。それができなきゃ、人としてどうかしてるもの）

やがて、校門を出た。夏のぎらつく太陽の容赦ない攻撃に耐えながら、アパートへひた走る。

（でも、もしも嘘だったら……絶対に許さないんだからっ！）

13章……初めての看病

爽奈の部屋のドアが開き、紗弥菜が警戒しつつ玄関に足を踏み入れる。

ドアを静かに閉め、靴を脱いで部屋に上がる。綺麗に整え、ついでに脱ぎ散らかしてあった爽奈の靴も揃えてやった。

部屋に繋がるドアを開けた。クーラーがついておらず、その汗が今にも滝のように出てきそうな部屋で爽奈は、ベッドに入って眠っていた。しかも分厚い布団までかけて。これではまだ嘘か本当なのか分からない。

「インターホンも鳴らしたし、ノックもしたのよ」

一応、一言言っておく。黙って入ったからって、後でぐちぐち言われないようにする為だ。

「久々に入ったけど、相変わらず凄い部屋ね……」

独り言をつぶやき、部屋を見渡す。

床には無数の人形が置かれ、あまり足の踏み場がない。それはテレビ周りも変わらない。それどころかゲームソフトがケースが開けっ放しなものや、中身がその辺放り出されたり、極めつけはぬいぐるみの頭や体の上に乗せられてものがあつた。アニメのDVDも床に山積みになっていたり、ゲームソフト同様にぬいぐるみの上に乗せられてある。

床に置いてあつたぬいぐるみを拾い上げ、悲しげに見つめる。

「可哀相に。折角創つてあげた人形が、こんな扱いをされてるって知ったら、真優は嘆くに違いないわね……。それにしても、無性に整理整頓がしたくなってきたわ」

こうまで酷いと整理整頓しがいがありそうだと指の関節を鳴らす。

「おか……あ……さん……」

か細い声が耳に入った。何だろう、と耳を澄ます。

「あつ……い……よお……」

「暑い……？ 暑いなら、クーラーをつけるわよ？」

床に落ちていたりモコンを拾って、スイッチを入れる。1分近くの間があつたが、涼風が部屋中に流れ始め、徐々にではあるが熱気を奪い取っていく。

「はあ、涼しい」

専門学校から一気に爽奈の部屋まで駆け抜けてきた紗弥菜は、クーラーの前に立って極楽気分を味わった。

横目で爽奈の様子を窺う。大きな反応はないが、心なしか呼吸の間隔が短く、喘いでいるようにも聞こえてきた。

枕頭^{ちんとう}に移動してじっくり観察する。やっぱり、息苦しそうに呼吸を繰り返していた。

「まさか……」

爽奈の額にかかる髪を除けて、掌を押し当てる。汗の水っぽい感触と焼けるような熱さに、紗弥菜の眼が驚愕に見開かれた。

「凄く熱い……と、いうことは……本当に風邪！？」

よくよく見れば、顔中や首などは大小粒のような汗にまみれていた。

「ど、どうしよう……。私、看病したことないわ……」

祖父母のどちらかが風邪を引いても母親が看病していたし、両親のどちらかが風邪を引いたとしても、紗弥菜はうつるからと言われ、看病に携わることは皆無であつた。引いたら引いたで周りがちやほやするように看病してくれるものだから、されるがままであり、看病のノウハウなんて意識したこともない。ゆえに、何も分からないのだ。それでも、何らかの講義で「幼児が風邪に罹患^{りかん}した時はどうするのか？」と、それぞれ考えたことがあつた。

「とにかく、その時に考えた通りにやってみればいいのね。みんなも良いって言うてくれてたし……。で、まずは……」

ベッドの横のタンスに眼が行く。人の家のタンスを勝手に開けるのは、爽奈か泥棒だけだと思っていたがまさか自分もなるとは、と

でも頭に浮かんだらしい。とりあえず、進まぬ顔でダンスを引く。そこには、年不相応の幼げな下着が割りと几帳面に並べられて入っていた。

（ほとんど白ばかり……本当に、はたちになったのかしら？）

1段目は下着しか入ってなかった。シャツを取り出して2段目を引く。すると、視界一発キャラもののパジャマを発見した。それを無表情で取り出す。

枕頭に戻って持って来た物を、寝ている爽奈の頭の横に置く。布団をめくって全体を露にすると、パジャマのボタンに手をかけた。1つずつ外して行き、最後の1つを取って左右に開く。

「なっ……！？」

たまげた紗弥菜は二の句が次げず、魔法にでもかかったように固まった。

無理もなかった。何しろ、爽奈はシャツも着ずにパジャマ1枚で寝ていのだから。

息をするのも忘れて見入ってた紗弥菜は、ふと我に立ち返ると、首を激しく横に振った。

「そ、そうだ。タオル！ タオルで拭かないと！」

脳内に起こった様々な想見や妄想を、^{そうけん}抹消せんばかりにあえて大声で言った。

風呂場の近くにあった3段のボックスからタオルを2、3枚引つ張り出すと、うち1枚を四つ折にして爽奈の汗ばんだ体を、りんごのように満面を赤く染めつつも、拭いていく。その後は、頭の横に置いておいたシャツとパジャマを、起こさないように着せた。次にズボンを脱がす。細いことは細いのだが、あまり肉付きがよくなく、色気が感じられないほどであった。大して汗は掻いていなかったが、一通り拭いておく。新しいズボンに取り替え、ひとまず終了である。

（ふう……。あ、そういえば氷枕を忘れてたわ）

失念していた氷枕を冷凍室から出して、先ほど取り出したタオル

で巻き、今まで使っていた枕と交換して頭の下に敷いた。

「で、次が問題ね……」

台所の方を忌々しげに睨む。

（でも、他に誰も居ないんだし……やるしかないわね）

タンスの上に畳んで置いてあった爽奈のエプロンを身に付け、ついでにヘアゴムも借りて背に流してある自慢の黒髪を、うなじの所で束ねて結んだ。

またしても失礼とは思いつながら、冷蔵庫と冷凍庫を開けて目ぼしいものがないか確かめる。因みに、紗弥菜が作るうとして料理はお粥である。料理素人でも比較的簡単にできる料理なのだが……。（冷凍のご飯と卵と鰹節か……。野菜はまだ送られてきてないのかしら？）

爽奈の実家は農家である。米も野菜も作っているらしく、月に1度とは言わずに何度も送られてきている。1回分の量が多大でその都度4人は、ありがたきおすそ分けを貰っている。おそらく、農地を沢山所有していて裕福なのだろう。

（まあ、いいわ。やれるだけやってみなければね）

流し台の下収納場所から小振りの片手鍋を見つけ、水を張って火にかける。因みに、水の量は溢れんばかりだったりするが。

（次は食材を切っていけば、いいのよね……？）

ラップに包まれていた冷凍のご飯を、まな板の上に置いた。鍋を出す時についでに出した（刺身）包丁を右手に持ち、左手をご飯を半ば覆うように据える。その状態で（刺身）包丁の刃先をご飯に入れた。当然、がっという硬い音がしたが、気にせずそのままゆつくり引いていく。すると、このままでは左手の中指の先端部を切断しそうになることに今更気づいたらしく、

「あれ？ ……危なっ！」

慌てて左手を手前に引つ込めた。

（うーん、どうやって切ってたのかしら？ このままじゃ指がなくなってしまうし……あ、それなら両手を包丁装備にしたらいいんじ

やない)

かくして左手に文化包丁、右手に刺身包丁という、何かのゲームに出てきそうな中ボスキャラっぽい格好に変貌してしまった紗弥菜。料理人じゃなくても、一般の主婦から見たらお叱りを喰らいそうだが、残念ながら注意をする者は1人も居なかった。

だん、だん、と、米を包丁で荒々しく切っていく……と言うよりも若干粉碎していき、見事米のかけらを編み出してしまった。それを沸騰してぐらぐら煮立っていた鍋の中に、1粒ずつお湯が飛ばないよう、鍋の端に滑らせて投入していった。

次に卵をお碗の中で割り、箸で溶いていくのだが、溶き方が独特だった。普通は空気が入るように溶く。が、紗弥菜の場合は、まるで園児が適当に落書きをするかの如く、箸をせわしなく横に往復させるだけだった。白身と黄身が混ざった卵を今度はどうするかと思いきや、そのまま鍋に投入してしまった。

材料に入っていた鰹節も右手で一掴み分を入れたが、そのせいでお湯が吹きこぼれてしまった。慌てて火を消し、おたまである程度お湯を捨てる。再度点火すると、思案顔になる。

どうやら味付けに悩んでいるらしいのだ。去年の講義の中で作ったはずだが、驚くほど憶えていない。

紗弥菜は煎じ詰める。

(確か味噌は入ってた気がするわ。あと……しょうゆもちょっと入ってたわ。多分)

しょうゆを円を描くようにひと回し分投入し、見慣れた子どもの禿頭が画いてある味噌のふたを取って、おたま約半分ぐらいをこっそり掬い、火も弱めずに鍋の中に落とす。

(多分……あと5分ぐらいね。部屋にアクボカスを取りに行くし、流石に弱火にした方がいいかしら?)

まるで血の池地獄のように、時折ばこつと大泡を浮き上がらせ、ぐらぐら煮立たたているお粥のようなものを目の端に入れる。火の危険性は理解していたので、弱火にして一旦部屋に戻り、スポーツ

ドリンクを取って来た。それをコップに注ぎながら、そろそろか
火を止めた。

最終的に米の分量と水の分量が同一、またはどちらか一方が少
なくなかったので、米と卵と鰹節の味噌スープのようなものが完成し
た。中身をどんぶりに移し、飲み物の入ったコップとどんぶりをお
盆に乗せて、枕元まで持って行く。

苦悶の表情を浮かべ、小さく喘いでいる爽奈の顔に浮かんだ汗を、
タオルで拭き取りながら、記憶を辿る。

（本当、入学してから付き合んだけど、こんな爽奈は初めて見る
わね。……似合わない……。やっぱりあんたは、馬鹿みたいに元気
であるべきよ）

心頭でつぶやきながら、しかし起こすまいと優しく拭くことによ
って、爽奈を励ます。

拭き終えたところでお粥をレンゲで主に米の部分だけ掬い、ふう
ふうと十分に冷ます。口に持って行くのだが、開こうとしない。軽
くぺたと唇を叩いてみたり、口の下を同様に叩く。だが、全く
の無反応だった。

紗弥菜は脳漿を絞った。味はどうであれ食べてもらわねば、ま
もとに風邪のウイルスと戦えないと思ったからである。脳中にあれや
これやと案が浮かぶも、使えないものばかり。その都度、頭を振っ
て忘却の彼方に投げ棄てる。やがて案が尽きたらしく、レンゲで爽
奈の唇を叩いていたが、あることを閃き、全動作が静止した。

（口移し……）

たちまち顔から火が出るほど赤くなり、面映くなつた紗弥菜は、
爽奈から眼を逸らした。動悸が胸郭を打ち破らんばかりに激しくな
り続ける。レンゲを持っていない左手で、心臓の辺りを押さえた。
しかも頭の中も大混乱に陥っており、2つの二大組織を治める為に、
深呼吸を数回繰り返す。

だいぶ落ち着いた頃合に、出てきた案を冷静に解析してみる。
（何度やっても口を開かないんだから、口移ししか方法がない。仕

方、ないわね……)

お粥を少量口に含み、噛み砕かなくてもいいほど柔らかいが、それでも噛み砕く。そして、爽奈を直視する。

(やつぱり……何だかんだ言って可愛いわね……こいつ)

素直な感想である。口喧嘩をしていてつい悪く見勝ちになってしまうが、爽奈は年不相応も相まって特に可愛く見えるのだ。

身を乗り出して顔を近づけていく。

心臓がまただんだん高鳴ってきた。

爽奈の真一文字に引き結ばれた桃色のふつくらとした唇に、紗弥菜の程よく潤った唇が重なった。ふんわりとした感覚に理性が吹っ飛び、頭がどうにかなりそうだったが、そこを懸命に耐えた。舌で爽奈の唇を舐めて開き、閉じられた歯を舌先で突く。すると、少し隙間ができたので少量ずつお粥を流し込んだ。

口に含んだお粥がなくなると、唇をそつと離して爽奈の喉仏を見る。微かに浮き出た喉仏が嚥下していたので、胸を撫で下ろした。

残りのお粥やスポードリンクも口移しで、時間をかけて食べさせ(飲ませ)た。途中から必死だったからいいものの、改めて振り返ってみると、胸をぎゅつと締め付けられ罪悪感に駆られる。

(私は何てことをしたんだろう……禁忌を犯してしまったような、そんな気分だわ。いくら口移しと言っても、キスはキス。しかも女同士で……)

以降顔をベッドに埋めて思考を停止させた。ただただ、自分の中に新しく芽生えそうな何かを必死に抑える。

「ありが……と……お……」

かすれたような声が聞こえてきた。

その声に紗弥菜は、がばつと顔を上げてずれた眼鏡を直し、まじまじと爽奈を注視する。

「ありが……と……お……」

口元に笑みを湛えながら、爽奈は無意識にかすれた声で謝辞を述べていた。

紗弥菜の双眸に涙が溢れてくる。

「さ、紗弥香……」

聞き慣れない名前を、声を震わせて漏らす。

紗弥香とは、紗弥菜が15歳の時に他界した当時10歳だった妹のことであり、容姿がまるで爽奈と似ていた。

どうやらその夭折した妹と爽奈が重なって見え、あたかも妹が喋っているように見えているらしい。

「紗弥香……！」

完全に爽奈が、死んだ妹の紗弥香にしか見えなくなつて一声叫ぶと、眼鏡を外して両肩を優しく掴んだ。そして、今や紗弥香にしか見えなくなつた爽奈の顔を、感涙に咽びながら穴の開く程見詰めた。紗弥菜は、紗弥香が死んで以来一切泣かなかった。止めどなく次から次へと流れ出る涙は、約5年分を思わせるような量であり、ぽたぽたと爽奈の顔を濡らしていったのだった。

「あら、真優ちゃん」「あ、なるちゃん」

成佳と真優が同時に、驚いた表情でお互いを発見した。

「帰省は明日じゃなかった？」

真優が、肩にかかった荷物や両手に持った紙袋を揺らしながら、成佳の隣にやつてくる。

一方の成佳は、両手にスーパーの袋を持っていた。中身がぎつしりと詰まっでいて、今にも底抜けせんばかりである。

2人が並んで階段を上がり始めた。

少し切れ掛かった息を整えながら真優は、憂慮に暮れた様子で答える。

「……うん。そのことなんだけど、そーちゃんから送られてきたメールが気になって、前倒ししたの。なるちゃんは何か急用でもあった？」

「うっん、違うわ。そう、真優ちゃんの所にも届いたの。実は私の所にも届いて、それを読んだ瞬間居ても立っても居られなくなって、

帰ってきたのよ」

「やっぱり、なるちゃんにも？　そーちゃんは、冗談でもそんなメルを送らないでしょ。だから、余計に心配で心配で……」

「ねえ。杞憂に終われば1番良いんだけど……」

2人は爽奈の部屋の前に立つ。真優が右手に持っていた紙袋を地面に置いて、インターホンを押す。しかし、うんともすんとも返事がないし、出てこない。もう一度押してみる。だが、結果は同じであつた。

「真優ちゃん、入ってみましょう」

不安を面に表しつつ、成佳が言った。

「そうだね……」

同じく真優も不安を隠そうともせず、頷きながらドアを開く。

2人が靴を脱いで玄関に上がる。その際、すぐ傍に台所が視界に入るのだが。

「な、何これ？」

「あらあら……」

真優と成佳は、その惨憺たる様を発見した。いや、発見してしまったと言った方がいいのかもしれない。

流し台には、鍋や包丁やまな板などが無造作に放置され、周りには調味料や食器が整頓されていなかった。

「台所を片付けられないなんて、そーちゃんにしては珍しいね」

「それほどまでに切迫してたのかもねえ……」

爽奈は、一応自炊をきちんとしている。使うたびに必然と台所くらは、整理整頓しようと心掛けるものだ。実際爽奈は、部屋はごちゃごちゃとしているが、台所は綺麗にしてきた。だから、この有様はありえないのである。

台所は後で片付けるとして、2人はひとまず部屋に入った。

そこには床に正座をし、腕を枕にベッドに突っ伏して寝ている紗弥菜が居るではないか。

「あれー、さやっちゃん!？」

思わず真優が目を丸くして驚きの声を挙げた。

爽奈が紗弥菜の部屋に赴くことはあっても、その逆は滅多なことではなかったからだ。

「ふふ。やっぱり、2人ともは寝顔も可愛いな」

紗弥菜の頬を指で突つついたり、爽奈の頬を延ばしたり、寝ていることをいいことにやりたい放題の真優。

「こーら、2人とも気持ち良さそうに寝ているんだから、いたずらしちゃ駄目よ」

黙って見ていた成佳が、真優の行為を諷めつつ寝ている2人を見やった。

「あら？」

何かに気づいたらしく、小首をかたむける。爽奈と紗弥菜の口元に小さいながらも、ご飯粒が付いていたからである。もしかと思いい表情そのままに思考を駆け巡らす。

「どうしたの？ それにしても、そーちゃんはただの風邪で良かったね」

今の成佳に真優の言葉は一切聞こえない。

思索に没頭している様子だったので、真優は慌てて口をつぐむ。

やがて結論に達した成佳は、ふうつと優しく息を吹いた。そして、爽奈と紗弥菜を交互に見ると、ふっと笑みが浮かんできた。

（どうやら、今まで以上に仲が良くなったみたいね）

「どうしたの？」

真優は、遠慮がちな眼を成佳に向けた。

「何でもないわ。さ、鍋や食器を洗ってお粥を作るわよ。真優ちゃんも手伝ってね」

「はい、洗い物なら任せておいて」

笑顔を輝かせて返事する真優。

そこに、どたどたと足音荒く入って来る者が居た。

「爽奈！ 大丈夫」

1人だけ意味を履き違えた侑治郎が、物々しい格好で登場した。

Yシャツネクタイ、黒のズボンとここまでは普通だ。が、持つてるものが右手に金属バット、左手にフライパンと戦闘態勢で殺^やる気満々である。頭には何処から拝借したのか「安全第一」と書かれた黄色いヘルメットを被り、腹の中には週刊誌を仕込ませていて、防御面の強化も事欠かない。

しかし、大声を出して気持ち良さそうに寝ている2人が、起きてしまうことに危惧の念を抱いた成佳は、侑治郎の口を軽く押さえた。「しっ！ 侑治郎さん、強盗とか暴漢などそういう類じゃないんです。爽奈ちゃんは、風邪を引いただけなんですよ」

「ふえ？ ふおおなの？」

侑治郎は、素っ頓狂且つ間抜け声で訊ねた。

「そうなんですよ」

言いながら、口から手を放す成佳。

「そ、そうなのか……。ああ、穴があったら入りたいとは、このことなんだろうなあ……」

降伏した兵士のように侑治郎は、両手持っていた武器を床に置いた。その場にうずくまり、頭を抱える。

その後の侑治郎の落ち込み具合は尋常じゃなく、しばらくそのまま姿勢でぶつぶつと独り言をつぶやいていたと言っ。

14章……オリジナリティと言つ名の原作傷害

「さて、と。みんな集まったところで何をするかを決めるわよ」

紗弥菜がノートと鉛筆を取り出して、テーブルの上に広げながら言った。

「はいはい！」

元気よく手を上げながら、爽奈がテーブルに身を乗り出して、紗弥菜に顔を近づける。

たちまち頬を朱に染め、決まりが悪そうに顔を横に向ける紗弥菜。「ち、近いわよっ……。で、何？」

不機嫌そうに頬を膨らませつつ、爽奈は答える。

「何さ、折角眼をしつかり見て、たまには褒めてやろうかと思ったのにい。まあ、『桃太郎』がいいなーって思ったただだよ」

紗弥菜は、険しい顔で眼鏡の智^ちをいじりながら訊く。

「『桃太郎』？ …… ありきたりや過ぎない？ 夏穂や朋絵の班もやるみたいだし」

「大丈夫だって！ 勝算我にあり！」

薄い胸を張り、どん、と叩いて自信満々な爽奈。

「あのなあ、同じじゃ駄目なんだぞ。何か考えてんのか？」

黙って聞いていた侑治郎が、急に心配になっただらしい。

（ふっふっふ、侑治郎のこの顔。今にも見てなよ。びっくりさせてやるんだから）

腹の中で侑治郎を嘲笑う。爽奈は、座布団の下からノートを効果音付きで取り出した。

「お。そーちゃん、何か書いたの？」

興味津々に顔を輝かせる真優に、ウインクで肯定を示すと、テーブルの上に恭しく置いた。

「いやいや、今まで座布団に敷いてたじゃないか」

などどのたまった侑治郎には、満面の笑みで親指を下に向けた。

「何で喋らないのよ」

棘のある言葉をぶつけてくれた紗弥菜は、

「おっほん」

と、わざと大きめ喉払いで注意を促した。そのついでに、だらしなく座っていた姿勢を正し、正座になった。

「作家先生が目の前に居ながら恐縮であります、勝手ながらわたくしめも脚本と言うものを書いてみましてね。是非ともご披見願いたいと思っていますが」

たまげた侑治郎は、爽奈の額に掌を当てた。

「ひゃっ。何すんだ　っ！」

ひんやりとした感触に、目をぱちくりさせた爽奈。

「いや、熱でもあるんかなーって。2つの意味でびっくりしたからさ」

のんきに言ってくる侑治郎に、余程癪に障ったらしい。

爽奈は、迫力がないと分かっていても顔を怒らせ、声を荒げる。

「ばっかやろ　っ！　私は至って普通だぞ。早く放さないと、セクハラで訴えるぞ！」

「あ、すまんすまん」

侑治郎が慌てて掌を放した。

「全く、のっぽと眼鏡っ娘ってのは失礼極まりない奴らだね」

ぼりぼりと大きく音をたててせんべいを食べながら、不満を垂れる爽奈。

「それで、内容はどんな物なの？」

今まで黙っていた成佳が、爽奈の湯のみにお茶を淹れつつ問うた。

「おおっ、よくぞ聞いてくれました。普通の『桃太郎』なら、猿でもできる！……ということで、私は大胆にアレンジしてみたんだ」

凄いでしょー、と、爽奈は喜色満面でノートの1ページ目をめくった。

その瞬間、全員の表情が凍りついた。

なぜ脚本や『桃太郎』などの言葉が出てくるのか。その答えは9月も終わる頃に、担任の「今年も2年生は、文化祭で劇をします」という一言から始まった。

野瀬保育専門学校の文化祭は、毎年11月の第一日曜日に行われてきた。1年生は合唱、2年生は劇と、開校から毎年絶えることなく、行われてきた伝統的な行事である。周辺の住民との結びつきも強く、多くの来校者が訪れるほどであり、多大な人気を得ているのだ。

爽奈達がボランティアに行ってる野瀬私立保育園や、その他周辺に点在する幼稚園や保育園の園児達を招待している。因みにその園児達には、露店の商品の引き換え券を前以って配布しておくなど、太っ腹さを披露していたりもする。これも他校への牽制のつもりなのだろう。

と、話はここで戻す。

実習の疲れもすっかり癒え、これからようやく就職活動に入ろうとしていた（入っていた）少数の生徒達からは、分かっているもブーイングが起こった。

しかし、大勢に一方的に責められた担任は、泣き落として生徒達を黙らせてしまったのである。

泣かれに泣かれ、そのうえ哀願されてしまっただけは仕方がない。文句を垂れていた生徒達は、しぶしぶ劇をすることに賛成した。

だが、如何せん脚本作りや衣装作りや稽古をする時間が足りない。本来なら、余裕を持って9月の初旬には言っておくものだ。しかしながら、担任がすっかり忘れていて今日の今日まで言いそびれていたらしい。

呆れを通り越して生徒達は、とりあえず急いで準備に取り掛かった。

因みに、劇は去年まではクラスで1つだったのだが、今年に限って春先に決めた班で行うことを学長命令で義務付けられていた。

劇は特に制約がなく、やりたい放題できるのだが、脚本ばかりに

時間をかけていられないので、オリジナリティにこだわる者など居ないに等しかった。よって、既存の作品をそのまま書き起こすか、少しばかり改変するなど、短期でできて且つ楽な方法を探る班が全体とつても過言ではなかった。

かく言う爽奈達もその口だった。オリジナルなら、紗弥菜がぱぱと書いてくれそうなのであるが、あいにく幼児向けは書いたことがなく、無理に等しい注文だった。

そこで、話し合いで何をするか決めることになった。

しかし、爽奈が既に脚本を書き終えていたことで、爽奈以外の面々は内心安堵したものだ。

そう、中身を見るまでは……。

「何？ この超展開しかなくて、観る人を置いていかんばかりのストーリーは……！」

「あのなあ、これじゃ意味不明過ぎて、園児達も分からないって」
くちぐちに紗弥菜は目を吊り上げつつ、侑治郎は嘆息を混じらせ、脚本の内容について突っ込む。

「何おうっ？ 君達は私の渾身の力作を馬鹿にするのか！」

爽奈が怒っても迫力のない顔で、紗弥菜と侑治郎を交互に睨んだ。
侑治郎はかぶりを横に振って冷静に諭す。

「そうじゃなくて、何で『桃太郎』の話に『金太郎』とか『浦島太郎』とかが出てくるんだ、って話だよ。最近あった特撮ものみたいじゃないか」

「そんなもん知らないねーっだ！ 設定が丸つきり違つてれば、問題ないもんねー」

仕舞いには両手を腰に当て、胸を張って威張る始末である。

「む。まあ、そう言われてみればそうだが……」

言葉では一応そう言ってみたものの、得心が行かない侑治郎は、脳内で言葉を選定して紡ぎだすように慎重に言い出した。

「だけど、他作品との融合は園児達から反感がきやしないか？ 登場させるにしてもせめて、何で金太郎や浦島太郎が、桃太郎と一緒に

に鬼退治をしている理由や説明は必要だと思うぞ」

侑治郎の言う通りであった。他作品の人物を登場させるには、適当でもいいから理由が要る。

爽奈の脚本は、金太郎と浦島太郎のことには一切触れておらず、旅に出てすぐの場面で2人の台詞が書かれてあるほどだ。

「例えばどんなのー？」

すっかり膨れっ面の爽奈が、不機嫌そうな声を挙げた。

「そうだな……」

侑治郎は腕を組み、思案顔で床を凝視する。少し経った後、即興で考えた案を吐露し始めた。

まず金太郎の扱いについては、17歳ぐらいの設定。武器は鉞。まさかり
次いで浦島太郎は18歳ぐらいの設定。武器は銛。もり

「……と、言う訳だ」

説明し終えた侑治郎は、コップに入っていたジュースを一気にあおった。

「へえー、ほうほうほう」

感心した風でうんうん頷いてはいるが、あんまり分かってない爽奈。

「熊が喋るとか浦島太郎の武器が銛とか、ちよつと分からない部分もあるけど、良いわね」

紗弥菜は、機嫌が良さそうに目を細め、用意してあったノートに侑治郎の案を書いている。どうやら、出た案を片っ端からメモして、後から使えるものを拾っていいこうとしているらしい。

対して侑治郎は、苦笑しながら答える。

「熊が喋るのはフィクションだから、別にいいだろうと思って。武器が銛なのは、浦島太郎が漁師だった説から何かないかなー、と思つたら、それが出てきたただけだ」

合点がいった紗弥菜は、ますます機嫌を良くしたらしく、何度も首肯する。

「ああ、そう言われてみればそうだったわ。流石に武器が釣竿じゃ

滑稽過ぎるものね」

「そういうことだ」

侑治郎が満足そうに言った。

「それにしても、侑さんとさやつちゃんはよく知ってるね。私なんかさっぱりだよ」

頬を人差し指で掻きつつ、己を恥じる真優。

「そうねえ。普通は浦島太郎の漁師説なんか知らないもの。2人も本を読んでるだけのことがあるわあ」

成佳が侑治郎のコップにジュースを満たしながら、恵比須顔で紗弥菜と侑治郎を褒め称える。

侑治郎は面映そうに頭を掻いているが、紗弥菜はにこつと微笑んで見せた。どうやら、侑治郎の出した案を自分なりにまとめていて、話すと忘れてしまうみたいだ。

しばらく2人は喋らなそうだ、と思った爽奈は、ようやく理解したのか嬉々として発言する。

「他に意見ある人　っ？」

ぴつとまつすぐに成佳が挙手する。

「僭越ながら私が言ってもいいかしら？」

「どうぞどうぞ！　何でもいいんだよ！」

じゃあ、と成佳が自分の案を滔々と語り出した。

その突拍子もない一言に、みな口をぽかんと開けたまま石にでもなったかのように、固まった。

思案に暮れているのか、それとも呆れて声も出ないのか、沈黙が少時続いた。

その間言った本人は、空気を変えたことなど気にしていないらしく、恵比須顔のまままで返答を待っているのだから、ある意味大したものだった。

一通り案を出し終えて、大方まとめた頃には陽もとっぷりと暮れ、外は外灯が白々と灯っていた。

脚本は結局紗弥菜が書くことになった。他の4人が、小説や脚本を書いたことがないから、という何とも簡単な人選である。

部屋の主の成佳は、今更であるがベッドに上がってカーテンを閉めつつ、半身を4人の方に向けてにつこりと笑う。

「今日は遅くなつたし、みんな食べていって。私のせいでもあるから」

耳をうさぎのようにぴくつかせて聞いた爽奈は、眼を爛々と光らせ、両手を拳にして立ち上がる。

「まじっすか！？ で、メニューは何！？」

「特に爽奈ちゃんが大好きーなカレーよ。短時間だけど、1日寝かせたようなコクがあるものを作つてあげるわ」

「やつた　っ！　なるさん、大大大だーい好き！」

成佳をベッドに押し倒す調子で抱きつく爽奈。

ちやつかり抱きついた本人曰く、愛の籠つた大きな胸を揉みたい放題揉んでいる。

「ふふふふ。爽奈ちゃん、赤ちゃんみたい」

ひしと胸に抱き寄せた爽奈を、慈しみの籠つた眼で見入る成佳。

注文に応えたのか爽奈は、瞳を潤ませて親指を甘く噛んで、上目遣いで成佳を見澄ました。

「あらあら、ますます可愛いわあ」

そう言うや、爽奈の匂いを堪能しようと顔をうなじに近づけた。

一連の行為を黙視していた紗弥菜は、テーブルを荒々しく叩いて立ち上がった。

「こらっ、爽奈！　いつまで胸を揉んでるの！　いい加減離れなさい！　成佳も色々と自重しなさい！　ちよつと真優！　何であんたは指をくわえて見てるの！　せめて侑治郎が居ない時にさせてもらいなさい！　侑治郎、あんたはいい加減慣れなさいよ！　日常茶飯事の範疇を超えているんだから！」

怒りに任せて一気に言い切った紗弥菜は、頭に血が上り過ぎて立ちくらみを覚えたものの、辛うじて耐えた。

「えー、何でー。そんなこと言うなら、あんたの乳を揉んでもいいの？」

爽奈は、納得のいかない表情で文句をぶつたれる。

「へ？ …… べ、別にいいわよつ。ただし、侑治郎が居ない時だけなんだからねっ！」

余程恥ずかしいのだろう。紗弥菜は、顔から火が出そうなくらい真っ赤にして無理矢理怒り、眼鏡のブリッジを指で押し上げる。

「おお、まじかね。そんじゃ、今夜辺りあんたの部屋に忍び込んでやろうかねえ」

まるで魔法使いの老女みたく、最後にはひっひっひと歯を見せて笑う爽奈。

「いいわよ。揉めるもんなら揉んでみなさいよ！ 受けて立つわ！」
ここまでできたら、とことん吹っ掛けることで、爽奈を負かすしか考えていないらしい。それが、本心を告げてるようにも聞こえてきた。

侑治郎が苦言を呈する。

「あのさあ、せめて俺が居ない時にそういう話をしてくれないか。

一応、俺も健全な20代の野郎だしさ……」

「そうだよ。これじゃ、侑さんが女の子みたいだよ」

「は？」

真優の訳の分からない言に、爽奈と紗弥菜と侑治郎は、首をかしげた。

「あうう……」

突っ込みを入れるつもりが、なぜかボケみたいなことを言ってしまったのだらう。頭の思考回路が混乱と言う爆弾に爆砕され、ごちゃごちゃになった真優は、続きを言えなくしまった。

「つまり私達は、性的で且つ下品なことを言う中学校か高校生くらいの男子みたいで。侑治郎さんは、そんな真っ只中で聞くに堪えない話を、聞かされているうぶな女子ってことなんでしょう？」

成佳は、真優の意図を斟酌しんしゃくした。

「そう！ それを言いたかったの。ありがとう、なるちゃん」

手を叩いて喜ぶ真優に、成佳は笑みを向けつつ言う。

「いえいえ、どう致しまして」

「そうだったわね……。悪いわね侑治郎。下品過ぎたことを一応謝っておくわ」

自分でも過ぎたことを言ったと思ったらしい。紗弥菜は頭を下げて素直に謝罪する。

「いやいや、いいんだ。俺のことは。それより、成佳のカレーが食べたいな。もう、さっきから腹が鳴りっぱなしでさ」

「あ、そうでしたね。爽奈ちゃんごめん、私離れるね」

「えっ。でも、カレーを作ってくれるなら、許してあげるよ」

「ありがとう。とびつきり美味しいカレーを作ってあげるからねえ」
成佳がベッドから降りて、侑治郎を誘い台所へ向かう。

その様子を見ながら、何気無く爽奈は枕の下をまさぐった。すると、くしゃという紙が手に当たる音がした。

（何だこれ？）

引っ搦んで出してみると、白い封筒だった。切手は既に貼られているが、宛先や郵便番号などはまだ書かれていない。逆さまにして中身を出すと、1枚の紙とメモリースティックが出てきた。紙には学歴や長所や特技を書く欄があった。長所や特技の欄はびつちりと細かい字で埋められている。

「なるさん、これ何？ どっかにバイトでも申し込むのー？」

成佳が爽奈の方をちらつと眼を向けた。その瞬間、動作は勿論のこと心臓や脳の動きが、止まらんばかりに仰天した。

「おい、大丈夫か」

隣で包丁の角でじゃがいもの芽を取っていた侑治郎が、心配そうに声をかけた為に、少しあらぬ方向に飛んでいた意識が戻った成佳。
「うん、大丈夫です」

そう言つと、爽奈の眼をじっと見つめて、

「まあ、そんなところだよ」

至っていつもの調子で返答した。

「ふうん……ま、いつか」

爽奈は、履歴書とメモリースティックを封筒に入れて、枕の上に置いた。そして、テレビを観ていた真優に抱きつく。

紗弥菜が目ざとく見つけて、眼を三角にする。

「こらっ、爽奈！　またあんたは……！」

この時、まさか後々の運命を変えることになるうとは誰も思いもしなかった。それよりも、完成が待ち遠しいカレーのことで頭が一杯だったのである。

15章……紗弥菜の告白

「えー、『仮面戦隊アヤシンジャー』の主人公の必殺技は、『轟旋風・一刀両断』でしょー？」

「違う違う。それはラスボスに使った1度きりの技だ。……と言うかそんなに観てないとか言ってた癖に、1回使った技を憶えてるな」
「ふっふっふー、第1話と最終回はきちつと観るからね。その辺は抜かりがないのだよ。あとは適当だけどねー」

「おいおい、そりやないだろ。せめて何話が続けて観ろって」

「そうは思ってもさー、大体朝早くて起きれないもん。あ、録画しるってたって無駄だよ。消したくないアニメが沢山詰まってるし」

「ああ、そうかい……」

「で、必殺技は何なのさ」

「あ、そうだな。それはだな、こうやってしゃがみながら柄に手を掛けて、抜刀しながら『轟旋風・斬切』、と、言うやつだ」

「へえー、格好いいじゃん！ 他には？ 他にはないの！？」

「いきなりテンションが上がったな……。ま、あるっちゃあるぞ。こうやって構えてだな……」

10月1日から執筆を開始した脚本は、規定の1週間で仕上がり、その翌日はひとまず読み合わせ、そのまた翌日から稽古を始めた。

因みに衣装は、卒業生が作ったものの借り物である。何回も使いまわされているせいか、ほつれや汚れが酷かった。しかし、いちから自作してたら、それこそ劇の本番で醜態を晒しかねないので、借りられるだけの衣装を借り、過不足分やほつれなどは真優と成佳が製作・修繕することで帰着した。

『桃太郎』を劇に使うとしていた班が他にも2つあったが、1つの班は何を迷ったか『笠地蔵』に変更した。本家の『笠地蔵』は地蔵が7体。おじいさんとおばあさん役で2人抜けるとしても、3

体しか居ないことになる。まあ、異説があつて3体という地方があるらしい。それにそんなことは、園児達にとつては些末なことであり、教師も特に何も言わないから問題ないらしいが。

もう一方の班は正史の『桃太郎』を行うそうだ。その為に、衣装の争奪戦が繰り広げられると思いきや、過去にも何班が被つて劇でやったそうで、何着も衣装室に眠っていた。だが、比較的新しい方はさつさと持つていたらしく、爽奈達に取りに行った時には古びたのしか残つていなかった。

腹は立てども後の祭である。先に述べたように、器用な真優と成佳が修繕できる部分は修繕していた。

この日は2時間限定で体育館のステージを使えることになっていた。時間制限つきなのは、他の班も使用するからである。担任はこういうところには頭が回るらしく、班ごとに使える曜日や時間など、大雑把に振り分けたプリントが、泣き落としを使った翌日に配られた。因みにこの時ばかりは、程好く振り分けられていたので不満は出なかったという。

体育館に成佳と真優が談笑しながら、入つて来た。2人の両手には、お菓子やジュースなどが入った袋を持っている。

真優は、ステージに上がる際に使う階段で、腰を下ろしている紗弥菜を発見。駆け寄つて両手を挙げて見せた。

「ただいまー。さやつちゃん、1人でどうしたの？」

「おかえり。台本のチェック中。あと、あいつらが何話してんだかさっぱりで、ここに居たの」

ちら、と紗弥菜は、はしゃいでいる爽奈と侑治郎の姿を流し見る。何処か複雑な表情を面に浮かべながら。

「それに、何かは分からないけど、いらいらするのよ。……あ、決してあいつらのことが本当に大嫌いつて訳じゃないのよつ。む……むしろ、好きだし……。で、でも、なぜかいらいらするの。ああやつて仲良く話していると、特に……」

真優は、かけている眼鏡みたく目を丸くした。

「ええっ？ さ、さやつちゃん。それって……恋じゃないの!？」
釣られて紗弥菜の目も丸くなる。手にしている台本を落としそうになるほどだ。

「こ、恋!？ そ、そんな訳ないと思うけど……こんな気持ちになるものなのかな？」

額に手を当てて顔を隠すようにしてうつむく。紗弥菜自身、しばらくは縁もなさそうな話だと思っていたからだ。

「私にもよく分かんないけど、多分そうだと思うよ。……本で得た知識だけど」

真優は慌てて付け加えるが、時既に遅く。紗弥菜の耳には真優の声が入らず、長考の海に沈みかけたその時。

紗弥菜と真優の会話の途切れた頃合を見計らって、絶やすことのない笑みを珍しく潜ませ、成佳が切り出した。

「こんな時にいきなり訊くのは、如何なものかと思うんだけど……。紗弥菜ちゃん。貴女、爽奈ちゃんにキスをしなかった？」

平坦な口調だった。成佳は別に喜怒哀楽は顔に出していない。ただ、訊きたいこと訊いただけらしい。

びくつと体を1度震わせただけで、顔を上げようとしないう紗弥菜。長い髪が前に垂れてきて顔の側面を覆い隠し、真正面以外からでは窺い知ることができない。

「ええっ」

「ごめん!」

「むぐうつ」

仰天して大声を挙げようとした真優の口を、成佳は割りと強めに掌で塞ぐ。

「それはっ……そのっ……」

いつの間にか顔を上げていた紗弥菜。突然のことで、適切な言葉がなかなか出てこない。その代わりに、頬が徐々に赤々と染め上げられていく。

紗弥菜が抱いているであろう懸念を振り払ってやるように、成佳

は優しく推察を述べる。

「紗弥菜ちゃん、大丈夫よ。そういう意味でしたんじゃないということは、よく分かっているから。おそらく、お粥を口移しで食べさせてあげてたのよね」

はつとした顔でゆっくりと顎を引き寄せる紗弥菜。

「そ、そうね。その通りだわ……。でも、どうして分かったの？」
面を笑顔でふんだんに彩らせる成佳。

「紗弥菜ちゃんの唇に、ちっちゃいご飯粒がくっ付いていたからよ。だから、もしかしてと思って」

「あー、なるほどね……」

納得して首肯した紗弥菜。

普段の表情に戻っているのだが、何処か成佳に対して構えている話し振りだった。

それを敏感に察知した成佳は、ひとまず掌で口を押さえていた真優を開放し、詫びを入れつつ紗弥菜の前にしゃがんだ。咳払いの代わりに、ひとつ微笑みを挿んでから発し始める。

「あのね、紗弥菜ちゃん。私は何も咎めようとして言ったんじゃないわ。ただ、その時どんな感情があったか知りたいだけなのよ。差支えがなければ、それで紗弥菜ちゃんのもやもやが晴れるなら、私達にだけでも聞かせてもらいたい」

ねっ、と謝罪の念を含ませた眼で涙目の真優を振り仰ぐ。

「うん。私も聞きたいな」

真優は涙をハンカチで拭きながら、紗弥菜の眼を直視してにこりと笑った。

もう、胸の中に閉じ込めておくのは限界だった。紗弥菜の胸の内は、懸念が渦巻いていた。脳内では、はたして言っても大丈夫なのだろうか、信じて理解してくれるのだろうか。そんな思いが無尽蔵に湧いてきていた。しかし、眼前の友人達の優しく暖かな眼を見ていると、本音と事実を打ち明けてもいい、と言う気持ちいだんだん生じてきた。そう思うと意識せずとも、面輪おもわに笑みがこぼれた。

「分かった。話すわ。口移しをする時は、嘘偽りなしで爽奈のことを率直に可愛いと思った。けれど多分、成佳が思っているであろう、私もよく知らないんだけど”百合”の世界とは関係ないと思う。その……情欲を掻き立てられるとか、キスし続けたいとは思わなかった。何より爽奈や侑治郎を含めて4人は友人以上、もしくは家族かきようだいたと私は思っているからね」

そこまで言うと、唾をぐくりと飲んだ。どうやら、喉が渴いているらしい。

真優は、袋を漁って500mlタイプのお茶を取り出し、紗弥菜に手渡した。

紗弥菜は礼を言いつつ、半分ほど飲み干した。キャップを締めて傍らに置き、話を再開した。

「ここから先は誰にも言ったことがないんだけど、2人だから話すわ。私には妹が居た。名前は紗弥香。紗弥は同じ漢字で「か」は香るの香。歳は5歳違い。シスコンだと思われるけど、凄く可愛い妹だった。生意気で威勢がよくて、屁理屈は1人前にこねるのが上手で……。でも、誰に対しても差別なく接していて、いじめが大嫌いの正義感の塊で融通が利かなかったけど、それでも良い子だった。口喧嘩も取っ組み合いの喧嘩も沢山したけど、仲は良かった。ただ……」

だんだん紗弥菜の表情に翳^{かげ}りが浮かんできた。

「妹が10歳の時、体育で100メートル走をゴールした瞬間に倒れて、そのまま死んでしまったの。原因は分からないんだけど医者さんは、急性心筋梗塞で片付けてしまったわ。私は当時中学3年生だったけど、わんわん泣いたわ。通夜の時も葬式の時も出棺する時も。家族のみんなは、しばらく経って元通りになったけど、私は沈んだままだった。高校に行ってもショックを引きずっていて性格も暗く、積極的に交流を図ろうとしなかったから友達なんか1人もできなかった。ほとんど一日中紗弥香のことを考えていた。高校3年生になって進路をどうするんだと言われた時、一応小学生ぐら

いの頃から抱いていた夢があつて、とりあえずそれにすることにした。幸い成績は良かったから、早々に進路を決めることができたわ。高校を卒業して、資格を取る目的だけに、ここに来た。友達も高校の時同様に作らない気でいた。ところが……驚くほど紗弥香に似た女子が居た。その女子には悪いことをしたと、今でも思うわ。なんせ、開口一番大声で「紗弥香！」って言いながら、抱きついてしまったからね。しかも泣き始める始末で。幸い、周りに人が居なくて良かったけど、当人もかなり困惑してたわ」

苦笑いしながら、お茶をあおる。

成佳が勘を働かせ、間隙をつくように質問する。

「もしかして、爽奈ちゃんのこと？」

意想外なことに耳を疑う紗弥菜。

「あれ？ あいつから聞いてなかったの？ 以外ね。そう、如何にもあいつ 爽奈のことよ。最初は成佳と真優みたいに和気藹々（わきあいあい）やってたけど、3日も経ったら、あいつの本性を知って呆れたものよ。私も最初は大人しくしてたけど、だんだん我慢ならないことは言うようになったしね。しょっちゅう口喧嘩してたわ。そうであつても話は合うし、何だかんだで面白い奴だから、付き合ってたけどね。あと、紗弥香に似ていたせいか危なっかしいから、ほっておけなかったし。で、そうこうしているうちに成佳と真優が加わって、今の関係が形成された訳なのよ」

一旦句切って、また翳りを帯びた表情になっていく。

「だけど、最近になつて……よく爽奈と紗弥香がダブって見えるようになった。私は、その都度接し方に困ってしまう。ダブって見える時は声や言ってることまでが、まるで紗弥香が言ってるように聞こえるの。その時は『紗弥香！』って叫んで抱きしめてあげたい。でも、できないもどかしさ……。だってそんなことをしたら、爽奈を困らせてしまう。何も知らない爽奈を、巻き込みたくないのはやまやまだけど、衝動を抑えきれなくなったらを考えると……。その葛藤が、今の私の中にあるの。本当、どうしたらいいのか……」

言い終わるや、頭を抱え込んでしまった。

「紗弥菜ちゃんは、本当に悩んでたのね……。妹さんと重なって見える、か……」

成佳は居た堪れなくなつたが、同時に何とかして紗弥菜の問題を解決してあげたいと思い始めていた。断腸の思いを隠そうともせず、天井を向いておもんばかりだした。

真優はと言うと、紗弥菜の話があまりにも悲しく、しゃがんで顔を伏せてしまい、解決策を思案できる状態じゃなかった。

しばし、3人の間に静寂が生まれた。相変わらず、ステージの上では爽奈と侑治郎の2人が全然飽きもせずに馬鹿騒ぎを続けている。「この話を、爽奈ちゃんと侑治郎さんにもしてあげた方がいいと思うんだけど。……どうかな？」

まだ胸を圧された気分なのだろう、憂いを含んだ思案顔をしつつ、成佳は窺うように紗弥菜を見つめる。

少時無言のままの紗弥菜だったが、（うしろめたい）幽愁を漂わせつつ、顔を緩やかに上げて頷いた。

「そうね。紗弥香のことはいずれ折を見て爽奈と侑治郎にも話そうと思っていたし……」

「分かった。私が呼びに言ってくるわね」
ふっと笑い、成佳が承諾した。

紗弥菜は、爽奈と侑治郎にも紗弥香のことを話した。

2人は驚いたり、悲しそうな顔をしたりと急がしそくに表情を変えていた。最終的に、侑治郎は傷心を顔に浮かべていたが、爽奈はうーんと難しそくに眉間に皺を寄せた。やがて、あつと声を放った。「そーいや、そんなこともあったねー。あん時は驚いたよ。でも、みんなに話さなかったのは、どこかで言っちゃ駄目だなーって意識があつたから。だって、あん時の紗弥菜の行為は本物だったもん。演技であそこまで泣けて言われても、わんわん泣けないしね」

懐かしそくに言つて、ふふ、と小さく笑った。そして、反論しな

い紗弥菜に眼を合わせる。

「こんな私でよければ、その見える時だっけ？　できる限り紗弥香ちゃんのように振舞うよ。あんたは命の恩人だしさ、いつかは恩を返そうと思ってたし。だからさ、元気出しなつて。

んー、そんなに似ているんだつたら、会いたかったなー。紗弥香ちゃんかー……」

紗弥菜の真ん前にしゃがみ、同じ目の高さになったところで、満面に笑顔を閃かせる。

「にしても、前々からそうだったんなら、早く言ってくれば良かったのに。私とあんたは会えば喧嘩ばつかしてるけど、友達友達じゃん。あ、付き合いが長いからそれ以上か。何でも胸の中にしまつてちゃ苦しいだけだよ。今度からはある程度出していくこと。分かった？」

嬉しさが胸に満ち溢れ、許容でなくなつたのか思いがけず瞳が潤む。紗弥菜は、こくつと首肯して唇を引き結び、泣くまいと耐える姿勢に入った。

しかし、

「！？」

爽奈が卒然、紗弥菜の両頬をつまむと、痛くない按配で引っ張り出した。

あつと言つ間のことに、成佳と侑治郎は凍りついた。目が点になり、口は半開きで微動だにしない。

これに紗弥菜は、反射的にかちんときた。良いこと言つたと思えば、やっぱり無神経な奴なのか。憤然として、それでも爽奈の頬を同じ力加減でつまんで引っ張る。

「何すんのよ！」

すると途端に、紗弥菜の頬からぱつと手が放された。紗弥菜は意図が掴めず当惑する。頬の掴む手の力が緩む。

「うん！　それでこそ紗弥菜だ！　流石私が認めた眼鏡っ娘だけあるわ」

最後の一言は明らかに余計だったと思えるが、爽奈は気にしない。素早く立ち上がるや、振り向いて声も高らかに呼びかける。

「さあ、湿っぽい空気はこの辺にして稽古をしようよ！ あと1時間ぐらいしかないんだからさ！ もー、まゆっちもいつまでも泣いてないで早く立つー！」

真優にずかずか歩み寄って、手を引つ張る爽奈。

「だ、だって……さやっちゃんが可哀相で……」

真優は、手の甲でとめどなく流れる涙を拭いている。

「その話はもう終わったの！ ほら、これで顔を拭いてステージの上に行くー！ 侑治郎もなるさんもほらほら」

ハンカチを真優に渡しながら、今度は突っ立っている2人に近づく。

「あ、ああ」

「そ、そうね。始めましょうか」

2人も我を取り戻し、ステージに向かう。

「さて、と……」

きびすを返す。紗弥菜はまだ当惑している様子だった。

「こらー、紗弥菜！ いい加減にしないと温厚な爽奈さんも閻魔になるよ　っ！」

「煩いわね。今ステージに行こうとしてたところよ！」

「嘘ばかり。ぼけーっとしてたくせにー」

「違うわよ！ 役に集中できるように意識を集中させていただけよ！」

その場で口喧嘩が切って下ろされた。

そんな爽奈と紗弥菜を他の3人は、三者三様の面持ちで、しばし仲裁にも入らず眺めていた。

16章・1…学校のね、劇ですから

いよいよ文化祭当日となった。

各々の練習の成果を披露する日がやってきたのである。

1年生の出し物である合唱が終わる頃には、体育館の中が複数の幼稚園児や保育園児、その保護者・教諭（保育士）、毎年楽しみにやってくる周囲の住民で埋め尽くされるほどまでになっていた。

そして、先ほどから2年生の出し物である劇が始まった。既にステージ上で演じている者は、大方棒読みやたどたどしい動きは目立つが、それでも一生懸命やっている。

一方、ステージの袖で待機している側の生徒達にとっては、緊張しすぎて永遠一步手前まで魂を持っていかれそうな者がそこかに居た。他にも、腹を据えて黙然としている者やぶつぶつと唇のうちで台詞を唱えている者やうるちよると動き回っている者など、大半の生徒は緊張を隠しきれないようだ。

今はまだ少数ながら演じ終えた者達は、開放感と達成感に包まれていた。重圧に押し潰されることもなく、膨大な台詞をそらんじることもなく、何も考えなくていいのだ。台詞など終わった瞬間に忘れ去り、今はただただ菩薩のように優しい顔で安息し、他班の劇の様子をいち観客として観ている。中には台詞や動作を間違えたことを気にして、落ち込んでいる者も居たが。

爽奈達は待機している側である。もつとも、今演じている班が終われば、次に演じねばならないのだが。それゆえにそれぞれがそれぞれに緊張している。

爽奈は意味もなく動き回り、紗弥菜は台本を睨みつつつぶやいて、真優は緊張と重圧に飲まれて泣きそうだ。それを成佳が胸の内に抱きしめて「大丈夫、大丈夫」と諭しながら、頭を撫で続けている。侑治郎はと言えば、反対側で待機していた。座禅を組んで緊張を押し殺そうとしているみたいだ。

「……とさ。めでたし、めでたし」

どうやら、前の班が終わったらしい。割れんばかりの拍手が巻き起こり、交わるように園児達の甲走った声も体育館中に響き渡った。演じていた生徒達は、中央に寄り集まって左右中央を順繰りに向いて一礼し、袖に退いて行く。待機している生徒達の手によって幔幕がさつと横走り、組んでいた簡易なセットや小道具が片付けられ、新たにセットが手早く配置されていく。

そんな様子を目の端に入れつつ、爽奈は右手を前方ぴんと伸ばして、そのままへその前まで下ろした。

「さあ、いよいよ本番だよ！ みんなも手を置いた置いた」

言われるがまま特に抵抗することもなく、3人が手を置いた。

首を脩治郎の方に向け、爽奈は命ずる。

「脩治郎は、そこでタイミングを見計らって下ろすこと！」

「お、おう！」

脩治郎だけ1人で寂しい状況だが、時間もあまりないし、致し方なかった。もしも、爽奈達の所に行き来する時に幔幕が開いたら、それだけでもう台無しである。それだけ重要な役を与えられているらしい。

「よし、頑張っていこ　っ！」

「お、お　っ！」

何とか頃合を合わせて手を下ろし終えた4人は、微々たるものではあるが落ち着きを取り戻せた。脩治郎の場合は、その直後に猛烈な恥ずかしさが襲ってきたみたいで、うつむいてしまったが。

その時、進行役の生徒が朗々と告げた。

「次は1組5班で『少し変わったももたろう』です。どうぞお楽しみ下さい」

「むかーし、むかし、ある所におじいさんとおばあさんが……」

いよいよ爽奈達の劇が始まった。おじいさん役は真優、おばあさん役は成佳の役柄だ。

序盤は何ら変わらない至って普通の桃太郎。おじいさんが山に芝刈りに行って、おばあさんが川に洗濯に行ったら、通常ではありえない大きさの桃がどんぶら（り）ことんぶら（り）こと流れて来て、それを老人の細腕で持ち帰って包丁で一刀両断したら、中から可愛らしい赤ちゃんが入っており、桃から生まれたから「桃太郎」と名づけたところまで一緒である。

因みに、赤ちゃんは本物を借りられる訳なかったので、人形で代役したらしい。

心身ともに成長し、今ではすっかり村1番の働き者で且つ見かけによらず力持ちの桃太郎　担当は爽奈　が、ある日突然、
「おじいさん、おばあさん。近頃、鬼達が悪さをして、人々を苦しめているそうです。僕は、そんな鬼達を許しておけなくなりました。ここはひとつ、世の為人の為にも鬼退治をしに鬼ヶ島に行きたいのですが、許してはもらえないでしょうか」

おじいさん　真優　が瞠目する。

「何と、そのような志があったとは……。桃太郎、お前も立派に成長したのう。わしは嬉しいぞ。ばあさんや、よよと泣いてないで、黍団子きびを作ってやりなさい」

真優の場合、化粧とかつらで風采は何かおじいさんばく見えるものの、声は変えなければ作らずそのまんま地声である。なので、妙に幼い声を出すおじいさん、と言う可愛いんだか気持ち悪いんだかよく分からないことになっていた。因みに、眼鏡はフィクションと爽奈の強い希望でかけたままである。

おばあさん　成佳　は、袖で目を隠しつつ立ち上がる。

「そうですね。桃太郎は12歳になったし、男の子はいつか旅に出るのですものね。待つてなさい、とびつきり力がつく黍団子をこしらえてあげますからね」

比して成佳は、見事に老婆の声を作って演じていた。因みに、成佳の場合は髪が長すぎた為に、かつらはつけていない。ただ単に、髪を後ろにやって服の中に入れただけである。他の部分はそのまま

であるが、白髪に見えるように髪に多少の着色は施してあった。なお、化粧はきちんと老婆に見えるようにされてある。

深々と頭を下げる桃太郎。

「ありがとうございます」

爽奈は化粧なしでかつらなしである。しかも声も変えていない。何ぶん12歳という年齢設定で、声変わりするかしらないかの微妙な時期であるから、声は高くても問題ない。顔も第二次成長期を終えても童顔の男など、いくらでも居るものである。髪形は題名を『少し変わったももたろう』にしたので、無理にちょんまげにこだわる必要はない、とのことで、変更なしとなった。

桃太郎は、日の丸の鉢巻を額にぎゅっと締め、陣羽織を羽織る。背負う幟のぼりは大きく「桃太郎」と書してある。腰に刀を差し、反対側には黍団子が吊り下がっており、手には風呂敷を持っていた。

「それでは、行って参ります」

「うむ。達者でな。道中気をつけるのじゃぞ。これ、ばあさんも泣いてないで、ちゃんと見送らんか」

おばあさんは桃太郎の手を握り、よよと泣き続ける。

「無事に……無事に帰って来るのですよ」

顔筋を緩め、力強く握り返す桃太郎。

「ええ、勿論。村1番の力持ちの僕が、鬼なんかに負けませんよ」

おばあさんの手を名残惜しそうに離し、背を向けて歩き出した。

「こうして鬼ヶ島へと旅立った桃太郎。彼の行く先にどんなことが起こるのやら」

語り手の一言を挟み、一旦照明が落ちる。セットの変更と出番を終えた出演者が一旦退く為だ。電光石火の早業でたちまち次の場面のセットが構築され、ぱつと照明が再度点灯した。

先ほどと代わって草や地蔵などを置いた道端のセットである。

袖から桃太郎が、少し疲れた顔をして出てきた。

「ふう、結構歩いたなあ……。おや、あそこで美味しそうにおにぎりを頬張っている人が居るぞ。僕も一緒にさせてもらおうかな。す

いま」

桃太郎がおにぎりを喰らっている人物を呼ぼうとした時、その人物は息苦しいような声を一つ言ったと思うや、ほんとと胸元を叩き始めた。

「た、大変だ！ 水をあげないと！」

風呂敷から竹筒を引っ張り出して、急いで駆け寄って手渡す。

彼は、ごくごくぐりと喉を鳴らして、飲み干した。

「ぶはーっ……ふうー、死ぬかと思った。坊ちゃんありがとうよ！

おかげで助かったわ！」

大笑いしながら、ぐしゃぐしゃと桃太郎の頭撫でる。

「い、痛いです……」

痛ましの眼で桃太郎は、少しばかり背の高い男を見る。

彼は、苦笑しながら手を放す。ふと、視線が幟に釘付けになった。

「ああ、悪い悪い。それにしても、何だ。えらく物々しい格好をしているじゃねえか。怪物でも退治しに行くのか？ なーんて、そんな訳ないよなー」

あらん限りの声で笑い飛ばす男に、桃太郎は何ごとかを言い辛そうに眼を伏せる。

しばらく好き勝手に笑っていたが、眼を伏せて何も反論してこない桃太郎を不審に思った彼は、次第に表情を元に戻して行く。

「も、もしかして……本気で退治しに行くのか？」

「そ、そうです……」

視線を合わせようとせず、蚊の鳴くような肯定が聞こえた。

「す、すまん。そんなつもりじゃなかったんだ。許してくれ。これ、この通りだ」

彼はかぶりを下げ、掌を併せて前に突き出す。

驚いた桃太郎は、慌てて首を左右に振った。

「いやいや、謝ることないですよ。普通なら考えられませんからね。貴方の仰るとおりです。僕は今から鬼ヶ島に、鬼退治をしに行こうとしてたところなんです」

最後の方は、真剣味を帯びていて意志の強さが伝わってくるほどの一言だった。

下げたかぶりをバネ仕掛けのように、元の高さに戻し、鳩が豆鉄砲を喰らったような顔を桃太郎に向ける。

「何っ、君も鬼ヶ島へ！？ 奇遇だなー、実は俺も行こうとしてたところなんだよ！」

「え　っ！？　じゃ、じゃあ……もしかして、貴方は鬼の子分だったんですか？」

突拍子もないボケのみたいな問いに、男がその場でずっこける。体を起こしつつ、

「ちっが　う！　そんな訳ないだろ！　この金太郎が鬼の仲間なんかじゃないわっ！　それに、俺は、れっきとした人間だ！」

なぜか腕を広げて見せた。意味は特にないのだろう。とりあえず、何も害悪がないことを証明したかったらしい。

因みに、金太郎役は真優である。物語の関係上、1人2役は致し方ないことだった。おじさんの化粧を急いで落とし、かつらも取って髪もそのまま。普段どおりで演じている。金太郎と言えば菱形の腰掛けなのだが、成長して青年期の男にそれは酷だろうということとで、やむなく赤地に黄金色で「金」と書かれた手ぬぐいを頭に巻くことになった。服装は、一応時代に合った平服を纏っている。流石に眼鏡は外し、コンタクトレンズを急いで入れた。爽奈は不服そうだったが、こればかりはしょうがなかった。どうしても、金太郎は活発な印象が強く、眼鏡をかけている姿は想像できなかったからだ。

相変わらず声もそのまんまである。声変わり後の15歳頃の設定だが、容赦無く。もつとも、稀に声変わりをしない男も世の中に居るらしいから、寛容な心で観れば何ら問題はないと思われる。

本来なら一人称が俺に男っぽい口調で、野郎要素満載の金太郎であるべきである。だが、明らかに一個も当てはまらない真優が演じることによって、新しい金太郎像が作り出されていると言っても過

言ではないだろう。

当の真優は、顔を熟したトマトのようにまっかつかにし、ほばやけくそで演じているのだが、誰1人して気づかない。むしろ一生懸命さが伝わり、受け入れられている現状であった。

金太郎　真優　は、ここに来た経緯を話し始めた。

何千試合に及ぶ熊との戦いで、ある日突然熊に「お前は誰かに仕えて、世に名を轟かすべきだ」と冗談交じり言われ、翌日から相模（現神奈川県）から出て全国を仕官先探し兼武者修行中だったとのこと。

「だから、俺はあんたに仕えるぜ！　命の恩人だし、旅は道連れ、世は情けってやつだ。と言う訳で宜しくな！　……えーっと……名前は何？」

「あつ、も、桃太郎です……」

「おおつ、同じ太郎か！　ますます気に入ったあつ！　これからは桃太郎さんと呼ばせてもらうぜ！」

「は、はい。宜しくお願いします」

急展開に頭がこんがらがりそうな桃太郎は、肩を叩いて喜んで金太郎に合わせて笑い浮かべながら、叩頭した。

ここで一旦照明が落ち、出演者とセットが行き交った。ぱあつと照明が点くと、今度は海（に見立てた青く塗った大洋紙）や砂などを置いた海辺のセットである。

16章・2…三太郎、勇躍

袖から金太郎が喜び勇んで出てくる。

「いやっほう！ 砂浜だ！ 海だ　っ！」

飛び回っている金太郎によくやく追いついたとばかりに、息を切らして苦しそうな様子の桃太郎。

「金太郎さん、早いですよ……」

はあはあと苦悶に顔を歪め、喘いでいる桃太郎に近付き、金太郎は肩をばんばん叩きつつ大笑する。

「おいおい、桃太郎さんよ。俺よりも若いんだから、しっかりしましょうぜ」

「そんなこと言われても……げほう、ごほう」

むせ返っている桃太郎を後目に、金太郎は鉞を持って反対の袖へと去って行く。

「その君、ちょっといいかな」

「はい？」

声がする方を振り返ると、そこには忽然として長身の男が小脇に箱と矢のようなものを抱えて立っていた。

「ふえっ……」

動悸が止まりかけた桃太郎は、胸に手を当てて眼を大きく見開いた。

男が対照的に悠然とした態で口元を緩め、桃太郎の顔を覗き込む。

「ふふふ、驚いた？　僕の名前は浦島太郎。君の名は何ていうんだい？」

「ぼ、僕の名前は……桃太郎です」

「ほう、桃太郎くんか。良い名だ。こんな所で何をしているのかな？　あそこで騒いでいる友達と遊びに来たのかい？」

「いえ、目ばしい船を探しているんです。鬼ヶ島に行きたいので」「鬼ヶ島だって！？」

浦島太郎は、まるで脳天に一撃を喰らったような気がした。

そう言えば、浦島太郎の役は紗弥菜である。本人はやりたくない
と固辞していたが、じゃんけんで負けた結果がこうだった。しかし、
やるからには紗弥菜は結構真剣だった。なるべく低く安定した声
を出せるように、成佳に教えを請い、作り上げていた。演技も自分な
りに練習し、男役を演じるのに豊富な胸は邪魔になると、胸に晒し
をきつく巻きつけて目立たなくするなど、意気込みは人1倍あると
思われる。しかしかつらは被らず、自慢の背に流している黒髪は後
ろで束ねるにだけに留め、前髪は爽奈達と同様に手ぬぐいを巻いて
いる。眼鏡もかけたままで、おおよそ時代考証がずれてしまってい
るが、これには理由があった。紗弥菜は、コンタクトレンズに強い
抵抗を持ち、眼に入れることができなかったのだ。それと、爽奈の
熱望があったからと容易に推測できる。なお、服装は野良着のよう
な古いものである。

浦島太郎　紗弥菜　がここに來た経過を語り出した。

竜宮城から持ち帰った玉手箱に鍵が掛かっており「開きたいのな
ら、鬼ヶ島の鬼を倒さなければならぬ」と、帰り際に乙姫に言わ
れていた。地上に帰ってきた浦島太郎は、周囲の変わり振りに絶望
し、玉手箱を開けようとした。しかし、全く開かなかったことに憤
慨しつつも、乙姫の言葉を思い出し、意地でも開けてやると決意。
丹後（京都府北部）から単身備前（岡山県南東部）にやってきたの
だった。

「そういうことから、僕も鬼退治に参加させてはもらえないだろ
うか。玉手箱の中身を見るまでは、死んでも死にきれないんだ」

浦島太郎の申し出に、唸りを発しつつ少し困った顔になる桃太郎。

「僕は構いませんけど、金太郎さんが何て言うか……」

「俺は一向に構わないぜ！」

「うわあっ!？」

突然舞い戻ってきた金太郎の出現に、度肝を抜かれた桃太郎は、
へたり込んでしまった。

「おどおど……脅かさないで下さいよ……！」

胸を鷲掴んで怒りと驚きで混乱しそうになっただらしい。声が震え、目の焦点が誰にも合っていない。相当参ってしまったようだ。

金太郎は桃太郎を引き起こしながら、呵々大笑する。

「はっはっは、大げさだなあ。そんなに驚くことないだろう。と言う訳で、宜しく。えーっと……」

浦島太郎は、眉をぴくりとも動かさず答える。

「浦島太郎です」

「浦島太郎さんね。あいよ、憶えたぞー。にしても、太郎が3人揃うなんてなあ」

金太郎がしみじみ言ったのを聞いて、桃太郎が首を縦に振る。

「ねえ。珍しいですよ」

「で、さ。船がなかった訳だが、どうやって行くかー」

「そうですね……」

小首を傾げて方策を頭の中で巡らす桃太郎。

「それについては懸念に及ばない」

浦島太郎が、自信に満ちた様子で言った。

「なぬっ。あらかじめ手配してくれたのかっ？」

金太郎は眼を輝かせて問うた。

「そうじゃないんだよ。ちょっと、2人も眼をつむっててもらってもいいかな？」

両目を閉じ、何ごとかを唇のうちに唱え始めた浦島太郎。

金太郎から眼の輝きが失せた。眉をひそめ、浦島太郎の顔を見上げる。

「は？ 一体全体何をするつもりなんだ」

「金太郎さん、ここは浦島太郎さんの言う通りにしましょう」

まぶたを閉め、光を遮断しつつ桃太郎は、金太郎をなだめる。

「しょうがねえな」

渋々金太郎が眼をつむった瞬間に、照明が消えた。

3人をそのままに、セットの交換が手際よく行われる。物音が治

まったところで照明がまぶしく光を発し、ステージを照らす。紙で作った岩肌のようなものが、あちこちに点在し、血の池を想像したのか大きめに切られた赤い紙が3人の傍に置かれている。

「さ、着いたみたいだ。2人とも眼を」

浦島太郎が促すまでもなく、我慢の限界を超えたらしい。金太郎は、真っ先に眼を開けた。

「な、何だ？ この赤いのは！？」

「血の池地獄だ。敗者は、ここに投げ入れられるんだよ」

「まじかよっ！」

大仰に後ずさって仰天する金太郎に対し、浦島太郎は冷静そのものだ。

「ここは……一体何処なんですか？」

桃太郎は、周りを窺いながら不安気な顔を浦島太郎に向ける。

「こここそが鬼ヶ島。鬼の基地でもあり、鬼の支配者が」

言い終えようとした時、

「ほーっほっほっほ」

と、女性のまるで勝ち誇った笑声が聞こえてきたではないか。

袖から何者かが出てくる。その者はなぜかピンクのチャイナドレスを着用していた。

たまげた桃太郎が思わず訊く。

「あ、貴方は誰ですか？」

「あたくしは鬼ヶ島おにがしま響子きょうこ。島の主よ」

響子は扇子をぱたぱた扇ぎ、明後日の方向に高笑いをする。

鬼ヶ島響子（人間）の役は、未だに出てこなかった侑治郎。本来なら、紗弥菜辺りが似合いそうな役だったが、じゃんけんで負けた為にボス兼女性の役をすることになった。と言うよりも、紗弥菜や成佳が着てしまったら、刺激が強過ぎて衣装の変更を余儀なくされていただろう。チャイナドレスは、なぜか成佳が子ども用から大人用を持っていてどうせ着ないから、それと試しに着せてみたら細身の体にぴったり合っていたとのことで採用。

それと、女装するからには侑治郎以外の4人が色々な面と徹底した。ある意味方法を間違えれば拷問になる無駄毛処理は、侑治郎が水泳をやっており、水の抵抗をなくす為にも常日頃から剃っていたから行われなかった。が、仕草の面は成佳と紗弥菜を筆頭に叩き込まれた。化粧は、侑治郎自身がやるのでないから、特に教えなくてもいいのだが、一応享受していた。そして本番のこの日は、紗弥菜のような髪の長さ・質のかつらをつけ、化粧もしっかりと施された。眼は完全な一重ではないが、それに近いものだったのでアイプチを使用した。これにより、割と整った顔立ちだったこもあってなかなかの美人に仕上がった。ただ、常人より広い肩幅がネックではあったが、当然胸にはブラジャーをつけており、質感を出す為に詰め物を入れている。

「ここに辿り着いたからには、生かしちゃおけないね。あたくしが直々に倒して差し上げるから、かかってらっしゃい」

因みに、侑治郎は声を一切出してない。ではどうしているのかと言うと、袖で成佳が台本を読んでいるのだ。これは成佳がやってみたかったのこと、侑治郎が無理して甲高い声を出さないようにする為の配慮である。高飛車な女性を像としたのだろう。きいきい声に近い声質で普段は決して出さない声を、成佳は表情崩さず平然と演じている。侑治郎が口パクと動きを担当し、今のところ見事に機能していた。もつとも、これができるようになるまでは、相当な苦労があったらしいが。

響子　侑治郎　は、挑発的に腕を前に伸ばして掌を上にする
と、親指以外の指を2度ほど一斉に折った。

かかってこいと誘っているのである。

憤激した金太郎は、鉞を両手に持つと一気に駆け出した。

「くたばれっ！」

鉞を振り下ろす。しかし、響子に当たることなく、何か当たって跳ね返された。金太郎は元居た所まで、転がった。

「大丈夫!？」

「金太郎、大丈夫か？」

桃太郎と浦島太郎が金太郎を起こしながら、心配そうに声を掛ける。

「何のこれしき。大丈夫だ！　しかし、確かに叩き斬ったはずなんだけどな」

「ある一定の力であれば防げるのよ。ま、貴方達に倒されるようなやわなあたくしではありませんわ」

響子は耳にいつまでもへばりつく哄笑を発し、更に挑発に挑発を重ねる。

「くっそ、言わせておけばっ……！」

「金太郎さん、落ち着いて！」

今にも突貫しそうな金太郎を、桃太郎が後ろから脇の下に手を通して、ぐっと引き寄せる。

「浦島太郎さんも落ち着かせて下さいよ！」

悲鳴のような叫びを挙げて、浦島太郎を振り仰ぐ。

「む……ああ、すまない」

顎に手をやって思案していた浦島太郎が、金太郎の頭を上からがしつと掴んだ。その時、にわか愁眉が開かれた。

「良い案を思いついた。敵にはれないように円陣を組もう」

3人が輪になり、浦島太郎がひそひそと策を披露し始めた。

「あらあら、相談？　貴方達の浅知恵があたくしに通用するのかしら」

そして、尾を引く喉に負担のかかりそうな嘲笑を響かせる。

対して3人は誰も反応しない。

響子は、面白くなさそうに軽く舌打ちをして、せわしく扇子を扇ぐ。

「ふんっ。まあ、いいわ。次の攻撃であたくしを倒せなければ、貴方達はその血の池に落として差し上げますから、せいぜい覚悟なさい」

騒音になりそうな高笑いを挙げていると、3人がこちらの方に体

を向けた。

「じゃあ、行くぞ。必ずや奴を討ち取る。いいな」

「はい！」

桃太郎は、太刀を抜き放ち敢然と構える。

「心得た！」

金太郎も鉞を頭上で1度回し、構えた。

浦島太郎の左右に居た金太郎と桃太郎が、先陣を切って駆け出す。2歩ほど遅れて浦島太郎が鉞　　と言つても本物は危ないので、代用のマジックハンド　　を構えて突貫した。

「たあああつ！」

桃太郎が地を蹴つて、高々と飛び上がる。

「うおりやあああつ！」

金太郎は、足から滑り込んで振りかぶる。

「ほう、考えたわね。時間差攻撃とは！　でも、考えが大甘の甘ぢやんだわ！」

1歩逃げようとせず、堂々と2人を迎え討たんと、妖艶さが滲み出た笑みを閃かせる響子。

桃太郎の大気を切り裂く太刀が振り下ろされ、金太郎の頭の後ろにあつた鉞の刃の部分が、勢いを持って襲い掛かる。

「2方向なんてまだ防御できる範囲よ！　やつぱり、あたくしの勝ち　　」

すると、間に合わないと思つていた浦島太郎の鉞が伸びてきて、響子の腹部を直撃したと同時に、肩先と脛に形容しがたい激痛が奔^{はし}つた。

「ぎゃあああつ！」

断末魔の叫びとともに、響子は血の池地獄に落ちて絶命した。

「よっしゃ　　っ！　倒したぞ　　っ！」

「やりましたね！」

「ああ、よくやったな！」

3人が歓喜の声を挙げて飛び回る。

と、飛び回っている最中、足裏に違和感を感じた金太郎。踏んだ物を拾ってまじまじと見つめる。

「何だ？ この鍵。おーい、2人ともこんなのを拾ったぞ」

鍵が視界入った途端、浦島太郎の目の色が変わった。金太郎のもとへ素早く走ると、頭を下げながら言う。

「すまないが、貸してくれ。なに、すぐ返すから」

気迫に押されつつも不思議に思った金太郎は、鍵を渡して問うてみる。

「いいけど、どうしたんだ？」

「玉手箱を開けるんですよ！」

桃太郎は興奮を隠せないようだ。

がちゃつと施錠を解除する音が鳴った。

「2人とも開けるぞ」

浦島太郎の声もまた昂揚で震えていた。

返事をする代わりに生唾を飲み込む2人。

「そらっ」

玉手箱を開けるや、白く濃い煙が辺りを包んだ。時の間に照明が消えて、何かが積まれる音が響く。その音が終わると、照明が点いた。

「なーんだ、何にも入ってないじゃん」

「そうですね……」

「おかしいなあ……こんなはずじゃ……」

首をひねる。ふと、えも言われぬ何かを感じ取り、浦島太郎は顔を横に向ける。

「ああ……あ　っ！」

顎を外さんばかりに絶叫して、両手を後ろについた。

「何だようるせえな……あ　っ！？」

浦島太郎と同じ格好になる金太郎

「もっ、煩いですよ。そんなに驚くことが……あ　っ！」

桃太郎も無論同様である。

何故驚いているのか。

それは3人の視線の先には、うずたかく積まれた金銀財宝が、煌びやかに存在を誇示しているからだ。

3人は財宝に我先にと近付き、触ってみる。

「おおおっ！ 全部本物だ！」

「やった！ やりましたね、浦島太郎さん！」

「ああ、2人が頑張ったからだよ。2人にも感謝だけど、乙姫様にも感謝しなければな。鬼を倒して財宝を得て……何だか生きていく勇気が湧いてきたよ」

その後は全体を映す照明が消え、代わりにスポットライトが財宝をばら撒いて喜ぶ3人に当たった。それも徐々に消えて行く。完全に消えたところで、後半はナレーションに代わった成佳の口が開く。「こうして桃太郎と金太郎と浦島太郎は、財宝を手に入れて平等に分け、それぞれの故郷で幸せに暮らしましたとさ。めでたし、めでたし」

観客達の拍手が体育館中に鳴り、天井に反響して耳を聳^{さう}するほどだった。園児達も喜んでいるのだろう。甲高い声を撒き散らしている。

照明が点^{とも}つて成佳と侑治郎が袖から出てきて、真ん中に並んだ。その中で恥ずかしいような嬉しいような面持ちで、5人は深々と頭を下げた。

「終わった　っ！ 私は自由の身だ　っ！」

爽奈が両手を突き上げ、喜んでいる。

「本当、すっごく緊張したね」

胸を撫で下ろした真優は、緩みきった笑顔をみなに振りまく。

「全くだ。でも、やりきった感はあるよな」

伸びをしつつ、侑治郎も満更でもないみたいだ。

「そうね。とにかく、無事終わって何よりだわ。それと、侑治郎はとりあえず化粧を落としなさい。肌が傷むわよ」

紗弥菜は、化粧落としのオイルとコットンと化粧水を渡す。

「そうなのか。じゃ、着替えついでに落としてくるわ」

ステージの裏から出て行く侑治郎。

「あれ？　そういやー、なるさんは？　どっか行っちゃったの」

爽奈の疑問に辺りを見渡すと、確かに成佳がいつの間にか居なくなっている。

「本当だ。どうしたんだろう？」

真優は、首を横に倒して不思議がる。

「多分、お手洗いにでも行ったんじゃないの。そのうち帰って来ると思うけど、珍しいわね。何も言わずに行くなんて」

言って、引っ掛かりを覚え、何となく髪を掻き揚げる紗弥菜。

結局、成佳が戻ってきたのは最後の班の劇が終わる頃だった。

爽奈があれこれ訊くも、表情は普段と同じく優しげだし、特に変わった様子もなかった。

しかし、若干の態度の違いに、成佳を除く3人は薄々気づいていた。

17章……別れ道

「かんぱーい！」

爽奈の音頭で4人のグラスが上がり、それぞれ労をねぎらうように各自軽く当てていき、一通りそれが終わると中身をおろす。

「ぶは　っ！　いやー、みんな今年もお疲れ様でした！　年内に進路も決まって良かった良かった」

一瞬のうちに飲み干した爽奈は、1.5リットルのジュースのペットボトルに手を伸ばしながら、大笑する。

真優も喜色を面に表し、首肯する。

「そうだねえ。一般企業なんかは冬の時代、”土”の就く職業が有利だけあって私達はいいけど。大学に行って、すっかり疎遠なつちやった友達は大丈夫かなあ……」

最後の一言は眉を曇らせ、視線を宙に彷徨わせた。

「大丈夫だよ。きっとそのうちアメリカが本気出して、あつと言う間に景気が良くなるよ！　……あんまり分かんないけど」

紗弥菜が呆れた眼つきで、爽奈をじろりと睨む。

「いい加減なことを言うもんじゃないわよ」

非難は一切受け付けられないらしい。飛んできた視線を完全に無視しつつ、爽奈は隣に座っている成佳に寄りかかる。

「でもさ、なるさんの方がもつと厳しいよね」

切ったサンドウィッチを取り分けていた成佳が、動きを止めてそうねえ、とつぶやく。

「かなり狭き門って、講師の先生から耳にたこができるくらい聞かされてるわ」

成佳のお手製のコーンポタージュを、スプーンですくって飲もうとした侑治郎が、手を止めて意外そうな顔で訊く。

「よく知らないんだが、そんなに厳しいのか？」

「うーん、確か……志望者は毎年2000人以上は居るんですけど、デビューができて尚且つプロダクションでちゃんと所属できる人は、1割居るか居ないかぐらいとか言っていました」

「そ、そんなに少ないのか……声優ってのは大変な稼業なんだな」

心配そうにしている侑治郎を、安心させるかのように莞爾と成佳は笑う。

「でも、私は後悔してませんけどね」

成佳が声優を本格的に目指そうと志したのは、5月の卒業生講演会で成富果穂のスピーチを聞いてからだだった。もともと声優になりたいという気持ちはあった。だが、自身の身の丈に合っていないとして、諦めていたのだ。

その日以来、人知れず資料を集めたり調べたりして、他の4人には内緒で事を進めてきた。ゆえに、文化祭の劇については好機だった。声あてを行うと意見を言ったのは、文化祭の時に関係者に来てもらい、声を聞いてもらいたかったからである。だから、爽奈が志望事務所の履歴書とメモリースティックを見つけた時には、大層胆が冷えたそうである。翌日、封筒に入れて送って返事が1週間経ったほどに返ってきた。行くとのことだった。

かくして劇が終わった後、関係者と密かに会った。関係者は、成佳の声域の広さと演技力を買って、事務所の附属の養成所に入所する際は斡旋するとまで約束。成佳はその場で二つ返事で了承した。あらかじめ両親・担任・学長（一応）と就職が決まっていた野瀬私立保育園の園長の鍋島加代子に話をつけていたのだ。

両親は、娘の人生なのだから本人の自由にさせる、との考えを持っている。成佳の告白を聞いた時は驚きはしたが、反対することなく承諾した。

担任は説得はしたが説き伏せられ、学長に至っては諸手を上げて賛成した。なぜなら、有名になったらなっただと思う存分に宣伝してもらえる、と思っっているからだ。

加代子は流石に難色を示した。しかし、成佳の話を聞き終える頃

には理解を示し、賛成した。

最後に4人にも告げた。爽奈と真優は、声優に多少なりとも理解があるから素直に祝福した。紗弥菜と侑治郎は渋い顔だったが、話を聞いて納得し、友人の門出を喜んだ。

当たり前だが今通っている専門学校は卒業する。成佳自身、保育士と幼稚園教諭の資格は欲しいし、様々な人達に迷惑をかけてしまったことに対し、筋を通す意味でも絶対だった。

養成所の入所はほぼ確定ながらも、準備は怠らない。3月に選考試験が行われるまでの間に、やることは沢山あるのだ。今は独自の練習方法で声の演技力を高めたり、発声練習で歌唱力を向上を目指したり、演劇を学んだりしている。

なお、入学金や授業料は全て自己負担することになっていた。両親は出すと言って聞かなかったが、成佳は頑なに拒んだ。それゆえ、人生で初めて交通誘導とコンビ二のアルバイトを始めた。交通誘導は、時給が1000円を超える上に、土日限定でも構わないのことから。コンビ二は、爽奈の斡旋。侑治郎も勤めている『ドーソン』に週3で入っている。

結果、週5日は専門学校に行きながらバイトや自主練を行っていることから、成佳は多忙な日々を送っていたのだ。

しかし、成佳は後悔していないと言う。実際、初めてのバイトにもすぐに順応、新鮮味があるのか楽しくやっている。

爽奈が駄々っ子のような口調で言う。

「あー、早くなるさんの出てるアニメ観たいなー」

恐れ入った表情で爽奈の顔を凝視する紗弥菜。

「馬鹿ね。そう簡単に仕事が取れるわけじゃないじゃない。製作側は声のイメージを重要としていて、合わなかったらすぐに切り捨てられるんだから」

紗弥菜の言葉に、鳩が豆鉄砲を食ったような顔付きになる爽奈。

「へえー、やっぱあんなたって、知識を取り入れることに関しては貪欲なんだねえ。いつの間に知ったの?」

「煩いわね。金欄きんらんの友の職業ぐらい知っておくでしょ。普通」
やや照れながら言った紗弥菜に、成佳はふわっとした笑顔を向ける。

「金欄の友だなんて、嬉しいわあ。流石、紗弥菜ちゃんは博識ねえ」
「あ、ありがとう」

すっかり照れてしまった紗弥菜は、眼鏡のブリッジを指で上げ下げしている。

そんな紗弥菜を嘲笑せんばかりの笑みを口元に表しつつ、真優に話題を振る爽奈。

「そういえば、まゆっちも就職先を変えたんだよねー」

「うん。果穂さんと晋之介さんが働いてる野瀬児童館内にある野瀬学童クラブで働くんだよ」

学童クラブとは……小学校の児童の保護者が仕事等で居ない時、代わりに預かってくれる保育施設のこと。その施設には指導員があり、仕事内容は授業が終わって放課になった児童と遊んであげたり、おやつを与えたり、宿題を見てあげるなどである。因みに、長期休暇中だと午前中から1日中預かることもある。

もともと真優は保育園もそうだが、こちらの学童クラブにもボランティアに行っていた。そこで働いていた1年先輩（侑治郎にとつては年齢的に同期）の成富果穂にかなり気に入られていて、行く度に一緒に働こうと乞われていたのだ。ただ単に年下の後輩が欲しかっただけかもしれないが、真優の気持ちは揺れに揺れていた。そして、文化祭が終わって1週間経ったほどで結論を出し、保育園ではなく学童クラブに就職することに決めた。

当然、内定が決定していた保育園には申し訳ないのですが、とお断りを入れた。勿論だが、園長の加代子の所にも赴いて口述してきた。

加代子は、成佳の時とは違って難色を見せることもなく、快諾した。何しろ児童館の館長も兼任しているのだが、ベテランの指導員が2人も辞めてしまうので人材不足を懸念していたからだ。それが

故に、むしろ心強く思ったからである。

加代子の鶴の一声で真優の就職先は、あれよあれよと言う間に変更の手続きが完了してしまったのだった。

「果穂からの勧誘が相当しつこかったそうじゃないか。失礼だけど、本当に良かったのか？」

侑治郎はその点が心配だった。真優の意思ではなく、果穂の意思で無理矢理変更させられたのではないか、と感じていたからである。真優は屈託なく相好を崩す。

「それだけ頼りにされてるって思えば嬉しいものだし、学童クラブは学童クラブでのやりがいを見出せたからね」

「そうか。それならいいんだ」

本人の意思とあれば何ら問題はない。侑治郎が内心ほっとしていると、爽奈が膝を叩いてきた。

「何だよ」

お返しとばかりに指で頬をつついた。幼子のような滑らかな餅肌でぷにぷにとしており、触っていて気持ちがいい。

「そっちこそ何だよー。人が祝ってあげようと思ったのにー」

不機嫌そうに頬を膨らます爽奈。

5人の中では侑治郎が、最も多忙な日々を送ってきたと言える。

卒論・就職活動・2つ掛け持ちしているバイト……それらを同時進行で1ヶ月間こなしていたのだ。

夏休み頃からこつこつと執筆していた卒論は、ボランティア経験が少ない侑治郎にとつて、どうしても書かねばならなかった。しかし、入り用も重なったことから金銭的に厳しくなり、その話を聞いた爽奈の誘いで、コンビニのバイトを始めた。すると、結構忙しく滞ってしまっていた。文化祭終了後からコンビニのバイトの日数を減らし、執筆を再開していたのである。

就職活動はそもそもなくてもよかった。保育園附属のスイミングクラブのバイトと、週数回のボランティアで、十二分に加代子から高評価を得ていたからだ。

加代子は縁故で侑治郎を採用しようとした。

だが侑治郎は、それでは普通に受験する人に悪いと自身も受験すると言い出した。

何度諭しても無駄だったので、加代子はやむなく認めた。

11月中旬には一次試験が行われた。内容は小論文と面接である。因みに、採用する人数は3人だったが、当日集まった受験者は50人も居た。設備が充実しているだけあって、当然とも言える倍率の高さであった。

1週間後に結果が届き、見事に一次試験を突破。12月初旬に二次（実技）試験を行う旨が書かれた書類を見て、侑治郎は急ぎ課題制作に取り掛かった。

これには他の4人も協力した。絵は爽奈と真優が、物語の作成は紗弥菜と成佳とともに卒論と同時進行ながらも、栄養ドリンクとコーヒーをがぶがぶ飲んで精根尽き果てる一歩手前になりかけたが、二次試験2日前には全て完成した。

卒論をさっさと提出し、ひたすら課題である言語の口演の練習を開始。そこであまりにも演技力のなさに、心肝でははらわたが煮えくり返りそうになった成佳が指導し、ある程度身に付けることが叶った。

二次試験は総勢10名。侑治郎は、6番目に発表することを試験官から伝えられた。中途半端な順番だったが、本番は練習の甲斐もあって、よどみなく処々に感情を込めて読む事が出来た。

そして、結果の通知がつい先日届いた。結果は、血反吐を吐きそうになりながらも頑張った甲斐あって合格だった。

「ああ、そうなのか。そりゃ、すまん。で、どんな方法で祝ってくれるんだ」

侑治郎は、ばつが悪そうに頭を掻く。期待と不安を込めた瞳の中に、爽奈の童顔を映す。

「じゃあ、ちよっと眼をつむっててくれる？」

「いいけど……何をするんだ？」

「質問を質問で返さな―い！ いいから、さつさとつむる―！」

「はいはい……」

嫌な予感はあるが、取り敢えずは従った侑治郎。
ぴと。

何かが侑治郎の唇に当たり、爽奈と侑治郎以外の3人はとっさのこと
ことで声が出ずに、傍観しているだけだ。

（な、何だこれは！？ も、もしかして……）

程好い弾力に心地よくなる。何十秒かそのままだったが、一向に
離そうとしないので、つい好奇心で薄めを開けて口元を窺う。確か
に唇と唇が重なり合っている。が

「ん な っ!？」

奇声を張り上げ、頭を振って振りほどき、驚愕を顔に貼り付けて
後ずさる。

「たた、た、たた、た、た……たこ っ!？」

侑治郎が指し示す先には、爽奈が赤々としたたこを両手で持って
いた。

「はははは、見事引っ掛かったね！」

爽奈は爆笑を部屋中に響かせた。

「お前……そりゃ、ないだろ」

目じりが裂けんばかりに見開かれた眼を、侑治郎は爽奈に呆然と
当てる。

「まあまあ、気にしない気にしない。さ、今日は朝まで飲み明かそ
っ!」

侑治郎の言葉など一切耳に入っていないのだろう。爽奈は、嬉々
とした顔でコップを高々と持ち上げ、叫んだ。

「……人の話を聞けよ」

侑治郎の消え入りそうな独語が、口内にむなしく響いた。

18章……雪国はこんな感じですよ

「ふうー、やっと終わった　　っ！　私は自由だ　　っ！」

大きく伸びをしながら、快哉を叫ぶ爽奈。

「さつきから何回言ってるのよ。もういい加減聞き飽きたわ」

紗弥菜は煩そうに言った。もう辟易といった感じである。

「でも、最後の試験だったし、達成感と開放感が今まで以上に凄くあるよね」

真優がしみじみと撃破してきた試験を、頭の中で巡らす。

「そうねえ。これで試験が終わると思うと、嬉しくもあるし、寂しくもあるわ」

笑顔の中に寂しさを滲ませて、成佳は頷く。

「それもそうだけど、落としてないか不安だよな。最後の最後に再試は、流石に嫌だよな」

侑治郎の話聞いていた真優と成佳が、もっともだと言わんばかりに首肯する。

せんべいをぼりぼりと音を立てながら食べていた爽奈は、呆れ気味に言う。

「そーそー、やだよ。でもさ、クラスの中では毎回誰2教科以上落として、涙目で再試を受けてるなんて奴も居るしね」

爽奈の答えに違和感が生じた紗弥菜。持っていたポッキーを指の代わりにし、斜め向かいに座っている爽奈にチョコの付いている方を差し向ける。

「それはあんたのことでしょうが。私達が一生懸命教えてるのに、理解しないなんておかしいわよっ！」

爽奈も負けじと手に持っていたポッキーを口にしようとしたが、一旦中断していちこのムースが付いている方を紗弥菜に差し向ける。「しっつれいな！　私は毎回落としてたのは1教科だけだったの！

……あと、違うところがあるよ。まゆっちとなるさんは良いんだ

よ。でもねえ、あんたの教え方が上からものを言ってるみたいで憶えれないの」

「またあんたは自分のことを棚に上げる。それだから、再試を受けるはめになるのよ」

紗弥菜は肩をすくめ、差し向けていたポツキーを口の中に入れた。
「むむつ。そういうあんたは」

最後の定期試験が終了し、5人はしばらく平穏な日々を過ごしていた。講義は1月の中旬に終了し、あとは試験の結果次第で約2ヶ月間自由に過ごせるかどうか決まっているので、待機の状態が続いている。

因みに、ボランティアを2年間で100日間行えば卒業論文は免除される。なので、侑治郎以外の4人は書いていない。

「ん？ 誰だろ」

爽奈の携帯から軽快な音楽が聞こえてくる。携帯を開き、メールの文面をしばし黙読する。

「誰から？」

真優が何気なく訊いた。

「んー？ とーちゃんから。何か叔父さんから蟹を沢山貰ったから、食いきれないから友達を誘って今すぐこっちに來いってさ。と、いうことで蟹が好きな人、手え上げてー」

爽奈の呼びかけに、一も二も無く紗弥菜以外の3人は挙手した。

「あれ、あんたって蟹嫌いだったんだ」

「そうじゃないわよ。むしろ好きな方だけど……初対面の私達が、いきなり蟹をご馳走になってもいいものなの？」

少しこうじた様子で紗弥菜は質問した。

爽奈は屈託なく笑う。

「別にいいんじゃない。美味しい物はみんなで食べた方が美味しいね。細かいことを気にしたら、食べれないよ」

「そういうものかしら……。それじゃ、お言葉に甘えようか。おす

そ分けのお礼も言いたいしね」

「そうね。爽奈ちゃんのお父さんには、間接的とは言え大変お世話になったもの。何かお土産を持って行ったほうがいいわね」

成佳の言葉に爽奈を除いた3人が、三者三様に首肯する。

「だとすると、何を持って行ったほうがいいんだろうか？」

3人を代表する形で爽奈に質問する侑治郎。

爽奈は若干嘆息を混じらせつつ、首を横に振った。

「だーかーらー、そんなに気を遣う必要ないんだって。手ぶらで結構。それに」

口を一旦つぐんで面映そうに笑みを作り、人差し指で頬を掻きながら、言い辛そうに口を開いた。

「私もみんなにはさんざんつばら迷惑かけたし、何と云うかその…

ほら、お礼みたいなもんだよ。だからさ、わざわざお土産なんて買う必要なんてないの。あとね、私は一秒でも早く蟹を食べたいの！

お土産を買う・買わないなんか言ったら、とーちゃんと光樹（こじき）に食べられちゃうよ！」

お土産の件では、知らず知らずの内に少し口調に怒気も入っていた。

”光樹”と言う名前を聞いた途端、爽奈と侑治郎を除く3人は懐かしそうな顔になった。

「そうだね。こーちゃんの食欲たるや、凄まじいものがあつたよね」

「全く。爽奈と真優も食べる方だけど、流石は男の子って感じの食べっぷりだったわ」

「今年の夏は来なかったけど、元気にしてるかしらねえ」

口々に光樹について述べる3人。どうやら、光樹に対する悪い印象は一切ない様子だった。

「ちよつと待った。光樹って誰だ？」

光樹について何も知らない侑治郎が渋面を作り、訊ねた。

「ありゃ、言ってなかったつけ。私の可愛い可愛い弟だよー」

「へえー、弟が居たのか」

「歳は8ぐらい違うけどね。でもさ、歳が離れた分可愛くて仕方がないんだよねー」

嬉々として弟・光樹について語る爽奈の眼は、夢を語る少女のように煌いていた。

爽奈の溺愛っぷりにいささか呆れた侑治郎。しかし、同時に興味に惹かれた。

「さいですか。そこまでべた惚れしてるなら、会ってみたいな。たまには同性と話したいし」

爽奈は、満面に笑みを閃かせて促す。

「ほらほら、みんなも会いたいでしょ？ 光樹もきつと楽しみにしてるよ。だから、早く支度をしてさっさと行こうよ」

それもそれだ、と4人は立ち上がって「また後で」の一言を残し、部屋から出て行った。

「何だこの門は……」

やっと出た言葉だった。それまで侑治郎は、あんぐりと口を開けたままその場に立ち尽くしていた。

視線の先には10メートルはあるうかと思われる木製の門が、そびえ立っている。門扉もどうやって加工したものが大きく重厚そうで、とてもじゃないが、人ひとりの力では開けられそうにはなかった。

他の3人も一様に驚いた表情だ。話は爽奈から何回か聞いていたが、まさかここまでとは夢にも思っていなかったのである。

しばし茫然としていた侑治郎だったが、ふとつぶやき始める。

「俺の実家も農家だけど、どんだけ田んぼ持ってたらかんな門が出るんだか……」

「とーちゃんの話では、ご先祖様が相当苦労した人だったんだって」「凄まじい苦労人だな。……で、どうやって入るんだ？」

門扉には取っ手こそ付いてはいるが、全員が力を併せて開けようとしても、びくとも動きそうもなかった。

「今日はとーちゃんが有給休暇を取って休んでるから、合言葉だね」
「は？」

侑治郎が頓狂な声を発したのと同じ頃に、爽奈は門に備え付けられていたインターホンを押した。間もなく、

『どちらさまです？ 眼鏡に続く合言葉をどうぞ』

と、低く落ち着いた男声が耳に入ってきた。

「娘は最高」

『おお、その声と答えは爽奈だな。よし、今開けてやるから待つてろよ』

数十秒の間があり、門扉がぎぎぎ、と軋む音と共に大きく開かれた。

「それじゃ、みんな入るよー」

いつの間にか自分の荷物を持っていた爽奈は、先陣を切って門の中に入って行った。

「ちよつと、爽奈！ 待ちなさいよっ！」

4人も慌てて荷物を持って、追いかけるのだった。

新幹線で2時間、バスで1時間、徒歩で30分。それが爽奈の実家までの道のりだった。爽奈がど田舎と言つてとは言え、バスを降りてからが大変であつた。なんせ、この時期晴天が続く5人が住んでいる野瀬市とは全く違うのだ。

まずは雪が降っているせいか寒い。訊けば二桁どころから5度に達しない日も多々あり、雪が全く降らない都会育ちの紗弥菜と真優と侑治郎にとつては、生き地獄にしか思えなかった。

次に、爽奈の実家の田舎は深々と雪が降りつもり、見渡す限り建物も樹も何もかもが雪色に染め上げられている。

積雪量は、申し訳ない程度に少しだけ降って終わる野瀬市とは違い、大人ひとりの膝下まで埋まる程であり、何をするのにも難渋する。しかしながら、人通りが少ない所ならともかく、車の往来がある道路は除雪車と消雪パイプよって除雪されているので、移動の不

自由は特にない。

だが、消雪パイプから出る水の量が尋常じゃない箇所もあるもので、消雪パイプで融けた水と消雪パイプから出た水が相まり、冬の道路は常時まるで大雨の降った後の状態になってしまうのだ。

当然、車が通れば水が跳ね上がる。歩道を歩いていようと、容赦なく水がぶつかかることもある。それについては爽奈は、説明済みだったので対策もばっちりだった。しかし、靴の方の対策はばっちりではなかったため、爽奈と北方の雪国出身の成佳以外の靴は、爽奈の家に着く頃にもなると雪と水のせいで、ぐちょぐちょになってしまっていたのである。

やっと暖を取る事が出来るので、ほっと安堵の息をつく4人。特に成佳を除く3人は、靴が濡れ、靴下も濡れ、足までもが濡れて身体の芯の芯まで冷え切っていたので、安堵の息も大きめだった。

雪を払って玄関に入ると、そこは既に普通の暖房が点いている部屋並みに暖かった。

そこに、早くも部屋着に着替えてエプロンを身に付けた爽奈が、廊下の最奥の部屋から飛び出してきた。

「みんなー、こっちこっち。この部屋の手前の部屋で着替えるんなら、着替えて。洗濯かごがあるから、濡れた物はそこに入れて下さいなー。あ、侑治郎は光樹の部屋を使ってね。部屋は2階にあるから。あー、あと玄関マットの近くにタオルがいつぱいあるからそれを使ってもいいよー。えーっと以上かな。……いや、あともう1つあった！ 着替え終わったら、侑治郎以外のみんなが着替えた部屋の隣の部屋に入って待ってて。今度こそ以上！ んじゃ、私は料理の準備があるんで」

立て板に水とはこのことだろう。そう感じさせるような指示を一方的に出すと、爽奈は奥の部屋に引っ込んでしまった。

4人は圧倒されたらしく、しばらく金縛りにでもかかったかのようにな動けなかった。

「とりあえず、爽奈ちゃんの言った通りしましょうか」

いち早く頭の中で処理し終えた成佳が、タオルで頭とジャンパーを拭き始めた。

3人もそれぞれ汚れや濡れた箇所をタオルで拭いていく。やはり、足は血が通ってないせいか青白く、靴下越しても水に当たっていた為に、長時間浴槽に浸かった時みたく皮膚が皺だらけになり、ぶよぶよになっていた。

「うわぁ……凄いいことになってる……」

靴下を脱ぎ、タオルで拭いた足をまじまじと凝視する真優。

「私も。これって直るのかしら……?」

紗弥菜も初めて見たのだろう。困り切った声音で言っつて、足の裏を指でつついている。

「心配ないって。時間が経てば元に戻るさ。俺なんか水泳をやってるから、しょっちゅうそうなるぞ」

侑治郎が苦笑いしつつ、2人を励ます。

「さて、と。俺は2階に行くわ。靴下を履いて来るだけだから、すぐに戻ってくるけどな。じゃ、あそこの部屋で」

廊下を歩いていくと、中ほどに行った所の左側に階段があったので、ためらいもなく登る。

その後3人も、爽奈に着替えるようにと言われた部屋に行き、荷物を下ろして今度こそやっと一息付けたのだった。

19章……爽奈と言う存在

そこには山盛りの蟹があつた。暗赤色あんせきしよくだつた体色は、茹でられたので今や赤々とした色となり、圧倒的な存在を誇示している。種類は冬の味覚として人気を誇るズワイガニである。

他にも、茶碗蒸しやら炒飯やら刺身やらサラダなどが並び、華やきを見せている。

本来なら全部爽奈が調理する予定だったが、おびただしと形容してもいいぐらいに、ズワイガニが台所に所狭しと放置されていたので、成佳と侑治郎も手伝う事にしたのである。

紗弥菜と真優は、前者がからつきし駄目で後者はそんなに出来ないで、料理や皿や箸等の運び役に徹した。

完全に終わったのが午後5時だったから、少し早い晩御飯時になるかと思われた。しかし、爽奈の父親と弟の光樹が不在の為に、好き勝手食べる訳には行かなかった。

そして今、1時間経って午後6時に時計の長針が指し示そうとしていた。その間5人は出来上がった数々の料理前に座り、凝視・沈黙の態を保っている。まさに蛇の生殺しであつた。

誰かのか細く空腹を告げる音が鳴り、静寂によく通った。

「もー、とーちゃんも光樹も何やってんだらう。料理が冷めちゃうよー」

その音を契機と捉えたのか、沈黙と空腹に耐え切れなくなり、爽奈は眉を困らせてぶうたれる。

「本当ねえ。道路が混んでるのかしら」
成佳がたちまち心配顔になって言った。

その時がらがらと戸が滑る音が玄関先から鳴り渡った。次いで、床を強く踏み鳴らす音が聞こえたと思えば、突然ふすまが開かれた。反射的にみな視線が集中する。

「ようこそいらつしゃいました。そして、ご無沙汰してます」

そこには正座をし、仰々しく且つ折り目正しく体を曲げ、指をついて挨拶する野球のユニフォームを着た少年が居た。

「では、後ほど。こんな格好で失礼致しました」

すくつと立ち上がると、一礼をして辞していった。

「……今の誰？」

少年の若年ながらも礼儀正しい挨拶に驚いた侑治郎が、感心したように爽奈に問うた。

「今のが光樹だよー。結構可愛い顔してたでしょ？」

答える爽奈の面輪が自然と誇らしげになる。

「ん？ ……ああ、どちらかと言うと女性寄りの顔だった気がするな。髪は俺より短かったけど」

「でしょー？ あーあ、このまま声が高いままでいてくれればいいんだけど、どうにかして第二次性徴を止められないのかなー」

「さらつと危険なことを言うな」

そんな会話をしていると、階段を小気味よく駆け下りる音が聞こえ、一拍間をおいて普段着に着替えた光樹が部屋に入ってきた。

「光樹　っ！」

すかさず爽奈が押し倒さんばかりの勢いで抱きついた。

「お、お姉ちゃん……抱きついてくれるのは嬉しいんだけど、みなさんが見てるし……」

弱りきった声をあげる光樹に、爽奈はにかつと仰ぎ見る。

「むしろ見せつけてんのっ。そんなに恥ずかしがるなよ」

腕を伸ばしてぽんぽんと光樹の頭を軽く叩く。

何も知らない人から見れば、この光景は調子の良い妹が常識人の兄を励ましているように見えるだろう。実際は反対なのだが、十中八九は信じられないと言うに違いなさそうだった。

「にしても、あんたまたでっかくなったねー。なるさんと同じくらいじゃないの？」

「ええー、どれどれ」

成佳が光樹の隣に並んだ。しかし、まだまだ成佳の方が若干高く、

見下ろす感じであった。

照れ笑いをしつつ目線を成佳に移す光樹。

「ようやく160cmなので、当分は成佳さんを超せませんよ」

「あら、そんなことないわよ。ねえ、紗弥菜ちゃん」

振られた紗弥菜は、得たりとばかりに顎を引き寄せる。

「そうよ。光樹はまだ小6なんですよ？ 運動もちゃんとやってるみたいだし、余裕で私達を超えるわよ」

羨望の眼差しを送る真優。

「私もこーちゃんぐらい欲しかったなあ……」

「ありがとうございます。真優さんは今のままで充分魅力的ですよ」

「えーっ、そんなことないよ」

などと言いながらも、満更でもないのか隣席の侑治郎の背中を、照れ隠しでばんばん叩いている。

ふと、光樹が訝しげな表情になった。どうしても、見慣れない人物の存在が気になるらしい。

「ところで……お姉ちゃん。真優さんの隣に座っている方って、どちら様なの？」

光樹のスポーツ刈りの頭を触っていて、恍惚としていた爽奈が視線の先を追う。

「あー、紹介すんの忘れてたね。あちらさんは、円城寺侑治郎。私よりも1歳年上だけど、ダブったから同学年になったんだ。あんな形^{なり}だけど、なかなかの良い男なんだよ」

すると、たちどころに光樹の顔が真剣味を帯びたものになった。

抱きついていて姉を優しく引き離し、ゆっくり侑治郎の許へと歩み寄り、端然として座った。

「ど、どうも。お姉さんにはいつも世話になってます」

「いえいえ、こちらこそ姉がお世話になっています。と言うよりも、姉がご迷惑ばかりかけてしまってますいません。かなり子どもっぽい姉ですが、これからもどうぞ宜しく願います」

言い終えるや、うやうやしく頭を下げた。

「あつ、よ、宜しく願います。何もそこまで丁寧にならなくても……」

「いいえ。いずれは義兄・義弟の関係になるのですから、今から敬意を払って行かないと駄目だと思うんです」

脊髄反射的に侑治郎は、気になった言葉を聞き咎める。

「ん？ 『義兄・義弟』……？」

「え？ ……侑治郎さんは、姉とお付き合っていないのですか？」

お互いに疑問符を頭に浮かべ、眼と眼を合う。第三者から見れば、何とも間抜けな光景だろうか。

暫時、部屋一帯が水を打ったように静かになった。

頬が破裂せんばかりに笑声を溜めていて耐え切れなくなった爽奈は、とうとうぷはつと開口。大笑し始めた。釣られて他の女性陣もおかしいのか、部屋中に笑いを響かせた。

「ちよつとちよつと、光樹。私と侑治郎は恋人同士じゃないんだよ。

……そうだねえ、親友と書いて”とも”と呼べる関係かな」

「え……ほ、本当に……？」

「うんつ。まじで」

爽奈は爽快な笑みを湛え、明るく言い切った。

「……すすす、すいませんでしたっ！」

叫ぶように頭を尋常じゃない速さで下げ、侑治郎に謝る光樹。

「はははは、確かにいきなり知らない男が家に来たら、そう勘違いしてもおかしくないよ」

かぶりを横に振り、侑治郎は思う存分に笑い飛ばす。

「光樹くんはお姉さん想いなんだな。爽奈、良い弟を持って幸せじゃないか」

「そ、そんな……」

「そうでしょー。だって私の弟だもんっ」

恥ずかしそうに謙遜しているが嬉しそうな光樹に、相も変わらず平面のような胸を張って、鼻高々の爽奈。

と、突然すつとふすまが開かれた。開けた人物が、思わず後ずさ

る。

「おおつ、びっくりした。……爽奈の友人方だね。遠路遙々ようこそいらつしやったね。私は爽奈の父、江里口^{つねやす}常康です」

初対面組は、一様に頭を下げる。

穏やかな微笑みを満面に広げ、常康も一礼する。それから進み出てから折り目良く正座した。

「爽奈がいつもお世話になっております。光樹から聞いた話では、相当ご迷惑を掛けていたとことで申し訳なかったね。今日は私からのねぎらいの意味を込めて、蟹をたくさん食べてゆっくりしていつて下さい。ささ、冷めないうちにどうぞどうぞ」

すつくと立ち上がり、上座に座してテーブルの中央に据えて置いた鍋の蓋を取った。

爽奈はさつさと適当な場所に座り、他の面々もそれに倣う。

全員が座ったことを確認した常康は、おもむろに手を併せた。

「それでは、みなさんも手を併せて下さい。……頂きます」

念じるように言うと、爽奈も快活な調子で言う。

「いったきまーす！」

「頂きます」

「あ、い、頂きます」

光樹は四六時中父・常康と居ると言っても過言ではないので、特に動じもしなかった。が、4人はまさか今時分にきちんと挨拶をして頂くとは思っていなかったたので、箸を慌てて置く結果となった。

数時間後。

蟹に加えて酒も振舞われたので、酔いが五臓六腑どころか全身に染み渡った初対面組は、なかなか良い感じで出来上がってしまった。いた。なんせ、ほぼ全員20歳になったと言っのに、普段から酒を嗜む習慣が皆無と言っても過言ではない連中だったからである。

しかもアルコール度数の高い日本酒を飲んだことから、1合ほどの量の量で思考回路が吹っ飛び完全に幼児化した爽奈は、紗弥菜と

成佳の胸を揉むだけ揉みつくし、真優と侑治郎に抱きつき回るなど狼藉を散々した挙句、早々に寝たばってしまったのだった。

爽奈はこのように痴態を演じてしまったが、4人も結構危なかった。かろうじて正気を保っている状態でこれ以上飲もうものなら、その場に寝てしまいか、自分の中の誰かが騒ぎ出してしまいかもしれない。自分も爽奈みたいになったら……と、考えるだけでも粟が生じる思いに駆られる。そう思うと、しきりに勧めてくる常康をどのようにしてかわそうかが問題となる。しかし、そんな心配をする必要もすぐになくなった。光樹が上手く両者の間を立ち回って、酒の飲料を何とか許容量を超さない程度までに抑えられたからである。こうして現在、4人は酔い潰されることなく、かつかする熱くなつた頭を何とか抑えつつ、常康のいつ終わるか検討もつかない話を延々と聞いているのだ。

会った当初は、温厚そうな雰囲気を取りまいていた常康だったががしかし、酒の杯を重ねるごとに段々と温厚な笑みから豪快な笑みに変貌し、謙虚且つ丁寧だった態度もほぼ真逆なものとなってしまった。すっかり饒舌になり、自分のことや光樹のことを喜怒哀楽をふんだんに使って、まるで噺家^{はなしか}が戯曲を客に聞かせているようであった。

「おい、光樹。このコップに水を汲んできてくれ」

愉快そうにげらげら笑いながら、常康は光樹に命じた。

「うん、分かった」

間もなくして水が並々と注がれたコップを、光樹は常康に手渡した。

常康はそれを一気に飲み干すと、4人の顔をさっと見渡しつつ、おもむろに口を開いた。

「爽奈は……今も小さいけど、幼稚園に通ってた時から身長が低いほうでね。でも、その分ちよこまかと動いてなあ。まあ、快活に日々を過ごしていたんだよ。しかし、13年前に母親が死んでからは、しばらくの間は嘘のように大人しくなってしまった。」

いくら機嫌を取ろうとも、悲しげな顔を向けるばかりで情けない話、俺だけの手には負えなくて病院に連れて行こうとしたものだ。そんなことを思ってた次の日の朝、爽奈はまだ眠っていた俺の背中に乗っ掛かってきて、嬉しそうな声で『夢でお母さんが出てきたんだよ』と、言ってきた。爽奈の話では、笑顔を絶やさず人に優しくするように、と言われたらしい。その日から明るい爽奈が帰ってきて良かったんだけど、己の無力さを強く感じさせられたね。その後、家では年の割に結構元気一杯だったが、学校では年相応に落ち着いたんだろう。小学校では少しは落ち着かせて下さいだった通知表の担任の一言も、中・高ともなると見られなくなって、学校ではかなり自我を抑えているんだなって思った」

一旦口を閉じて唇を舌で舐める。そして、苦笑いを浮かべつつ言葉を継いだ。

「しかしなあ、光樹から聞いて驚いた。何しろ、去年帰ってきたこいつの開口一番が、『父ちゃん、大変だ。お姉ちゃんがぶっ壊れて幼稚園児みたいになってたよ』だから、一瞬言った意味が理解できなかった。だがね、よくよく考えれば、爽奈の年齢不相応とも言える有り余る元気が、いつまでも抑えられる訳がなかった。君達の人柄や雰囲気は凄く良いし、温かい。これは俺の憶測に過ぎないんだけど、多分、爽奈にとってやっと安息の場を見つけられたんだと思う。ただ、中・高の時に抑えていた欲求が爆発したみたいだから、君達には多大な迷惑をかけたことを親としてすまないと思う。……でも、本当に感謝している。きつと爽奈も素晴らしい親友が出来、一緒に過ごせて幸せな2年間だろう。寝顔を見るだけで一目瞭然だからな」

吐露しきって満足そうに1人頷いた途端、壁掛け時計からぼーん、と言う重低音が響いた。時計の長針は12を指している。

「おっと、長々とすまんね。さて、俺は先に休ませてもらうよ。歳のせいかな、もう眠くってね。それじゃ」

4人は会釈する。

「お休みなさい」

よつこらせ、と親父全快の掛け声とともに、立ち上がる。しかし、酒のせいもあってか足元がおぼつかない。

見かねた侑治郎と光樹が、ふらついて倒れそうな常康の体を支えた。力が全然入っておらず、ぶらぶらしている腕を2人はそれぞれの肩に回す。

「おお、わざわざすまんね。侑治郎くん、君は気が利くねえ」

「いやいや、そんなことはありませんよ」

謙遜しつつ侑治郎は、ふすまを開ける。

「侑治郎さん、すいません。全く、人様の世話になっちゃいけないって言つてたのに……」

光樹が唇を尖らせて極々ぼそつと言つたのだが、常康は聞き逃さなかった。凄みのある笑顔を閃かせ、光樹の顔を覗きこむ。

しかも無言であるから、普通の人間ならば詫びの1つも入れたくなるだろう。だが、これも酔った時の常康の常套手段なので、光樹は軽く流した。

ふすまが閉じられ、居間は嘘のように静かになった。

3人の間に会話は無い。壁掛け時計の秒針の進む音と、爽奈の小さい寝息が聞こえるのみだ。

みな、常康の話の内容を心中で復誦し、それぞれに感じ入っている様子だった。

やがて、紗弥菜がおもむろに腰を上げた。

「私達も寝よ」

成佳と真優はそうだね、と首肯する。

「じゃ、私はテーブルを拭くから、紗弥菜ちゃんと真優ちゃんは、コップを台所の方を持って行って」

「分かったわ」

「はい」

因みに、テーブルにあった食べ物や食器類などは、既に光樹が随時片付けていた。なので今は、酒が入ったコップが人数分あるのみ

で、他に何も片付ける必要がなかった。

コップを洗い終え、紗弥菜と真優は居間に戻ってきた。無防備にも大の字で体をぴんぴんに伸ばして寝ている爽奈を、紗弥菜が抱きかかえて3人は揃って居間から出た。

そこに、仲良さげに雑談する侑治郎と光樹が、2階から降りてきた。

「お、寝るのか？」

ほぼ素面に近い侑治郎の問いに、紗弥菜は頷きつつ少し面映そうに視線を逸らしながら、投げるように答える。

「少量とは言え慣れないお酒のせいで、眠くなつたのよ」

「はははは、まあ、日本酒だからな」

侑治郎が苦笑した。酒に強いのか分からないが、常康に大量に勧められたのにも関わらず、全く酔わなかったのである。

やや顔色の悪い女性陣に比べて血色も良く、本当に何もなさそう
だ。

「……あなたは沢山飲んだくせに、大丈夫なのね」

卒然としてこみ上げてきた気持ち悪さを、唾を飲むことで治め、紗弥菜が更に突っ込んだ。

「何でだろうな」

侑治郎は渴いた笑いを発するだけである。

会話が途切れた所で、満を持したように光樹が進み出てくる。

「今日は本当にありがとうございました。父ちゃんも『若い女の子と話せてよかった』と、言っていましたし、僕もみなさんとまた逢えて楽しかったです。それに」

一旦声を止めてにこりと微笑み、みな顔を順繰りに見つっ、続けた。

「姉のことも改めてよく知ることが出来ましたし、みなさんとの仲もますます良いことが分かって安心しました。これからご迷惑をおかけすると思いますが、どうか宜しく願います」

誰かが返答する前に、丁寧にお辞儀し、お休みなさい、と、一言

言い残すと階段を軽快に上がって行つた。

「本当に良い子だね。こーちゃんは」

真優は、目を細めて純粹に光樹を褒める。

「そうねえ。日本でナンバーワンの弟と言つても過言じゃないわね」
成佳も重ねて褒め称える。

「爽奈も爽奈なりに、大変な人生を送っていたのよね……」

腕の中でやすやす眠る爽奈の無垢な顔を見ながら、常康の話を述懐する紗弥菜。

「ま、親父さんの言つた通り今は自分を思う存分出せてるみたいだし、いいんじゃないか」

あくびを噛み殺し、若干間の抜けた調子で侑治郎が言つた。

「そーちゃんと居て楽しかったねー。私は今まで生きてきた中で、最高の2年間を過ごしたと思うよ」

真優に言われてみてみなが、爽奈と過ごしてきた日々を心に浮かべる。嫌な出来事が皆無と言つてもいいほどであり、良い出来事だけがどんどん脳裏を埋め尽くして行く。

自然と表情が柔らかなものになり、心根が温かくなる気がする。

察知したかたまたまなのか、爽奈が幸せそうに相好を崩した。それはまるで過ごしてきた日々を思い出してくれる親友達に、感謝するような可愛い笑顔であつた。

20章……それぞれが歩み続ける道

「しゝあわせなら、手をたゝたこう」

「あわわゝ」

「しゝあわせなら、たゝいどでしめそうよ、ほら、みゝんなで手をたゝたこう」

「あわわゝ」

「すとおーつぶ！ 誰だー、インディアンの真似をしてるのは
っ！」

「はーい、ぼくですー！」

「また空也かー。やってくれるじゃないの。覚悟は出来てるんだろ
うね？」

「ぜんっぜんできてないよっ！」

「あつ、こら、待てっ」

教室から飛び出して行つた空也を捕まえる為に、爽奈も物凄い勢
いで教室から出て行つた。

「またでていつちゃったね」

「ねー。これじゃまにあわないよねー」

呆れ顔で口々に言い合う園児達。と、ピアノの前に1人の男子園
児が座り、みなの方に顔を向けた。

「じゃあ、またぼくがせんせいの代わりをしてあげるよ」

「星夜くんはピアノがおじょうずだからね。きょうもおねがいー」

「うん、まかせて！」

昼休み。

爽奈が子どものように嬉しそうな表情を浮かべながら、弁当を食
べていると、1人の壮年の女性が近付いてきた。

「あ、えんてふ」

口をもごも言わせながら気さくに声をかける爽奈に、園長の鍋

島加代子は苦笑を滲ませつつ、爽奈の肩を軽くぽんぽんと叩いた。
「あんた。また練習をそっちのけで空也を追っかけ回してたでしよう?」

「んぐっ」

思わず噴飯しかけた爽奈だったが、手で口を押さえて何とか防いだ。コップに入ってたお茶を、口内に入っていた咀嚼物と一緒に飲み込むと、深く安堵の息をついた。

「だって、ふざけたうえに逃げたんですもん。手を叩けばいい所でインディアンみたいに掌で口を叩いて『あわわ』ですよ。そりゃ、とっ捕まえて叱らなきゃ」

なるほど、と頷く加代子。

「確かにその行為について叱るのはいいわ。でも、別に追いかけてもいいんじゃない。他の園児達をおろそかにしてしまっっては、いつかみんな爽奈の言うことを聞かなくなるわよ。それに、逃げた園児の対応については、他の先生が担当するって前にも言ったばかりじゃない」

厳しい語調が雨あられと爽奈を襲った。だが、爽奈は不服そうに頬を膨らませ、言い返す。

「その担当の脩治郎が今日は居ないから、私は必死で追いかけたんですよ。万が一道路に飛び出して轢かれたりでもしたら、どうするんですか」

「あ……」

言ったきり、口をぽっかり開けて二の句が告げない加代子。

「『あ……』って加代子さん、まさか……」

爽奈の危ぶむ声が耳^{じだ}を打ち、我に帰った加代子は軽く喉^い払いをし、気まずそうに取り繕う。

「そう言えば、成佳ちゃんの方は大丈夫なのかしらね?」

「大丈夫も何も、ほぼ1週間後は秋^{しゅう}明祭ですよ。今更ドタキャンってことはないでしょう」

数年経ち成佳は、声優としての転機を迎えていた。これまで端役・

脇役を多数こなしてきたのだが、1月から始まるアニメで主人公役に抜擢されたのだった。

当然、プレッシャーは計り知れないものがあるが、それでも成佳はスケジュールを空けてでも加代子の呼びかけに応じたのだった。

「それもそうね」

「あ、そうそう。昨日なるさんに電話したら、後輩の子も連れて来るとか言っていましたよ。名前は何て言ったか忘れましたけど」

「そう、それは楽しみが1つ増えたわね」

莞爾と笑う加代子に、爽奈が更にあっ、と言い、付け加えた。

「まゆっちの人形劇で使う人形も、もうちょつとで出来るみたいですよ」

真優は野瀬保育園内にある学童クラブで働いていた。手芸の腕はここ数年で更に上がっていて、ぬいぐるみ作りから端を発し、セーターや手袋やマフラーや刺繍など縫い物関係なら何でも出来るようになった。今もこうして、ぬいぐるみ作りを依頼されている。「真優ちゃんには大変のことをさせたわね。終わったら、学童クラブの先生方も誘ってみんなで打ち上げでもやりましょうか」

大賛成とばかりに首肯してから、喜色満面に開口する。

「いいねー。いや、いいですねー。ぱーっとやりましょーうよ、ぱーっと」

「ふふ、別に無理して丁寧語を使わなくていいのよ」

照れくさそうに頭を掻いてから、爽奈はまたも不満をぶつたれる。「それにしても、侑治郎と紗弥菜の休みが一緒ってどういうことなんです」

侑治郎と紗弥菜は爽奈とともに、野瀬私立保育園に勤めている。得意の泳ぎを活かし、同保育園内にある野瀬スイミングクラブで週3日ほど教えている。園児や小学生のコーチも担当し、丁寧且つ優しい指導で高い人気を得ていた。

紗弥菜は、前述通り野瀬私立保育園で働きながら、小説を毎年投稿し続けている。が、未だに賞に恵まれず、作家としての道はまだ

まだ遠そうだった。

「どういうことってたまたまよ。あ、もしかして……」

加代子は含み笑いを喉で響かせ、爽奈をからかう。

「何ですか？」

怪訝に問う爽奈。

「何でもないわ。と、私は用事あるから失礼するわね」

「はあ」

「じゃ、午後からも頑張つてね」

そう言つと加代子は、そそくさとその場から立ち去ってしまった。

（最後のは何だったんだろ）

勿論、からかわれたことなど全く分からない爽奈であった。

「さあー、みんなちゃんと着替えたね！　じゃ、砂場へ行つてよし！」

園児達が元気な声を挙げて、砂場へ駆け出して行く。季節的には結構厳しいものがあるが、子どもは風の子元気の子と爽奈が勝手に提唱した為、長きに亘って続いている。しかし、流石に今週末までと園長の加代子に釘を刺されているので、実質今日が今年の砂遊び納めになっていた。

伸びをしながら軒下から出ると、木枯らしが爽奈を見舞った。身震いを隠すようにまたひとつ伸びをして、雲は多いが晴れた空を見上げる。

季節柄、普段から底抜けに明るい爽奈でも感傷に浸る。

（おかーさん、元気でやつてるかなあ……）

と、雲間から太陽が現れるや、暖かな陽光が爽奈を包んだ。それだけで母親が答えてくれたのだろっ、と思った。

爽奈は空に向かって顎を引き寄せると、視線を正面に戻し、砂場へと元気よく駆け出して行った。

園児達に負けないような笑みを、閃かせながら。

終

あとがき

まずは読んでいただき、ありがとうございました。

なぜ、保育士になりたい人物を書いたのかと言いますと、私自身
がなりたかった職業のひとつだったんですね。

多分、小学校5年生ぐらいの時から漠然と思っていたのでしょう。
6年生の時、総合学習が何かの授業で複数のクラスメイトと紙芝居
を作って、保育園を訪ねたことがあるんですよ。あまり憶えていな
いのですが、園児達は喜んでたと思います。紙芝居終了後は、園児
達と遊んだんですが、複数の園児にぶんぶん振り回されました。楽
しかったですし、今となっては良い思い出です。

では、なぜ保育士や幼稚園教諭の専門学校に行かなかったのか。
答えは単純でピアノがまったく弾けないのです。弾けるとしたら、
エリーゼの憂鬱の最初の テレテレテレテレテ の部分と、
ねこふんじやったを高速で弾けるぐらいなもんなので、もののあつ
さりと諦めました。まあ、未練はありますけれども。

それでは、本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7293w/>

良い子の味方

2011年9月16日21時59分発行